

# 多摩川の河川清掃についての歴史と一斉清掃の実施による参加者の意識と散乱ゴミの実態についての調査

1 9 9 6 年

小 島 あずさ

多摩川クリーンエイド事務局

# 目 次

課題、調査研究の目的、調査研究の期間、調査研究の方法 .....	1
調査研究の結果－河川利用者に対する調査 .....	2
アンケート用紙 .....	3
アンケート結果 .....	4
アンケート結果グラフ .....	9
清掃活動団体に対する調査 .....	16
アンケート用紙 .....	17
ヒアリング結果（テープおこしまとめ） .....	19
自治体担当者に対する調査 .....	94
アンケート用紙 .....	95
ヒアリング結果（テープおこしまとめ。青梅市はテープなし） .....	97
ヒアリング発言ピックアップ .....	129
結果からの考察 .....	134
今後の課題 .....	136

# 助成研究結果報告書

## 課題『多摩川の河川清掃についての歴史と一斉清掃の実施による参加者の意識と散乱ゴミの実態についての調査』

### 調査研究の目的

多摩川の流域各地では、古くから住民団体や地域団体、奉仕グループなどの手によって河川清掃が実施され、『〇〇市クリーン作戦』といった形で定着している所も多い。しかしそれぞれの活動状況については、正確な把握がなされていなかった。

例えば、自治会などを通じての参加人数や収集したゴミの総量は結果が残っているが、日常的な小規模な清掃やイベント絡みのものについては、『実施された』ことのみが辛うじて記録されているにすぎない。

一方で、従来のような単なる『美化清掃』としての側面だけでなく、河川の問題の一つとしてゴミ問題をとらえていくなれば、流域全体の状況をつかむことが必要となる。そこで、各地の活動の歴史的経過と活動状況を調査し、流域全体での清掃美化活動がどのような主旨と規模、内容で行われているのかを知り、河川における散乱ゴミ問題を改善していくための効果的な手法を検討することを本調査の目的とした。

### 調査研究の期間

1994年4月1日～1996年3月31日

### 調査研究の方法

流域住民だけでなく観光客や釣人、スポーツ愛好家など河川利用者に対して河川の散乱ゴミや清掃活動、河川環境全般についての意識調査を行う。年4回（春夏秋冬）定点でのアンケートを実施し、様々な年齢層、利用目的別のゴミなどについての意識の傾向などを明らかにする。

また、各地の住民団体に対して、従来の活動経過及び河川の利用状況の変化、ゴミの状況の変遷などについてのヒアリングを行う。特にゴミの流入や不法投棄、あるいは生活排水などの影響による水質の変化についても意見を聞く。

流域自治体の河川清掃担当者にも、ゴミの回収、清掃活動への協力、河川の散乱ゴミそのものについてなどをヒアリングし、これらを対比させ検討する。

## 調査研究の結果

### ◇河川利用者に対するアンケート

アンケート用紙により、1994年8月、11月、95年2月、4月の4回（春夏秋冬）定点で聞き取り調査実施。

調査地点は本川上流部の沢井、下流部の登戸、和泉多摩川の3か所。これらを選んだ理由として、沢井は遊歩道や美術館や料理屋があって四季を通じて観光客が訪れる場所であり、登戸・和泉多摩川は、下流部ではあるがバーベキューなどのアウトドアレジャーにより沢井とは異なるタイプの利用者が多い場所である。立地の違いと利用者層の違いを比較するためにこの3か所を選定した。

いずれも最寄りに鉄道の駅がある点は共通している。

# リサーチアンケート

ひこ ちき ばし

あなたはズリどのタイプ?  
 わりとポイ捨てをしちゃう... たまに捨てる...かな 前は捨てたけど今は捨てない...ない ぜったいに捨てない!

ゴミ拾いをしたことは  
 ない ・ ある

一斉清掃などの清掃活動に参加したことが  
 ない ・ ある

清掃活動には  
 関心が ない ・ チャンスがあったら参加したい

どの主催でしたか?  
 自治体・自治会・市民団体  
 仲間・その他( )

どこから来たのでしょうか?  
 上流から流されてきた ・ だれかが捨てた

川のゴミはめだつのは?  
 おみかん・たばこ・花火・つり具・食品の箱や袋  
 スーパーなどの袋・粗大ゴミ( )  
 その他( )

「だれ」でしょうか?  
 観光客や 地域の 遊びに来た人 ・ 住人 ・ 業者 ・ その他( )

川のゴミ...あなたは どう思いますか?

あなたの考える特効薬は?

- ◎ きょうは、川に...  
 ( )を( )に( )から( )で( )と来た。
- ◎ よく来ますか? ( )  
 いいえ ・ はい ( )
- ◎ また来ようと思っていますか?  
 はい ・ いいえ ・ わからない
- ◎ きょう、ゴミがどまりましたか?  
 いいえ ・ はい ( )  
 どうな?
- ◎ この川や川の水について思うことを何ども。  
 (うらに)
- ◎ 最後に... あなたの年齢は?  
 ( )歳です

(どこかにおいて ゴミ箱に捨てる・持ち帰る) ( )  
 ( ) ( )  
 ( ) ( )

※ ご協力ありがとうございました ※ —川ゴミ研究会—

# 川のゴミについて

(調査人数：178 無回答：16)

汚い、汚いと思う	30名
ひとりひとりの意識やマナーの問題、自覚の必要性	16名
ゴミがない方がいい	13名
持ち帰る、自分のゴミに責任を持つべき	13名
よくない、いけないと思う	11名
美しくない、美観を損ねる	7名
ひどい、見苦しい	4名
イヤだ、気分が悪い	4名
わりときれい	3名
悲しい、残念に思う	3名
きれいにしたい、どうにかしたい	3名
年々汚くなっている	3名
はずかしい、困ったもの	2名
パーベキューにくる人のマナーの悪さ	2名
きれいになった	2名
拾った方がよい、定期的にボランティアできれいに	2名
釣り人は割合きれいにする	2名
どーでもいい、関心ない	2名

## その他(抜粋 各1名)

- ◇川の奥(上流の)にも年々人が増え、今までなかったところにまで、ゴミがある。
- ◇自動販売機の足元にそのまま缶を置いていたり、遊歩道に灰皿を空けていく人もいる。誰が始末するかを考えていない。
- ◇みんな大切にしようがよいと思う。
- ◇日曜日に来る家族連れが捨てる。
- ◇隠すように捨ててある。個人というよりは社会通念や教育の問題。  
このままゴミ拾いをしても悪循環である。
- ◇ひとりひとりが注意していくこと。我が家にあったらどうか。日常生活の常識。
- ◇常識が必要だと思う。缶から、水筒へ。
- ◇つりをしていて川の汚さを実感。
- ◇(ゴミを)なくすのは難しい。  
若手には怒ることができても、年取っている人にはだめ。

◇市民活動も大切だが、定期的に清掃局でゴミ掃除をするのが大切だと思う。

◇週末に車でバーベキューにくる人のゴミがすごい。

◇以前は市の「ゴミを捨てないで」という看板があった。

議員に頼んで何度か市に片付けてもらったが、誰かひとりがゴミをおいていくと、あとの人が同じようにする。

◇きれいにしたとしても、また数日たてば、増えてしまうと思う。

◇土にかえるものとそうでないものの区別が大切。

◇川の中のゴミと岸辺では違う。

◇水質の問題、水が汚れるから困る。

生活排水が流れ込んでくるのはおかしいと思う。

◇目の前にあればじゃま、遠くであれば無関心。

◇花火は音もうるさいが、拾いにくい。

◇ビニール製品が多い。

◇ひどい。近所では、「母なる川」。

遊びにはいっぱい来て、でもゴミは持ち帰って。

◇汚いと思う。でもそれを見ても何もできない自分がもどかしい。

◇ひとりひとりが考えていかないと絶対に片付けられない。

# 特効薬は

(調査人数：178 無回答：24)

意識改革、意識した行動	45名
それぞれが持ち帰る	25名
ゴミ箱を設置する。ゴミ箱やゴミ捨て場を増やす	16名
ない	11名
捨てない	10名
ゴミ拾い	8名
教育・行動で訴える	7名
罰金制度	7名
持ち帰りの呼び掛け	6名
監視員	3名
看板	3名
袋を持ち歩く	2名
ゴミの害をPRする	2名
ゴミ箱をなくす	2名
行政がやるべき	2名

その他（抜粋 各1名）

- ◇ここで皆で泳ぐ
- ◇法律をつくる
- ◇「柵」をつくる
- ◇少数でやってもだめ。皆で気をつける
- ◇人をいれない
- ◇市の方で予算措置などを含め、力をいれる
- ◇多くの人が捨てていくので、自分も捨てていいのではという心理になる。
- ◇ここに住んでいる人がこの辺の川をきれいにする
- ◇10メートル間隔でゴミ箱を設置
- ◇大人が生き方の中で子供に伝えていくことが必要
- ◇缶やポリ容器飲料のデポジット制度の導入
- ◇「ゴミを捨てるな」より「いかに自分たちが自然を守るか」という問い掛けの看板がいい。
- ◇川崎市はしていないが、分別するとよい
- ◇ゴミを持ち帰るのは最低限のルール。「約束を守ること」しかありません。



# 川や川の水について

(調査人数：178 無回答：132)

汚い .....	15名
（思ったより）きれい .....	8名
汚くなった .....	4名
魚への悪影響 .....	4名
きれいになった .....	4名
水が少ない、水不足 .....	4名

その他（二重回答あり 各1名）

◇小さい頃は泳げたが・・・。（これに類する意見が他にも）

◇川の底が見えなくてびっくりした。

◇もう少しきれいになってほしい。

◇上流の問題だと思う。

◇清掃も人数が多い方がいい。

◇人の集まるところにゴミ箱がなさすぎると思う。

◇下水道を完備するといいい。

◇大切にしたい。

◇場所によってゴミが違う。

◇以前は洪水になると臭いがすごかった。最近水がきれいになったらしく、魚や鳥が来るようになった。

◇人々の関心しだい。クリーン活動があらゆる方向から行われるのを期待しています。

◇昨年あたりから水不足が深刻。

自然の恵みにもっと意識を高めて、真剣に考えなければ。

◇たき火の跡が残っている。

◇日照りで雨が降らないと、川は酸欠状態になり、ヘドロやメタンガスが発生し、魚が少なくなってしまう。

ゴミが多く、特にビニール袋が多い。釣りをする時も困る。

◇市の清掃の人が来てほしい。

◇川はそのままとっておくべきだ。工事などすべきじゃない。洗剤などは一回フィルターを通してから流すべき。

川のゴミについて<そこから見えてくるもの>

(調査人数178のうち、有効回答154)

汚い、年々汚くなってきた	22.7%
個人の意識や行動に問題。それぞれ責任を持つべきという意見	21.4%
この状態はよくない、どうにかするべきという意見 (例：どうにかしたい、残念に思う、よくない、ゴミがない方がよい)	19.5%
美観の面からの意見 (例：美しくない、見苦しい、気分が悪い、はずかしい、イヤだ など)	11.7%

特効薬は？<そこから見えてくるもの>

(調査人数178のうち、有効回答154)

個人の意識改革や行動 → (捨てない、持ち帰る、袋を持ち歩くなど)	54%
ゴミ箱を置く	11%
現場での行動を促すための措置 (例：看板、監視員、持ち帰りを呼び掛けるなど)	8.4%
特効薬はない	7.1%
恒常的な啓蒙 (例：教育、大人が行動や生き方で示す、ゴミの害についてのPR活動など)	6.5%
禁止・罰金などによる誘導	6.5%
ゴミ拾い	5.2%
行政の対策の必要性	3%

川や川の水について<そこから見えるもの>

(調査人数178のうち、有効回答46)

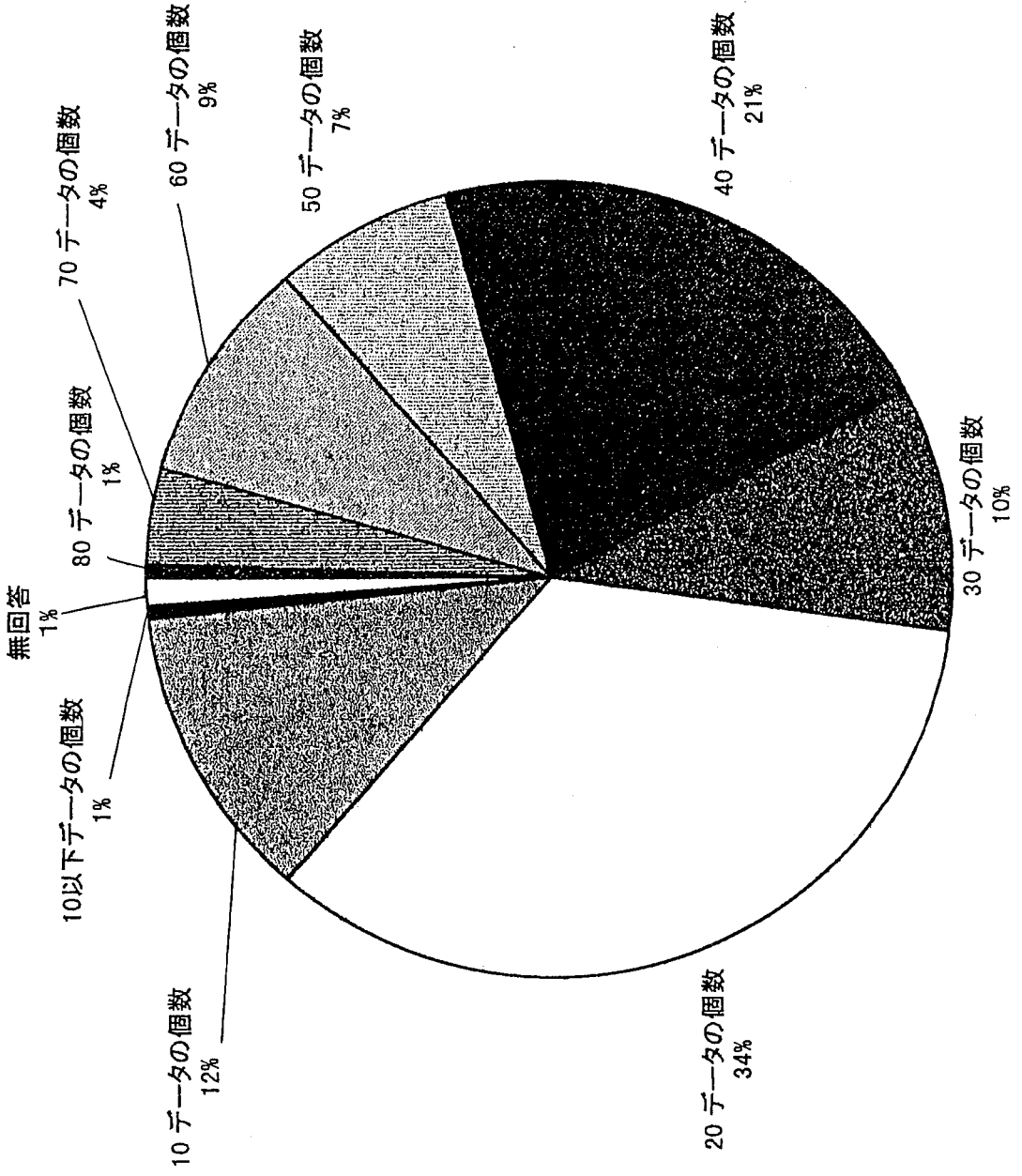
汚い、汚くなった	41.3%
きれいになった	17.4%
水質や水量に関する意見	15.2%

アンケート結果グラフ

年代

調査人数：178

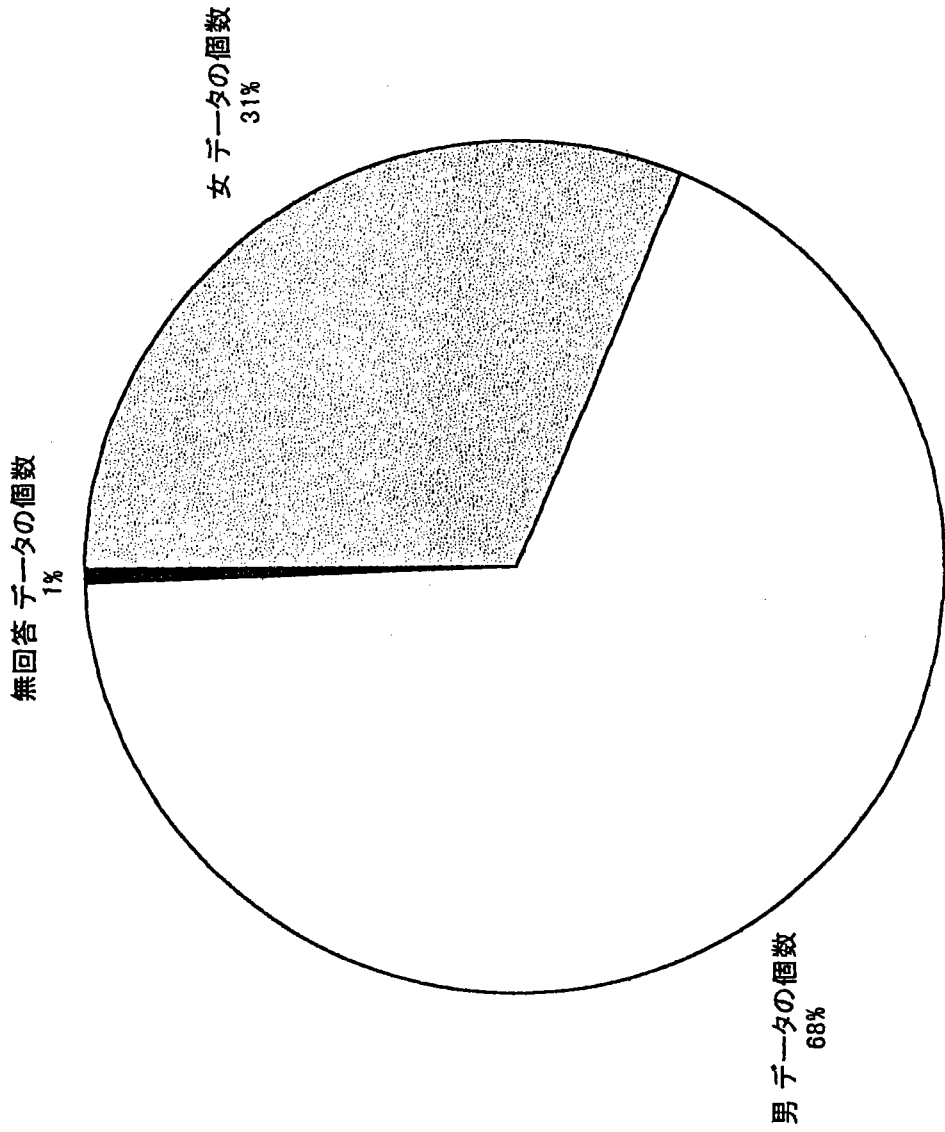
無回答：2



**性別**

調査人数：178

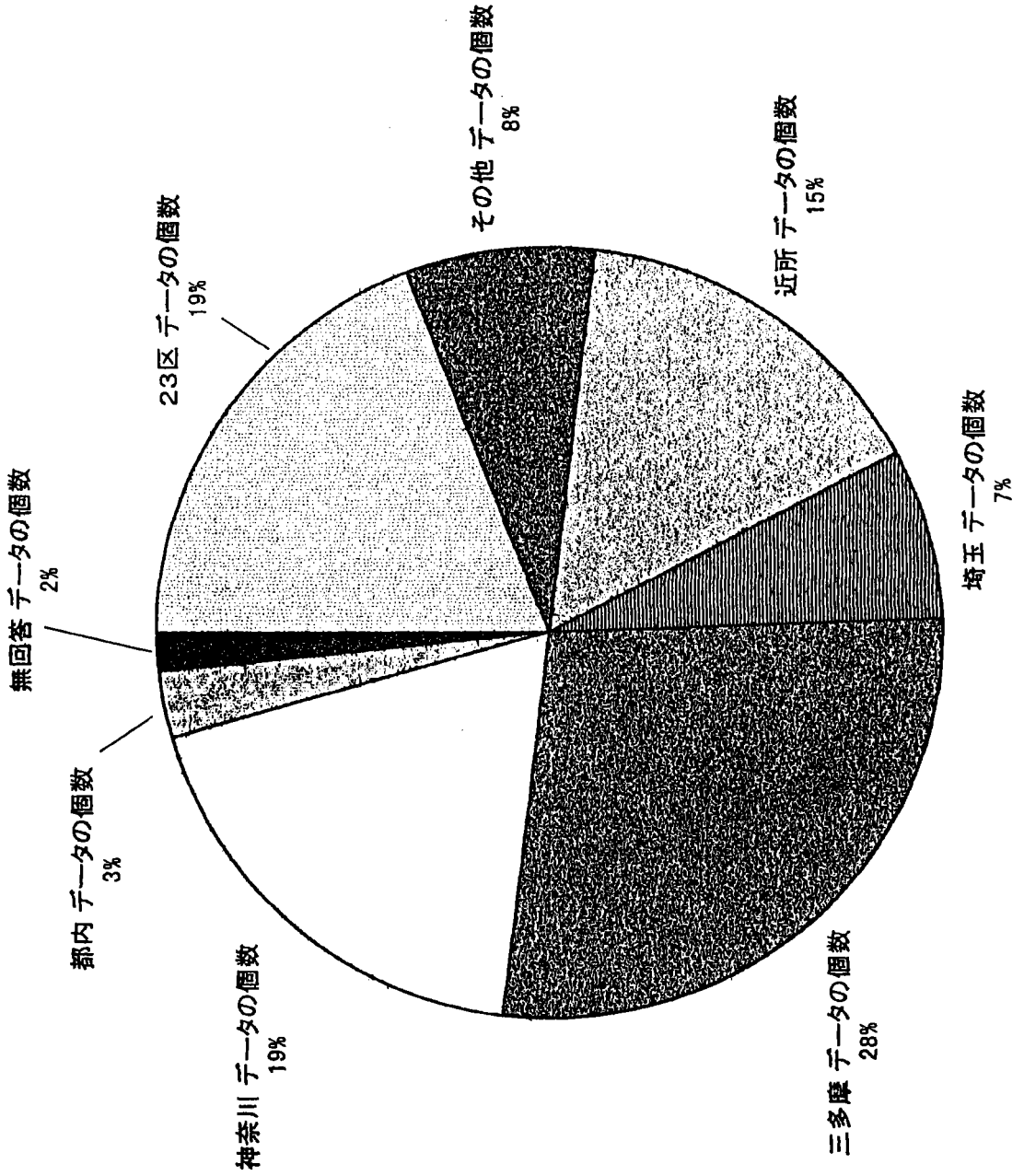
無回答：1



どこから来たか

調査人数：178

無回答：3

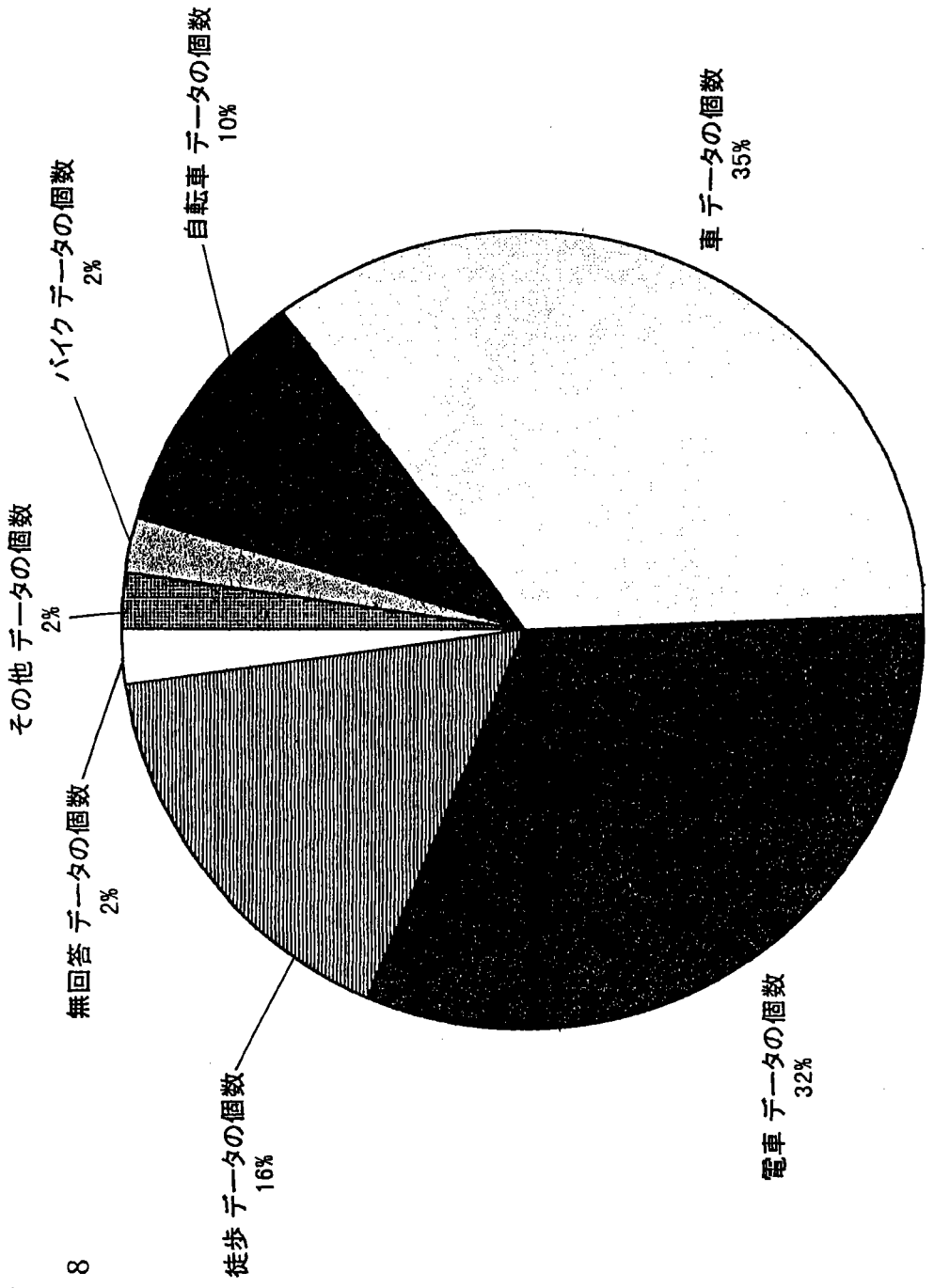


その他 (内訳 / 13)	
家	5
学校	3
仕事場	1
鹿児島	1
大分	1
長野	1
青森	1

# 何で来たか

調査人数：178

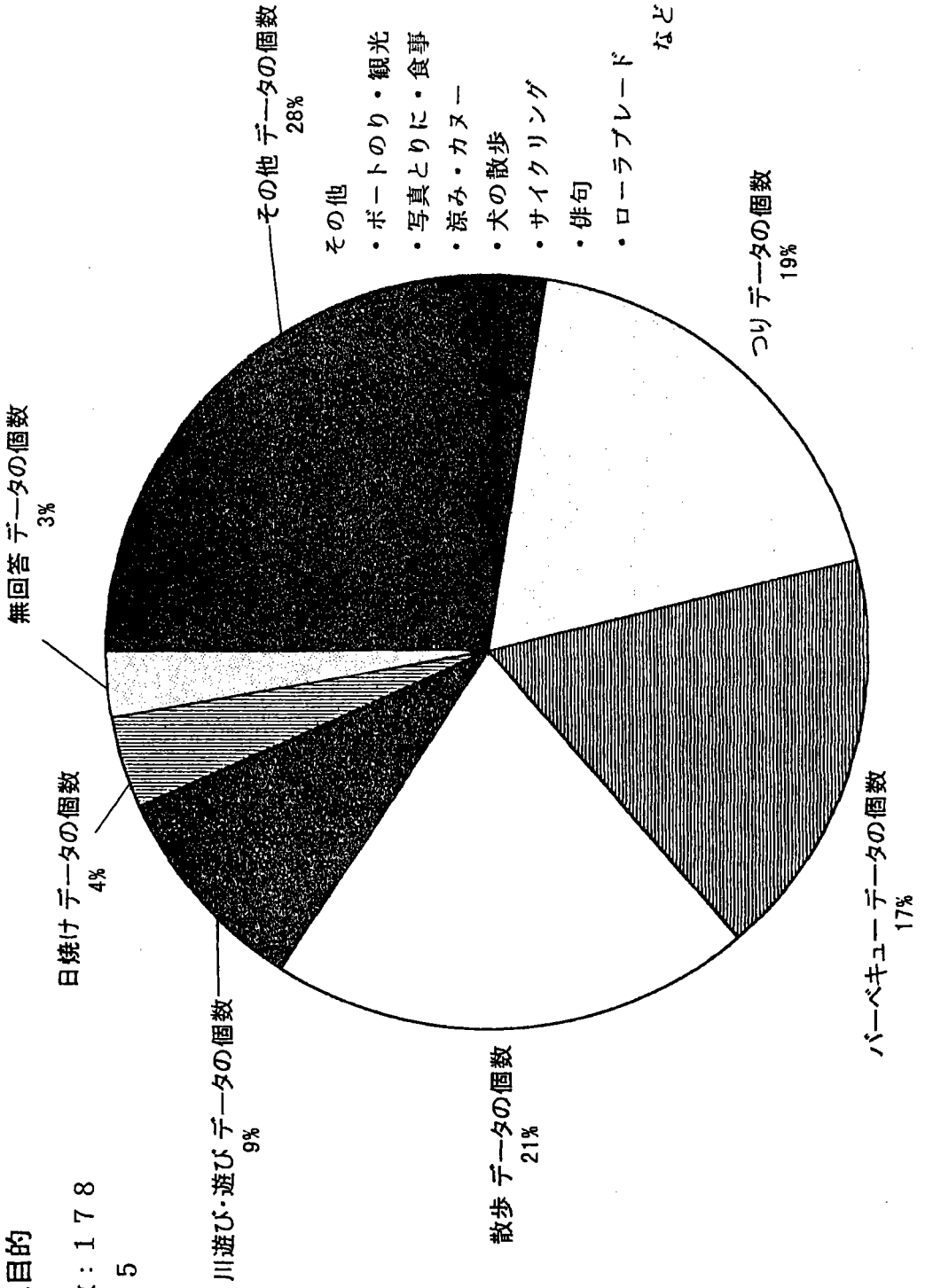
無回答：4



# 来た目的

調査人数：178

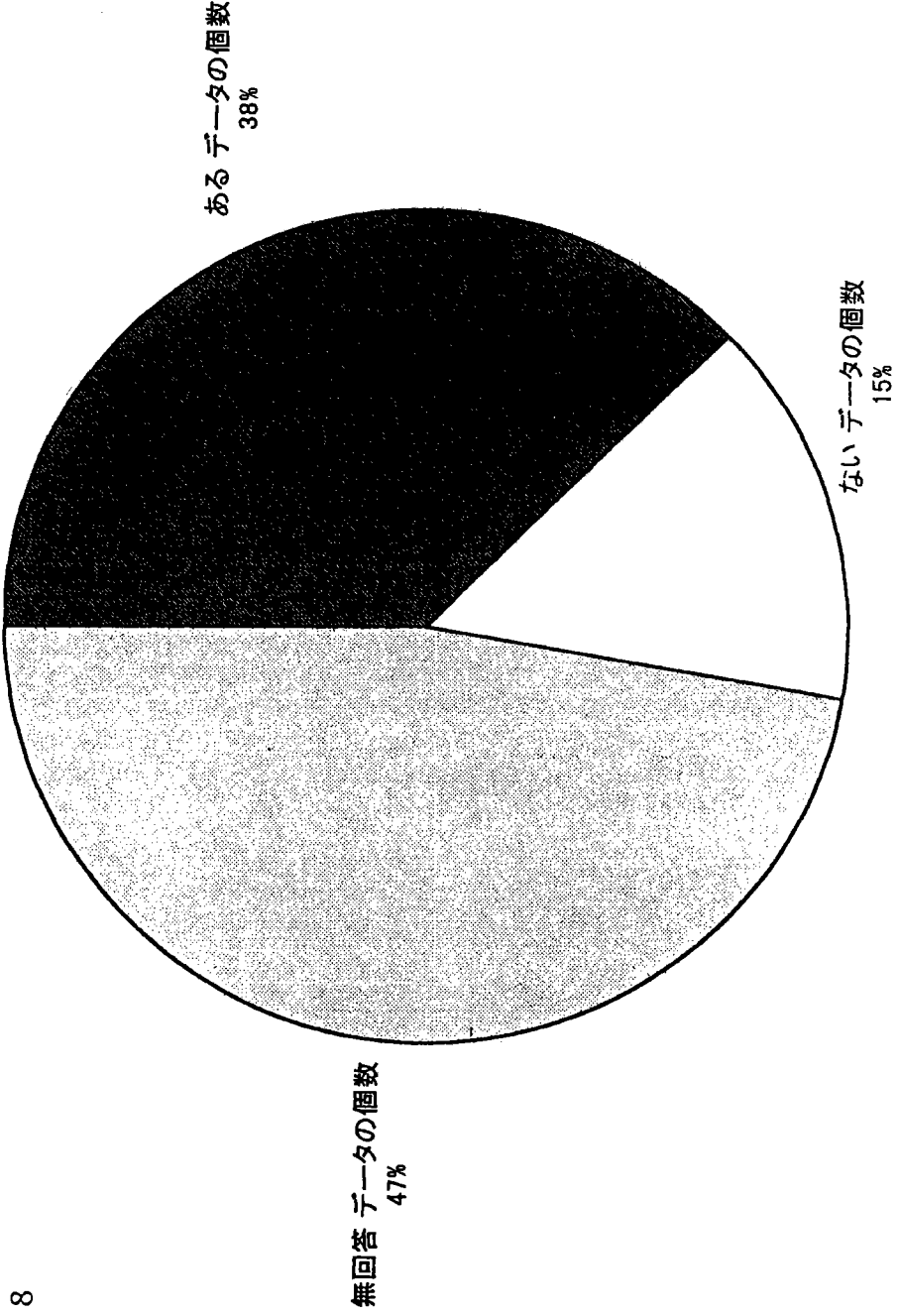
無回答：5



# 一斉清掃への参加の有無

調査人数：178

無回答：84

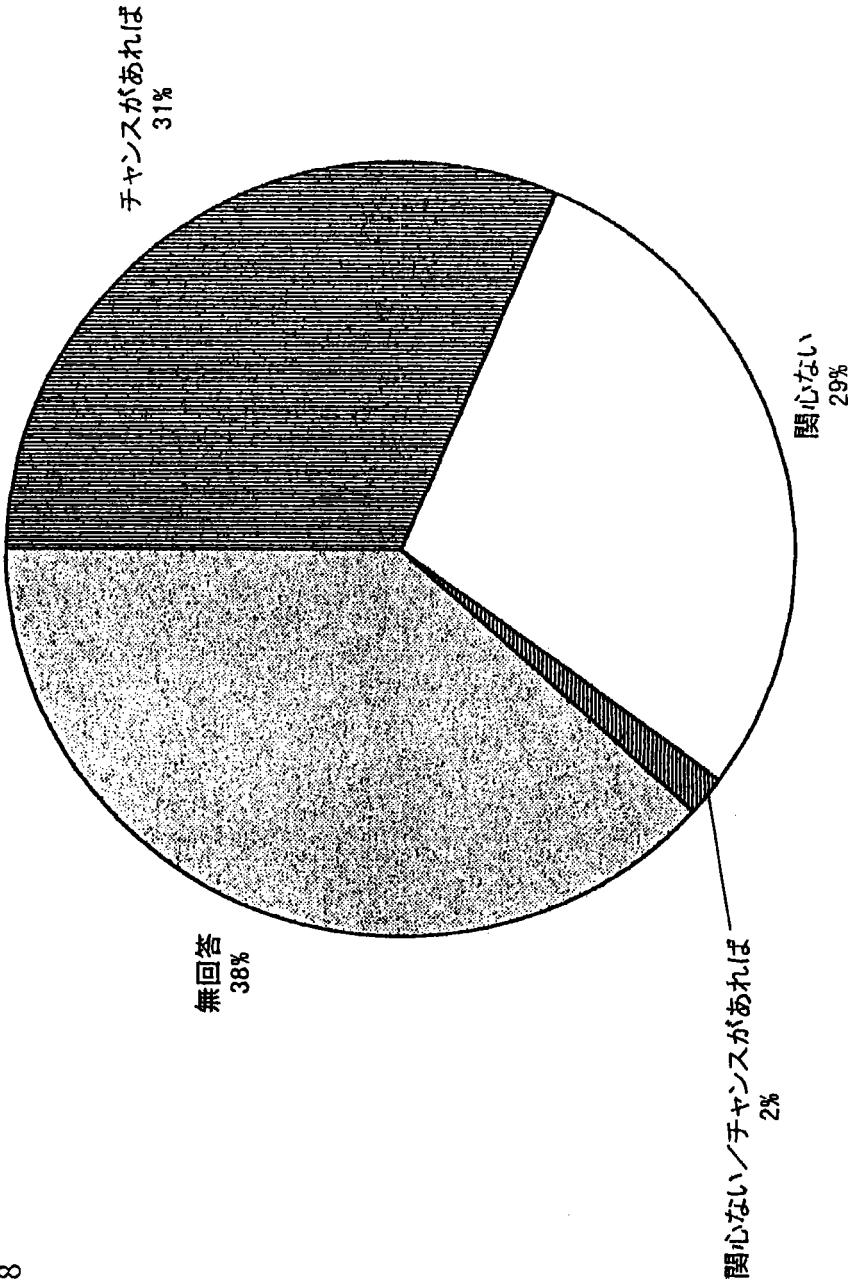




# 清掃活動への関心

調査人数：178

無回答：68



◇清掃活動実施団体に対するアンケート及びヒアリング

文書送付形式によるアンケートだけでは、十分な回答を得にくいと判断し、アンケート用紙の設問事項を中心にヒアリングをおこなった。

対象とした団体は自治体担当者からの紹介、東京都環境保全局発行の民間団体名簿その他から抽出した。

応じていただいた団体は次の通り（ヒアリング実施順）

『多摩川同好会－佐伯正利氏』

『玉川上水の環境を守る会－有賀喜見子氏』

『青梅市環境美化連合会－峰岸氏』

『多摩川・千川上水の自然を守り清流を復活させる会－中里崇亮氏』

『東京アマチュア無線ネットワーク－澤田倉吉氏』

『国際ボランティア学生協会・I V U S A－下村誠氏』

『全日本釣り団体協議会・日本溪流釣連盟－佐々木一男氏』

『疑似餌釣連盟（J L A A）－相川直行氏』

多摩川流域における  
河川清掃活動についてのアンケート

団体名

代表者名

区市町村名

I. 河川清掃活動についてお聞きします。(あてはまる項目には○印を付けて下さい。)

1 いつから清掃活動を始めたのですか? ( ) 年前から

2 なぜ清掃活動を始めたのですか?

- |            |               |
|------------|---------------|
| ・昔からの行事なので | ・川原にゴミが多かったから |
| ・川が汚かったから  | ・社会奉仕活動の一貫として |
| ・何となく始めた   | ・その他( )       |

3 清掃活動を始めて変化はありましたか?

<河川>

- ・水がきれいになった
- ・川遊びをする人が多くなった
- ・水生生物が増えた
- ・あまり変化はない
- ・汚くなった
- ・その他( )

<河原>

- ・ゴミが少なくなった
- ・遊びに来る人が多くなった
- ・植物が増えた
- ・あまり変化はない
- ・ゴミは増える一方だ
- ・その他( )

4 どのようなゴミが目立ちますか?(一番多いゴミには◎を付けて下さい。)

- |                                   |                                   |                               |                                 |
|-----------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 空き缶・空きビン | <input type="checkbox"/> たばこ      | <input type="checkbox"/> 花火   | <input type="checkbox"/> 食品の箱や袋 |
| <input type="checkbox"/> 釣り具      | <input type="checkbox"/> スーパーなどの袋 | <input type="checkbox"/> 粗大ゴミ | <input type="checkbox"/> その他( ) |

5 拾ったゴミはどのようにしていますか?

<分別方法>

- ・可燃ゴミと不燃ゴミに分別
- ・缶・ビンのみ分別
- ・分別していない
- ・その他( )

<処理方法>

- ・清掃担当課へ連絡し、回収してもらう
- ・ゴミ置場へ出す
- ・持ち帰る
- ・可燃ゴミは燃やす
- ・その他

6 困っていること、苦労していることはありますか？

- ・参加者が限られてしまう
- ・拾う人以外は無関心だ
- ・ゴミの量が多い
- ・拾っても拾ってもキリがない
- ・その他（
- ・宣伝方法がわからない
- ・持ち込みゴミに閉口している
- ・粗大ゴミの処理
- ・特に問題はない

7 嬉しかったこと、良かったことはありますか？

- ・河原がきれいになる
- ・ゴミを捨てる人が少なくなった
- ・人とのふれあいの場になる
- ・動植物を身近に感じられる
- ・その他（
- ・気分が良い
- ・健康的である
- ・遊びに来る人が増えた
- ・特にない

8 清掃活動中、他の人に声をかけられたことがありますか？

- ・どういう団体なのか聞かれた
- ・「ご苦労さま」と言われた
- ・その他（
- ・目的を聞かれた
- ・団体の活動内容を聞かれた

9 清掃活動を他の人にも呼びかけていますか？

- ・積極的に呼びかけている（例えば…
- ・あまり活動を知られていない
- ・これ以上人数を増やしたくない
- ・その他（
- ・口コミで広まっている
- ・問い合わせたら参加を勧める

10 自治体からの支援はありますか？

- ・補助金（                      ）円
- ・記念品や粗品（                      ）
- ・特にない
- ・その他（
- ・ゴミ袋
- ・軍手
- ・自治体職員の参加

II. あなたの団体についてお聞きします。

1 いつもは、どのような活動を行っていますか？

佐伯正利氏（多摩川同好会）

Q 団体名は多摩川同好会でよろしんでしょうか。

もちろん、佐伯さんの多摩川同好会では釣りをするっていうということで、清掃活動が主な活動ではないと思うのですが、清掃活動についてお伺いしたいと思います。

多摩川での清掃活動というのは、何年前位からなさってますか。

A 約18年位になります。

Q 清掃なさるきっかけは？

A きっかけはね、先程話されたように、ゴミを拾う人は拾うのね。釣りに来る人は、家からゴミ袋持ってきて、持って帰った人が何人かいたわけ。それをみんなが見て、これはもうみんなでやらなきゃだめだということ、ゴミを拾おうというのが始まって。なおかつきっかけはね、毎日釣りに来ている同士は顔は知っているわけね。でも、名前がわからないわけ。だからペンキ屋ならペンキ屋。昨日もペンキ屋が来てたとか、建具屋さんが来てたとか、それじゃあっていうんで、会をつくって多摩川を守ろうっていうわけで、多摩川同好会っていうのが、国立市報にも載ったんですよ。

そしたら、定年でもう辞めるから、参加させてくれていう人が多かったわけ。そのときにちゃんと条件つくるわけね。多摩川同好会っていうのは、釣りだけじゃないですよ。もうゴミ拾いが主だからって。会員が一時60名いたの。

条件つけたにも係わらず、俺は多摩川同好会に入ったのは、ゴミ拾いするためじゃないっていう風に始まるとね、忘年会の時に喧嘩口論があるわけ。そういう人にはね、あなた承知して入ったんでしょ、と。それがいやだったら辞めてくれ、と。それでそういう人を全部ふるっちゃって、今は35名位いるんだけど。その連中が一番いい、合っている。私が言わなくても、自分から終わればね、どんどんどんどんゴミ拾って、高速の下からね、みんな拾いだす。例会とか総会っていうと、家族も来るからね、子供さんから奥さんからみんなゴミ拾いしてくれるわけ。だから、高速からこの下はゴミが全然ないんですよ。

また同好会の人、普段も釣りに行っているから。例会とか大会じゃなくて、その時にもみんなゴミ袋持っていくから。一か所に置いておくの、1か月に1回必ず、例会清掃するから、その時にみんな下げだしちゃうわで。ここだけは、クリーン多摩川のときも、みんなビックリしたわ。あれ、ここは全然ないじゃない、なんて。夏場はね、多摩川の中に私もぐるんですよ。ねあかりがあるから、そこに潜ってみると、自転車、オートバイ。

夏場は潜って、みんなひっぱりあげて、出しちゃうけど。

Q いろんなことなさってますね。そうやってみなさんがやってくさっているの、ゴミがほとんど出ないとか、普段きれいになっているということなんですけど。川全体では、いかがですか。

A ズーと拾いきれないからね、自分の区域だけで。私が希望するのは、多摩漁組合でも国立支部だからね、国立はここからこまでっていう風になっているから。あとは、日野橋の下にあるんだし、我々みたいな会ができればいいと思うんだよ。そうすりゃ、自然に綺麗になっちゃうと思うのね。

だから、我々の下の区域に行くと、もの凄。缶がいっぱい拵がっちゃってね。あれはもう一人や二人じゃやりきれない。だから、多摩川に釣りに来る人はね、多摩川が好きで来るんだから、こういった会ができればね、きれいになると思うんだよね。一ヵ月に一回できれいになるんだから。この間も、ごたごたあったけど、高速の下で我々がみんなゴミを拾っているわけだよね。袋持って。家族できて、親父がビール飲んだ缶を投げたわけ、そこをみんな拾ってるんだから。そこで家の会のやつが、「我々がね、いつもこうやって綺麗にしているんだから、缶だけは捨てないでください」と。そうしたら、その人が酔っぱらっているもんだから、からんできてね。やっと話つけたけど、そういう人がいるんだから、目の前で投げるんだから。子供もいるんだから、子供のためにもよくないよってということで、奥さんも気の毒がっちゃって、もう酔っぱらっているから勘弁してくれって言うから、今日はいいけど、こういうことのないようにしてくださいって言って、話つけたけどさ。そういう人もいるんだもの。

弁当たべりゃ、そこへんに置いて帰っちゃうし。随分看板も出したのよ。そうしたら、建設省で怒られちゃってね。許可とったのか、とかさ、うるさいんだよね。ゴミ籠も、自分の知っている連中が商売しているのいっぱいいるから、じゃあ、同好会に寄付するよって言うの、籠を。そうして下置くと、また建設省に怒られちゃうでしょ。家庭のごみを持ってきちゃうんだって。川へ。建設省じゃだめだっていうから、もう置いてないけどね。

今日なんか、多摩川行ったけど、家の連中が6、7人いるからね。みんな袋持っているから、毎日拾っているのと同じだよ。だいたい。

Q 缶が多いですか。

A 缶だね、ビール、ジュースの缶。それが一番多いね。

Q スーパーの袋とかは？

A 多いね。スーパーの袋にちゃんと入れて置いていってくればいいけど、ごったでいれていくでしょ。国立市なんかは、缶は缶で別にしなくちゃ。それをくさっちゃっているやつみんなより分けるのはたいへんなんだもの。

若いものにも、そういうのだけは手袋してやれって言ってやっているけどね。

Q 拾って集められたゴミは、国立市の分別に従ってわけて、最終的な処理はどうかさるんですか。

A ゴミは市で持っていってもらおう。

Q じゃあ、あらかじめ連絡してあって。

A そう。市から、お伺いたてて、缶と燃えないゴミと燃えるゴミとわけなくちゃいけないんだけど、同好会の場合はいいですよ、と。そういう許可をとっているからね。5つや6つの袋ならいいけどね、多い時は20くらいになるんすよ。それだと、下げだすのがたいへんなわけ。橋のところには入れないようにしているんだけど、その鍵を持っているから、車いれちゃうわけ。車で積んで出すわけよね。そしたら、車が入ったら建設省が降りてきて、怒られたわけ。

こういうわけだって。それでもだめだっていうんだよな。俺も頭きちゃってさ。そうしたらこの間、そこに魚道ができたんだよね。その落成式のときにね、府中の体育館で一杯飲んだときに、建設省のお偉いさんが隣に座ったから、話したわけ。こういうわけだって。「とんでもない、そんないいことしているのに、車をなんて。構わず入れてくれって」その人に名刺の裏に書いてもらってね。回っている監視員というのは、建設省の下請けなんだよな。

Q 委託されている。

A そう。もし文句言ったら、これを見せてくれって。許可もらって、今入っているから。それから、多摩川同好会っていう旗をたてて。それをやっていたら何も言われぬ。だから車いれて、ゴミを全部出して。ゴミ置場あるからね。

Q 会員の方の、年代はおいくつの方くらいが多いですか。

A 一番上が、75かな。一番下が30代だな。

Q そうすると、30代、40代、50代、60代くらいが。会としては、毎月一回例会を？

A 第3日曜日ね。

Q そういうときは、35人のうちのどれくらいの方が参加されるんですか。

A いまはほとんど出るね。

Q みなさん、熱心なんですね。もともと釣りの仲間であらして、ゴミ拾いをなさってね、仲間意識みたいなことは、なにか変化はありましたか。

A 同好会っていう赤い帽子でね、「同好会」って入っているから。へんなことはできないって自覚があるわけね。はずかしいことはできないって。

だから、その人がゴミの袋をね、知らない人の横のジュースの空き缶なんかを拾っているから、今度来る人はね、自分で袋を持ってくるようになるわけ。

よく、天狗巣が落ちてて、はとの足にひっかかるとか、よくありますよね。ああいうのやるのは、釣り師じゃやらないのよ、本とは。だいたい、はじめて来た人と子供とか。そういうのが、きれりゃあ切れっぱなしで帰っちゃうのよ。釣り師の人は絶対やらないよ。天狗巣があれば、長いのがあれば、ライターでもしちゃうとか。うちの方はみんなそうやっているから。どうも気にいらぬね。見てればね、ベテランの釣り師はなおさらやんない。

Q 釣り師の人口が多いんで、相対的にビギナーの人のマナーを知らない人が多いっていうことなのかな。

A だから、同好会は子供がいれば、釣り方を教えたり、ゴミは絶対ちらかすなよっていうことを指導しているからね。

例会が終わって、釣った魚を計量して、景品だすわけ。それが、終わると同時にゴミ拾いするから。ゴミ拾いしている間に役員が、芋煮会みたいなことして、毎月、大会にはやるの。芋煮会のなべでもね、こんな大きな鍋をね、おれが天童までとりにいったの。知り合いの家にあったもんでね、使わぬって言うから、じゃあくれて。こんな大きな鍋だからね、500人くらいは。

そうするとね、同好会では使いきらないの。30人くらいじゃさ。知らない人にもやるからね。せっかく、天童までもらいにいったから。それから、鍋をのせるヘツツイってやつね、あれを3万かけて俺造ったの。それでもったいないから、そんな話があちこちで伝



わってね。ナンヨウジっていうお寺でね、鍋でなんかやってくれて。あそこ5、600来るんですよ、除夜の鐘をつきに。お寺で甘酒を出してたんだけど、こんな小さな鍋でやってもしょうがない。イッシンかいてというのができてね、その鍋持って行って、31日に芋煮会みたいなのをやるんですよ。今年で3回目だけど。これだけの鍋で一鍋つくって足りないくらい。だから、今度は鍋お寺におきっぱなしにしておこうと思ってさ。

Q 鍋の運搬もたいへんですよ。

A たいへん。それは会の7人で、10万かかりゃあ、一人1万いくらって。どうせ、いづれ私がいくとこだから、だからまあ、やっておくけど。大きすぎて鍋つくれないからっていったら、あるところから釜をくれたの。これはちょうどいいからさ。10月の大会には芋煮会をやるうって。

Q 今後、会全体としてはどんなことをやろうと…。

A 別がないけど。役員がね、しょっちゅう一杯やるかって集まって、いろんな話をしているけど。そんな程度で。会員はこれ以上増やさないようにしようって。増やしちゃうと、またゴタゴタになっちゃう。気心の知れた人、誰かの紹介っていうならいいけど、漠然と会入りたからって入れちゃったために、ガタガタになっちゃったりするからね。みんなの希望だから、あまり増やさないようにしているんだけど。

Q 会員はみんな男の方ですか。

A いやいや、女性会員もいるのよ。2人。その人はコイ釣りやる、リールで。

それもね、旦那さんがやって、奥さんが弁当持ってきて、最初は。見てて、私もやるってやったら、こんなのがかかっちゃったわけ。それで病み付きになっちゃって。もう一人は、その奥さんの友達なんだけど、遊びに来て、ゴミ拾いをしているのみで、私は釣りはできないけどゴミ拾いはできる。それで入会させてっていうから、入って。ゴミ拾いをしている間に、仲間がこの竿使ってみな、とかいっているうちに。おもしろくなって。いま、リール竿で釣りして、毎回来てますよ。朝5時から、暗いうちから、それも多摩ニュータウンから来るのよ。

一番遠くが八王子の川口、だからもう五日市に近い方。多摩センター、府中、国分寺、立川だろ。そういうところからみんな来てるからね。

Q みなさん、コイなんですか？ 釣るのは。

A ヘラもいるし、リールの部と手竿の部とわかれているんだよ。

リールの方に一人責任者を置いて、補佐を一人置いて、手竿の方にも。そうやっているから、まとまり早い。

Q あの網は何に使うんですか。

A 投網は下にまだ10反くらいありますけど。俺は子供の頃から投網やってたから。だから、本とは投網なんだけど。釣りはやらなかったんですよ。まあ、子供の頃やったけどね。多摩運送にいたんですけど、会長道具くれるからやれやれって言われて。じゃあ、会社辞めたらやるよって言ったら、浮きはくれる、竿はくれる…。それでしょうがなくて義理でやったの。そうしたらおもしろくなっちゃって。

それからは手竿専門にやっている。もう網はやらない。網はみんな人にくれちゃっているよね。

Q もともとこのへんで、投網を…。

A そうずっと、多摩川でやってたよ。昔はよかった、昔の多摩川。

Q そうですね、オリンピックからこっちが、だめになったってよく聞きますけど。

A ようするに、米軍が来てからね、立川に。だって多摩川の水は三尺流れりゃ、清水だっていったんだから。1メートル流れれば清水だって言うのね。俺なんか、16、7の頃に多摩川で砂利ふるいやったの。穴を掘ってさ、水がスーと澄んでいくのね。それをやかんに入れて、お茶沸かして飲んだんだから。昔のことを考えると、今の多摩川は残念でしょうがない。魚は上から見えてね。朝おきりゃあ、縁側からポンとおりて、裸足で行って泳いだんだから。もうあの頃は、水中メガネなんてないからね、眼鏡かけないで、水の中で目をあけて、魚を追いかけて遊んだんだもの。だから昔の、俺の子供時分は蚊帳つって寝たの、夏の。暑いから開けとくでしょ。そうずっと、蛍が蚊帳に止まって、あちこち。もうこれは、蛍もすごかったのよ。向こうの畑の終わりの所にママシタっていうのがあるんですよ。清水が。そこがね、冷たい水でね。だからみんな夏はあそこで西瓜冷やしたり、なんたりしたの。この向こうに矢川っていう川があってね。

Q 矢川の様子も随分と変わりましたでしょ。

A 蛍なんて、今みたいに、虫をとる網なんてないから。高箒持って行って、箒で蛍とったりね。

だから、我々は子供の頃は、よちよち歩きの時は、ママシタっていうところで、子供を遊ばせるわけ。もうちょっと泳げるようになると、矢川っていう、今でいうと幼稚園くらいの子だね、矢川で遊ばせるの。そこで、かなり遊べるようになると、この下に用水があって、そこで遊んで。用水にだって、シジミがいっぱいたんだから。シジミとりしたりさ。泳げるようになって、多摩川に行ったんだもん。

Q すごいな、ちゃんと段階をふんで。

A でも、いまの多摩川だって泳いだってどおちゅうことないと思うんだけどな。夏は泳いでるけどさ。このへんだって、我々の子供時分振り替えると、ほんとに変わっちゃったから。ここから向こうに家が一軒もなかったのよ。矢川の駅のところだって、単線だったから、駅に行ったら、ホームだけだから。あそこに止まると車掌が一番前に行って切符とるんだもん。俺なんか反対に降りちゃうから、切符いらなかったんだもん。畑のなかスーと帰ってきちゃう。

ホントに甲州街道のふちだけだからね、家があったのは。他は全然なかったんだからね。

Q みんな畑だったんですか。

A 平らな山ね、林。音大なんて、あのへんは山だったの。随分変わっちゃったよ、昔からすれば。

Q もうちょっとお聞きしたいことがあるんですけど、こういう活動をしていてお困りになっていることはありますか。

S：消掃していて、一番困るっていうのはなんだろうな。家庭から持ってきて、投げられちゃうやつね。それが手をつけられないほど、いろんなもの入っちゃって。それが一番苦労するね。それが小さい袋で捨てていくならいいけど、大きな袋でゴチャゴチャに入れて捨てていくから。

K：逆にこれまで活動されてきて、よかったな、と思うこととか。

S：一番良かったと思うことは、多摩川に散歩に来た人になんか、「ご苦労さん」って言われるのが一番うれしいやね。「おかげ様で、いつ来ても、気持ちがいいよ」なんていわれるとね、やってよかったなって。

K：そういう時になんでやってらっしゃるんですか、とか、どんな団体なんですとか、聞かれることはありますか。

S：ありますよ。

K：特に外の方に向かっていっしょにやりましょうとか、そういうことはやっていらっしゃらない。

S：やってない。だから、早い話が自分の釣り場は自分できれいにしようって。

K：ゴミ袋とか軍手とかは…。

S：そこにも資料が来てるけど、釣り振興会で全国一斉清掃デーのときにね、軍手と金鋏と横断幕、これだけ送ってもらって。金鋏と軍手は今使っているし、ゴミ袋ももらったんですね。

K：日釣振の一斉清掃デーっていうのは、年に1回ですか。

S：年に1回だと思うんだよね。5月21日にやったのかな、うちの方は。

K：同好会の会費でやっているんですか。

S：会費内でやってます。でも、ほんとは会費じゃできないんだよね。例えば、大会の時なんかゴミ拾いが終わってから、ちょっと喉渇しに夏なんてビールなんか飲むでしょ。そんなことしてたら、1か月2000円会費じゃできない。それで、景品だして。私の友達がコンビニやっていたり、酒屋がいたり。ちょっと寄付しろよって、もらったり。そういうので助けてもらっているんです。

それで一番大きなのがね、読売新聞の矢保専売所が後押ししてくれてるの。そんないい会ならって。だから毎月景品もだしてもらえるしね。

K：専売所の所長さんが…。

S：会員になっていますから。

K：理解があるんですね。

S：所長と若い集が会に入ってますからね。

K：毎日釣りに行かれるんですか。

S：監視員やってるから、ズーと日野橋の上の方まで回っているよ。毎日。これはもう40年やってますよ。それで気がつくんだけど、立日橋の下が凄いんだ、汚れて。今モノレールをやっているけど、その下。そこらじゅう、缶だらけ。

みんな釣り師もいけないんだよね。誰かが置くからみんなそこに置いてちゃう。日野橋の下っかわ。うちの区域じゃないけど、あそこは釣り場になっているの。半日かかったんだけどね、ゴミ袋でね40何杯でしたかな。一人が捨てるから、そこにみんなたまっちゃうわけ。行きたんびにやだなって思っていたわけ。しょうがないから、袋持って行って。

拾いはじめて、俺がやっていたら、やっぱりその釣りしている人が、佐伯さん一人じゃないへんだ手伝うよって。そしたら、また一人が手伝ってくれ。結局5人でね、そこだけきれいにしちゃったの。そんで、その人が明日役所に電話して捕りにきてもらうから、責任持ってやるからって言ってくれたから、道路に出しておいたの。そしたら次の日にきれいになっちゃったけどね。そんで、その人にこれからこの責任者でやってくれよと、いうことで、振興会からもらった袋を百枚単位で預けてあるの。そうするとその人がゴミ籠もってきて、袋を置いて、そしたらみんなそこにいれるようになった。いっぱいになるとその人がそれを出すじゃない。いまは、とてもきれいよ。

K：さっきおっしゃっていた、いろんなところで自分のところをやれば、きれいになりますよね。

S：あちこち、そういう会ができればいいなと思っているんだけどね。

K：私たちも全国で一斉にきれいにしましょっていうボランティアの会をしているんですね。できる面積って限られてますでしょ、でなかなか仲間が増えないっていうか。それがどこの方も悩みだって。

ちょっとずついろんな所でできればいいんでしょうけど。

S：だから、あのね。ゴミは持ちかえりましょうとかさ、釣り振興会の袋みたいにかいてあるでしょ。ああいうのを持って拾っているとね、周りの人もそこに捨てられなくなっちゃうんだよね。

うちの娘の亭主がね、平塚にクルーザーを置いてあるわけよ、自分で持っているわけね。お父さん袋くれっていうからね、持っていかせたら、仲間にみんな袋渡して、ゴミを拾うようになった。袋がなくなったらとりにこいって言っているんだけど、袋をくばっただけ

で違うって。海に捨てないって。どうしても舟の上だったら、飲んで投げちゃうじゃない。それをしなくなっただって。

K：気にはなっているんでしょうね。捨ててた人も。

S：だから、ちゃんとした人はそんな袋でなくてスーパーの袋でも持って行って、入れてかえってくるんだらうけどね。中には捨てる人がいるんだらうから…。ほんと捨てる人がいなくなっただって。いいことだっただって。

K：どうもありがとうございました。

S：（釣振興会の資料をみながら…）写真をみても、家のはこれくらいしかないわけ、他は多いけどね。うちは毎月やっているから、これだけしかないんだよ。

K：大きいゴミっていうとどういうものがありますか。

S：自転車とかオートバイ50CCのね。

釣振興会に入ってくれていわれたけど、漁業組合やっている立場から入れないから、会計にはいってもらったの。それで、こうやって資料送ってくれるし、ゴミ袋もらえるから。

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1995年9月29日

有賀喜見子氏（玉川上水の環境を守る会）

A ようやっと、水が流れたんですね。はじめのころは、東京都にかけあったって、水なんて到底流れませんよってな感じでね。夢のような話だったんですね。

まずね、水が流れなかったらね、環境がどうしようもなかったんですね。みなさんがいまきれいだっておっしゃるでしょ。玉川上水もね、長いですからね。いつかお歩きになってください。そうすると、流域で住んでいる人がどういう意識を持っているかによって、環境が全く違いますから。こういうものはタダであるものじゃないっていうことを、おわかりいただけるかと思うんですよ。本当にたいへんでした。私も仕事がありますから、その中でやるので、自分のライフワークと思っていたことを相当に削っても、そっちに時間を費やしたわけですよ。その位やらないと、日本の場合どうしようもないですね。

Q 会の活動を今ちょっとお休みっていうか…。

A 休みっていうこともないんです。お掃除だけね、ちょっと。人手がなくて結局ね、続けるっていうことがね。運動がある程度盛り上がりますでしょ、それを10年、15年続けるってね、たいへんなことなんですよ。

団体ができた最初はね、いきなり玉川上水の土手が崩されてね、一番木の繁っている森林が、上水側の木が伐られちゃったんですよ。そしてね、赤土がいっぱいでて、すごい惨憺たる状態になったんですね。近所がびっくりしてね。うちの主人がね、ほんとに全くなんにもしたことの無い人がね、中心になりましてね、調べたんですね。

井の頭側にはね、一言のあいさつもなくて、向こう側牟礼側の方に、それもね、既成事実みたいな感じで、道路も最初、これ道路じゃないんですよ。道路じゃない所にさっさと家を先につくっちゃって、その一角、不動産屋さんがやったんだと思うんですけどね、かつてね、既成事実として家が建ってたわけですよ。そこにこれじゃ歩きづらいから、舗装してくれとかって。既成事実をどんどん広げていったんですよ。そして、向こう側からこっちに渡るのに、橋が欲しいからって行って、向こう側からは、東京都の方に申請が、でてたらしいんですね。

でも、井の頭側には一言も、なんの情報もないんですね。東京都がいきなりね、予算ができたからっていうので、予算があまるとね、それでやろうっていうわけなんですよ。でいきなり、そういうのができたんで、びっくりしちゃってね。住民の意見を全然聞かないではじめちゃったもんですから、もうたいへんだったです。

その頃は、玉川上水っていてもね、お役所はその程度に思ってたんですよ。

それで一応ストップさせてね、話し合いなどいろいろしたんですよ。私たちは、市民運動なんていうのは一度もやったことないですよ。生まれてはじめてやるわけ。困ってましたらね、この土地で生まれ育った議員さんがね、市議会議員が2人いらしてね、その人たちが、玉川上水で昔ちょうちょ追っ掛けて遊んだような人たちが、バックアップしてくださって。ちょうどその頃ね、次々にね、玉川上水なんかしなくちゃいけないという団体がね、うちの他に武蔵野の方までいれて4つできたんですよ。その人たちが、全部連携をしてね。

その時どういう約束したかっていうと、一番最初はゴミの問題なんですよ。そういう橋をつくりますとね、ホントきれいなとこなんですけど、日本人の悪いところっていうのは、みんな橋からモノを捨てるんですよ。そういうこと気になったことありません？ ありますでしょ。

橋ができると田舎の川でもね、どこの川でもね、昔からみんなもの投げるんですよ。しかもその頃は水が流れていませんから、ほんとゴミ捨て場になっちゃうんですよ。ちょうど穴深いですからね。

まずゴミの問題ね。もし橋ができたら、ちゃんと市なり都なりがね、ちゃんと処理することって、約束とったんですね。それから、今木をいっぱい伐っちゃいましたでしょ、その分の木を植えてくださいっていう約束をしたんですね。

ところがね、私たちも運動なんてやったことなかったもんですから。そうしたら、まんまとやられてしまってね、木は何を植えたかっていうと、青木かなんかをちょろちょろと植えたんですよ。ひどいでしょ。全然、だましうちですよ。ゴミ掃除なんて全然やらないですよ。それでね、忘れもしないその橋は春仕上がったんですね、全然やらないで、夏になって夏が過ぎてもやらないですね。これは言ってやらなくちゃと思ってたら、9月の市議会が始まる前日に掃除に来たんですよ。市が。しかし、それ以後1度もこなかったんですけど。

私がカセットでもとっておけば、よかったですけど。というより、その頃はみんなやってましたから。ですけど、男の人が名前出す人もいないもんですから、しょうがないから、忙しい人ですから、何も運動はしませんけど、名前だけは代表になるかと、なったんですけど。ご近所もいっしょですからね。いっしょなんですけど、みんなそんなことは知らない素人なんですよ。そういう証文をとっておかなかったもんですから、まんまとだまされちゃったんですよ。それ以降一度も掃除に来ないんですよ。

引っ越ししてきたときは、東京にもこんなに凄いところがあるんだなって。こんなところを残してくれるんだったら、三鷹市に少しカンパしなくちゃなんて思ってたんですよ。

ところが、とんでもない話でね。永久保存林ってかっこいいこと書いてあったんですけど。永久にそこはそういうものだったと思ってたんですよ。とんでもない。一応私有地なんですよ、でも三鷹市としては、自然を残しておきたいんで、85パーセント三鷹市が税金



を肩代わりして払って。そして、保存林として置かしてもらっている。しかし、全部柵もしてありますか、人が入ったりはできない。例えば相続の問題が起きたときに、ここを売って宅地にしたいですからって言えば、いつでも解除ができるようなね。保存林は条例があるんですけど、籠抜け条例で。いつでも肩代わりだけは、都合のいいときはやるけれども、あとは持ち主が欲しいっていったらすぐ返さなくちゃならないっていう条例だって。そういうことも運動の段階でだんだんわかっていったんですね。

そこにいってみるとね、そこがね、またゴミ捨て場だったんです。どんなゴミがあるかっていったらね。いま産業廃棄物とか問題になっているでしょ、そういうものに近いものがね、例えばドラム缶。ドラム缶にね、廃液、廃油かわからないですけどね、汚いものがね、33個もでてきたんです。

トイレの便器だとかね、ビンだ、缶だって、すごいゴミがあったんですね。しょうがないから、こんなことしてると衛生的にもよくないしと思って、ほんとは市をもっと上手に使えばよかったんですけど。なんとかしなくちゃと思っている人たちが、この近辺に約10件くらい、いたもんですから。昼間女性だけで、だれかにリヤカーかなんかを借りてね、それに入れてね。お隣の奥様なんて、ハイヒール以外履いたことないっていう人が。車の入れない林から、車が入れるところまで運んで、林を全部清掃したんですよ。女性だけで。たいへんでしたよ。重いですよ、ドラム缶ひとつ載せるだけで、容易じゃなかったですよ。全部出してみたら、33個あった。

Q 集められたゴミはその時どうしたんですか。

A それは、さすがに市に言ったんですね。市が処分の車を持ってきて、処分してったんですよ。ですけどね、あそこは林だったんですけど、それに見られるようにね、玉川上水は水が流れてなくて、空なんですよね。最初はわからなかったんですけどね、関東ローム層っていう地層で水が満々ときますとね、土手がね、もの凄く固くなるんですよ。ところが、水がなくなってカラカラになっちゃうと、ポロポロとね。こぼれてきちゃうんですね。護岸はポロポロだし、そこに歩いてくる人はみんなゴミ捨てていくし、でもやっぱり涼しいから結構歩きにくるんですよ。羽村まで続いていますからね。そういう人とか、子供たちとか…。ゴミ捨てていくんですよ、汚いとね、よけい捨てたくなるだろうと思って。

ゴミの一群があるとしますでしょ、そうすると、2、3日の間にこんなになっちゃうんですよ。だから、ゴミっていうのは、汚かったらなお集まるってことなんですよ。それでしょうがないから、ご近所の人とね、ゴミ集めをはじめたんですよ。ほとんど、男の人が出てくることっていうのは、ないんですよ。第3日曜日にやるんですけど。私たちだってね、せっかくに日曜日ですから、予定ありますよ。日頃仕事してますからね、せっかくの日曜日ですけど。第3日曜日はしょうがないから、ゴミ集めましょってことでね、

みんな集まってやってたんですけど。男の人がでてくる家庭はうち以外ないですよ。

Q 息子さんがやってらっしゃったって。

A 息子はね、そのころ中学生。高校生くらいかな。うちの主人が日曜日はね、ほんとはね、夜遅い人ですから、日曜日は寝たいんですけど。出てきてね。女性は土手のところだけでしたらね、できるんですね。ですけど、中まで降りてやるっていうのは、上から見るのと違ってもの凄く厳しいの。相当深いんですよ。命綱つけて川のどこまで降りるんです。木の根っこつかまえたりしながらね。ですから、うちの主人と息子と、たまに私が降りると。

色々教育はしてましたけどね、いやな顔して拾っているんですよ。遊びに行きたいなっていうような顔してね、。そこで、暗示をかけたんですよ。自分のうちだったらどうする？って。自分の部屋にね、飲みかけの缶ジュースがこぼれてたり、鼻かんだのがあったり、食べかけのお弁当があったりね、自分の部屋にあったらどう思うって。

そしたら例えば、ここも自分の家だけども、日本の国土も自分の家だし、地球も自分の家だし、と思ったらね。原発の廃棄物なんて捨てないですよ。そういうところみんな繋がってくるわけですよ。地球は自分の家なんじゃないの？ そうでしょ。あなたは自分の家だと思ったらどうする？って言ったら、それから顔色が全然変わっちゃってね。何にも言わなかったですよ。それでもうずーと、主人がくたびれて出られないときでも、息子は、出て。やってくれてたんですよ。

長い間にはね、10年もたちますと、みんな「なんとかで行けなくてすみません」とかね、「今日はなんとかですみません」とかね、だんだん出なくなっちゃうんですよ。最終的には私と隣の隣の奥様と、女性は3人ね。そのうち1人になってくるわけですよ、それでずーとやってたわけなんですけど、息子が大学生になっても手伝ってましたね。それから、勤めはじめても手伝ってたと思いますけどね。

お勤めはじめてから、ちょっとたって、今のままのね、会社でずーと一生やるのはちょっとやだなっていうんですよ。もっと勉強してね、もっと世界的広がりがあることをやりたいって言いだしてね、コンピューターなんですけどね、西オーストラリア大学っていう、日本よりすごく進んでいるところに、オーストラリアなんて大したことないって思いますでしょ。すごいんですよ。そこにね、また一年大学院に行ったんですよ。それでもういよいよお勤めはじめてからも、手伝えなくなってたんですよ、でも向こうにオーストラリアに勉強に行っちゃってからは、川の下はできなくなっちゃったんですよ。

Q 他のお仲間もね、いなければ、つらいですよ。

A そう。最初はね、市も認めてくれてて、第三日曜日は、ある場所にゴミを集めておくとね、取りにくるんですよ。いくら言っても言っても忘れるんですよね。それで、また忘れてたじゃないっていうと、すいませんって、とりにくるんですよね。

もうね、例えば、それだけのことをやるって言うとな、私が一日つぶさないとな、できないくらいになっちゃったんですよ。それよりもね、時には朝走りにいったりしますでしょ、そういうときに、通るたんびにね、拾ってきて、自分のうちでゴミを取りにきたときにあれしてもらおう。缶やなんかは、洗ってね、リサイクルやなんかだせますから。で、しょうがないから、そうしようかなと。でも中はね、一人じゃ入れないですよ。

Q そうですよ、拾ったゴミを上げるだけでも。

A そう上げられないんですよ。拾ったゴミをね、一応綱につけてね、持ち上げてたんですよ。二つ向こうにね、新橋っていう橋があるんですけど。こちらへんで一番ゴミが多いところなんですよ。

なぜかって言うと、明星学園の高校があるんです。そこは自由主義の学校だからね、いい面もあるんですけど。朝来るのに吉祥寺の方から歩いてきてね、缶ジュース、いよいよ学校の門に入る手前で、ポンと投げて学校に入るんです。夏休みのときだけ、少しないんですけど。あとはいつでも。明星学園の生徒に決まっているんですよ。それでね、缶だけじゃなくて、食べたものを捨てていくとかね、ある時はね、学校の名前の入った自転車とかね。もう2回も投げ込まれてたんですよ。うちの息子がね、引き上げてね、返しにいくんですけどね。

私も校長先生に手紙書きたいと思ったんですけど、手紙書くには時間がかかるんですよ。色々なことやりながらじゃね、あっちにも手紙書き、こっちにも手紙書きってできませんからね。しょうがないから、日曜日にやることですから、校長先生はいませんよね。ですからよーく言い含めて、門衛のおじさんとかにね、校長先生にちゃんと話ししておいてくださいよ。明星学園の名前書いてあるでしょ、っていうんですけどね。なしのつぶてですよ。

学校がどうして、あそこの所が汚って先生たちが気がつかないのかというのも不思議ですよ。毎日通っているんですよ、先生だって、一般の人はね、私たちがやっている、たいへんですよって言う方もあるし、一度も手伝いましょうっていう人はほとんどいませんけどね。あるときなんか、袋下げて歩いてたら、「何とってるんですか？ なんか山菜あるんですか」って、呑気なこと言っている人もいましたけどね。まあ、そういう感じで、お掃除はたいへんでしたよ。

明星学園のところはあいかわらず凄いんですよ。

Q たまっていたのを一掃されたから、その後も定期的になさってれば、そんなに…。

A ある時ね、歩いてましたらね、男の子が飲みながら歩いてるんですね。あ、これは絶対捨てるなと思って、私くっついて行ったんです。捨てるとか、捨てないとか、そういう意識全然ないんですよ。飲んでいたら、こういう風に落っこちるんですよ。ゴミを捨てようとかね、投げようとかね。手が離れてね、そのまま捨てていくんですよ。

もちろん、これ拾って、ちゃんと家持って帰って捨てなさいって言いましたけど。そうとう、大きなお兄さんでしたから、もしかしたら、やっつけられるかもしれませんでしたけど。でもね、無意識族っていうのが多いんですよ。

Q 小さいお子さんでもそうですね。近くに塾がありましてね、帰りに遅いですから、コンビニでお菓子買うんですよ。見ると、食べる方にしか意識がなくて、そのどこに捨てようとか考えもしない。もうポロンと。

A 恐ろしいことですよ。

Q 私注意したら、くそババアって言われましたもの。

最初は、びっくりしてました。まず、人から言われることもないし、ましてや、ゴミのことでなんて。最初ね、びっくりしてポカンとしてるの。しばらくして、ちょっと離れたところに来てから、「うっせえ、くそばばあ」って言われました。

A もう一件はね、追っ掛けちゃったんですけどね。小学校の上級生くらいでしたかね。飲みながら、歩いてたから、どっかで捨てるなあって思って。くっついていったんです。今度は捨てたんですよ。捨ててね、そんなとこ捨てちゃだめよあって、言ったら逃げたんですよ。それでね、私追っ掛けてやった。(笑)

そいでね、「これ持ってって、自分の家で処分しなさい。こういう所にゴミ捨てるもんじゃない」って、「ここはあなたの住んでいる地球の上でしょ」って。「地球をきれいにしなさい」って言ってやったの。そしたらね、地球って言われたんで、けっこうびっくりしたみたいです。あ、それいい言葉だなと思ってね、時々使いますけど。

そういうことでね、ゴミの問題は未だに絶えませんがね。ゴミっていうのはね、ゴミだけ単独で考える問題じゃないっていうことをね。ずーと考えていますね。

やっぱりね、人間が住むね、私たちの拾っているゴミっていうのはね、見えるゴミでしょ。見えるゴミっていうのへね、人間にとってはね、まだまだ簡単なものなんです。これがね、見えないゴミほど怖いものはないんですよ。拾えないですから。

まあ、いくらか、怖いけども、まあまあなんとかなるのは大気汚染ですよ。このへんだったね、大気汚染をどうするかって言ったらね、あの、この緑が吸ってくれるんですよ。

このへんの大気汚染の玉川上水の緑と、井の頭公園の緑で浄化してくれているんですよ。ところが、環八雲とかいいますでしょ、あの雲が移動してきますよね。酸性雨っていうのが、ところかまわず降ってくるわけですよ。そっちの方がまだ怖いでしょ。もっと怖いのは、原発のゴミですよ。

教育用のコンピューターにマイナスの部分は何も入れないで、+の分ばかり入れてあるって。でもね、それを分からないっていう人たちが、大人も子供も含めて、不思議だと思いませんか？ みなさんはお若いから広島っていうのも、話でしかしないとしますが…。今ね、広島は何倍も何十倍も何百倍も凄いな、原爆と原発のゴミがあるわけですよ。普通最終的に処理ができる、全部これで大丈夫だっていうところで、薬とかだって売らんじゃないですか。

まあ、たまには副作用のあるのそのまま売ってたっていう場合もありますけどね、ところがね、原発の場合はね、そのゴミをどのように処理していいか、まだ研究ができてないんですよ。このゴミを完全なきれいにできるんですよっていったら、原発はすばらしいですよ。処理できないこのゴミがどれほど恐ろしいものかっていうことを、分かったもしたくないし、わからないっていうのはおかしいじゃないですか。トイレのないマンションよりもっとこわいですよ。

この間フランスで核実験がね、やったら、田中マキコさんがね、パリの真ん中で実験やったらいいって言ったでしょ。ずっと前から広瀬さんは、東京に原発をって言ってますよね。

ゴミっていうのは、見えてるものを処理するとも大切だけど、見えないゴミに対しての関心ね、そういうものがね、結局全部つながっていると思いませんか？

人間の知恵があるんですから、叡知の部分をつかって、悪賢いほうじゃなくてね、いいほうの知恵を使って、もしみんなが、省エネをしたりね、謙虚にやるとしたら、もっと地球は長持ちしますよね。

このままでは、本当に先が見えてますよね。

それを、子供たちに、どうしても教育しなくてはいけないなあって思うんですよ。私も、大学に勤めてますからね、若い人たちにわね、。それも音楽ですから、個人的に付き合っているわけですよ。そういう中では、普通音楽の人ではそういうこと言う人いませんけど、音楽のことばかり言ってますけどね。私はね、そういうことも分かった上でやらなければね、芸術っていうのはね、文章書くとかね、絵を描くとか、音楽、作曲するとか、歌を歌うとかね、そういうのは一つの手段であってね、その一番の根本は人間の中身ですよ。どういうことを考えているか、どう生きてるかっていうね、それがでてこなかったら、音楽も面白くないしね、絵だってただ色塗っているだけだしね。それは芸術とは本当は言えないと思うんですよ。そういう面言えば、やっぱり自分の毎日の生活をきちっとしていかになくちゃいけないっていうことに繋がるんだろうなって思って。少数ですけどね、私が係わっているのは本当に少数ですけど、そういうことを教えていかになくちゃいけ

ないなって思っているんですよ。

Q すてきですね。学生のように、そういう先生と会えるっていうのは、しかも音楽がやりたくてきてて、それをいっしょにやっていく先生に教えてもらえるっていうのは本当に大きいですよ。

A 普通先生はいいとこばかり見せていますけどね、私はひどいとこいっぱい見せているんですよ。ゴミ拾うのよなんて言ったら、「ここゴミ拾うんですか」なんて言うんですけど。草刈りもしますしね。酷いとこいっぱい見せますけどね。その後も、結局ゴミの問題はゴミだけでおわらないって。利害関係とかね、政治家でいうと票を集めることとかね、そういうことで玉川上水をどんどん食べ物にする人がいるんですよ。

3年前、持ち上がったのは、玉川上水の遊道を舗装にしたいって。そういう議員があったんですよ。その人は、結局自分の支持者の都合で言っているんですよ、すぐそこに住んでいる人なんですけどね。元は大地主の末えですけ、私たちが水を復活させたこととかも知らないんですよ。自分の住んでいる所がどうなっているか、玉川上水なんてみたこともないんじゃない。ところが、玉川上水の整備ときちゃうんですけどね。

コンクリートつかったり、そういうのが、整備だと思っているから困っちゃうんですよ。

毎日ジョギングする人も、舗装の上より土の上の方がいいって、わざわざ随分遠くから走りに来る人もいるんですね。そういう方たちに、署名をしてもらったんです。あっという間に800人くらい署名が集まっちゃったんですね。このへんで犬の散歩にきたりする方にもちょっと話たらね、やあここだけは絶対に死守しなくちゃなんておっしゃって。議会に請願だしてね。主人も私も学校休んで議会にいったね、補足説明したりね、随分やったんですけど。まあ、こちら側が勝ちましたけど。

Q 相続がらみの問題はこれからも起きるでしょうね。

A ですから、もう東京は木が減る一方なんですよ。でもこれはね、上にたつ人がちょっと考えれば、色々打つ手はあるんですよ。玉川上水っていうのはね、上水だけで残っているっていうところって、価値が半減しちゃうんですね。まわりに林や畑が残っていることによって、玉川上水が生きてくるんですね。林のこともね、いっしょに勉強していたものですから、どういう条例になっているとかね。中には、議員さんのいい方が情報をくださったりしてたんですよ。それでね、そこに電気もつきませんでしたし、舗装になりませんでしたし。

そうすると宅地にはなかなかできませんね。そうしたら、持ち主の人が東京都にね、売りたいって言ってきたんですよ。タイミングがよかったんですね。バブルの最盛期だったのでね。東京都がお金を持っていたんですよ。

いっぺんに買うと、今度持ち主の方が税金がたくさんかかるわけでしょ。少しずつ買ってという約束になって、2年くらい前にね、半分位だったんですよ。今年また少しかってね。4団体あるんですけど、もう10年もやっていますとね、私たちなんて一番若いくらいで、みなさん本当に歩けなくなっちゃうお年寄りとかでできちゃうんですね。だから、団体っていうほどじゃないんですけど、まあ名前はありますから。みんなで相談してね、公園にするっていうとね、コンクリ運びこんだり、ブランコ作ったりするんですよ。それでね、ここはね、みんなが森林浴に来るところだから。林のまま残すように、林でみんながお散歩して入れるような、そういう公園にしてほしいっていうのを、署名運動をしている時にね、併せて申し入れいとしたんですよ。東京都だって、本当はアイデアでそんなにないんですよ。それを受けてくれたんです。一応私たちにこういう公園にするから、できれば、昔の武蔵野の林にしたいから、色々雑木があるからね、そういうものはとりたいて、でもね、その相談して、小鳥もいますからね、小鳥には枯れ木も必要なんですよ。どの枯れ木を残して、どの雑木をとり除くかね、立ち合ってくれて。一本一本調べましてね、一応いい林できましたから、あとで見てください。

私のゴミに対する考えっていうのは、環境といっしょに考えていかないと、いけないということ。見えるゴミっていうのは、これほとんど資源です。

うちなんか、三鷹市から税金返してもらいたいくらいなんですよ。ゴミほとんど出していないんだから。どうしても処理できないプラスチックのものとかだけでね、ほとんどゴミ出さないんですよ。

Q ドイツなんてやっていますよね。

A ミミズ入りのね。ミミズっていいんですよ、土をこうやってやってくれるから。

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1995年9月末

青梅市 峰岸氏

Q さっそくなんですけど、今までどういった形で多摩川の清掃活動をやってこられたのか。

A 私たちは、青梅市の今は名前が変わったんですけど、前は青梅市環境衛生っていうのがあったんですよ。環境衛生協力委員会っていうのがありましてね。その中で10年くらいかな、所属していたんですけど。最後に青梅市の連合会長をやってね。3年位前にやめたんですけど。いまは、名前が変わって青梅市環境美化委員連合会っていうんです。

Q いま、多摩川一万人清掃といった形で、市の方も力を入れて取り組んでおられますけれども、10年位前の頃と今と比べて、例えばゴミを捨てていく人のマナーの変化とかゴミの質の変化とかそういったところはどうですか。

A だいぶ良くなったんじゃないですか。御岳溪谷なんかも一時観光地なんかも、ゴミ籠なんて置いたんですよ。そうするとどうしても持ちかえらなくて、そこに山のように積んでいっちゃうんですよ。それとどうしても、清掃活動なんかしても、捨ててあるのが多かったんだけどね。いまは、ずいぶんマナーがよくなっていますよね。

Q ゴミ籠が置かれたのを撤去されたんですか。

A そうなんです。撤去したらね、結局燃やせるものは自分たちで燃やしていっちゃうから。燃やした後はね、石なんか黒くなっていたりするけど。ゴミなんかが落ちているよりは、いいですよ。

Q 撤去した当初はどうでしたか。

A 大分抵抗はあったようなんですけど、それはね、PRはしなくちゃならないし。

Q 持ちかえりましょう！というような看板を建てるとか、アナウンスするようなことは実際になさったんですか。

A いまはね、そういった所には、環境衛生の方では、その方では協力委員会の要請があれば、捨てるなという立て看板はたってくれますけどね。



それと、夏休み入る前には、PTAで川をみたりね。危険なところには行くなという方法をとっていますから。

釣りなんかも好きですから、たまに行くたびに、気をつけていますけどね。

Q 市をやられる清掃活動を、市民の方がたくさんできてらっしゃるようですが、参加の要請は、自治会とか町内会から、各家庭に連絡をして、各軒一人ずつはでてください。というようなやり方をしているんですか。

A 多摩川1万人清掃活動というのを今年もやったんですけど、緑と水の方のね、いままでは環境衛生かのアレだったんですけど、そこの担当になりまして、各団体の自治会、環境協力委員会、老人会、婦人会、小中学生、ボーイスカウト、そういった各種団体の事前打合せがあるんですよ。

Q 各団体の代表が集まって、持ち場を決めたり。

A ミタケのカメジバシですかね。トモダまで、青梅市全域ですよ。多摩川だけでなく、ナリキガワ、オシキガワ？の方もやっていますけどね。

Q 川の中もなさるんですかね。

A 多摩川は危険ですからね。ナリキガワ小さいから、やっているようですけどね。ましてやミタケ渓谷はね、足を滑らせると激流ですから。

Q 小学校の川は危険ですってという貼り紙をずいぶんでてますよね。

そうすると、集めたゴミの方は市で責任持って回収してくださるんですか。

A ダストボックスのところね。持ってきておけば、その日のうちに持っていってくれますから。

Q これは年に1回でしたっけ。

A 1回です。

Q 夏休みの時期ですよ。

A あとね、場所によっては、ボーイスカウトあるいはボランティア活動でね、国道、道

路沿いのね、カンとか拾っているのがありますよね。

Q 場所によりましては、同じような形態で自治会とかからお願いがあって参加する。それを気持ちよくいかない方がいかない方がいたりして、出てくる方はいつも出てくる、出てこない家はずっと出てこないっていうことでね。それに対してみんなの町なんだからって。だせない家は、罰金じゃないですけど、500円とかお金を集めるとかっていうことをしていらっしゃる所もあるって聞いたんですけど。

青梅のあたりは、そのあたりはどうですか。

A それはやってないですね。

Q みなさん協力的ですか。

A ええ。環境美化委員連合会の傘下が、約700人いるんですよ。各地区地区に会長さんがいて、各自治会の単位に委員、指導員がいるんですよ、その下に推進委員っていうのも2、3人いるから、自治会員っていうのは全部その中でまとまっちゃうんですよ。それとチラシでやりますから。

Q そういう参加要請の面でお困りになることはなかったんですね。

A そうですね、あと資源回収なんかやっていますからね。

Q いま回収していらっしゃる資源っていうのはどういうものなんですか。

A 毎月1回やっているんですが、ほとんど新聞、雑誌、ポロね、空き缶、空きビン。そこらへんのことは、ゴミ問題検討委員会っていうのを1年間やりましたから。青梅市でね。

Q ミネギシさんの様なお立場の方が、集まって。

A そうですね、その資料お見せしましょうか。それで市長に答申をしてね。これが答申資料です。

一年間通してやりましたからね。

Q かなり頻繁に会合をもたれたんですね。

A そうですね。

Q リサイクルの促進、排出抑制の推進…  
不法投棄の問題なんかは、ここらへんはどうですか。

A ここらにはないんですけど、埼玉県境っていうんですか、青梅市の東の方、県央道なんかね、インターチェンジのできるところに、犬の死骸とかありましたよ。ここらへんだと、トラックが入ってくる道があまりありませんから。

Q 場所によっては、業者の不法投棄がね、片づけても片づけても後をたたないような所があると聞きするんですが…。

もともと青梅は水が綺麗なところなんで、観光客が多いと思いますけど、若い方が中心にバーベキューをしにきたりっていう方が増えましたでしょ。そういう方の、残していくゴミっていうかね、ゴミに関するマナーはいかがですか。

A 最近はそのへんがよくなった気がしますよね。なかにはね、注意すると、おじさんたちがやればいじじゃないかっていうような人もいますよ。  
全体としては大分よくなったようですね。

Q 1万人清掃の時に、軍手だとかゴミ袋だとか物品が必要になったりしますでしょ。

A 軍手だとか、タオル、ゴミ袋、そういったものは市で全部支給してくれます。

Q 例えば、飲み物とかね。

A 飲み物はね、でないですね。

Q 時間はどれくらいやるんですか。

A 2時間くらい。

Q 草刈りなんかもなさるんですか。

A 草刈りもしますよ。遊歩道なんかはね。

Q 市全体でこれだけの定着した行事としてなさっているの、これが一番の活動という

ことになるかと思うんですけど。もう少し小規模に散歩のついでにゴミ拾っている方とかいらっしゃるのではないかと思うんですが。

A このへんの人そんな人はいないね。沢井から上にいくと遊歩道がありますけど、あのへんはしょっちゅう歩いている人がいるから、けっこう拾っているようですよね。ただ遊歩道の草刈りもしなくちゃならないし、各地域に指導委員がいますから、自治会長さんとね、けっこうやっているみたいですよ。

Q その指導員さんっていうのは、パトロールもなさるんですか。

A たまには、してますよ。

Q みんな普通のお仕事をお持ちで、なにか一般市民の方が委託されてやっている感じですか。

A 結局自治会の役員をやってますからね。

Q 清掃活動の当日は、子供さんたちの参加も多いようですが、若い方の参加はいかがですか。

A あんまり若い方はでてこないね。でてきてくれるといいんですけどね。やはり、思い思いの遊びとかね。

Q このへんのゴミのことに限らず、多摩川全体の水辺環境みたいなのは、昔と変わって、例えば遊歩道みたいに人が歩きやすくなったところもある反面、ずいぶん悪い方になったところにあるとか。大きな変化っていうのは日頃かんじていらしゃることはありますか。

A 川へ下りる場所っていうのは、決められているからね。だから、そこに集中しちゃうし、ここらへんだとおりにたくぼきり広いところないし、ずっと丘を…っていうことはできないからね。どうしても一か所限られちゃうんですよ。

Q 水の事故も意外と多いんですか。

A ミタケの方が多んじゃないですか。観光地だから、カヌーなんかもやるから、どうしても岩の上でね、子供さんが、遊んでいると足をすべらせて落ちちゃうんですよ。今は、水温が17度くらいですかね、高いときは、22、3度くらいありましたけどね。

いまは、水温も高くなったけれども、14、5度だと落ちるとね、心臓麻痺ですぐですからね。

Q 今回、ダムの上側の水を放流するようになって水温が上がるようになったって。

A 上がりましたよ。ここで1年間水温調査もやったんですけお。

Q 定期的に。

A そうです、7月20日かな、やりましたよ。

Q 毎年なさるんですか。

A ええ、それで市長に答申をして。

でね、このへんが可笑しいんですよ。規定がね、30センチのところでは3分やりなさいって言うんですけど。これなんて、たまりなんですよ。

ここは訂正をしたんですけど。7月の今年は9日に、一斉調査だからね。

Q 何箇所で行われている、1、2、…11か所。

A 一斉調査はね、あとここは6か所ですね。

Q 毎回午後1時30分にやるんですね。

A ええ、3分間。

Q でも、たいへんですよ。

A 担当になるとね、どうしてもいなくちゃならないですからね。

Q 時間まで決まってね。

A 例えば1時半でしょ、その前に車で行かなくちゃならないんだよ。3か所くらいはかるんです。

Q 天気が悪くてもね、たいへんですよ。

A 台風なんかでね、増水したなんてときには中止しますが、それ以外はやっていますよね。

Q このへんの小学校あたりはやっぱり、子供さんはなるべく川に行かないようにって指導なさるんですかね。

A そうですね、PTAでね。危ないですから。水温が高ければ泳いでも大丈夫なんですよ、準備体操すれば。急に入るから、どうしても…。危険度っていえばね、昔私も散々入ったんだから、そんなにないんだけど。ただ、冷水のために心臓麻痺でやられちゃうから。

Q 指導される先生も、川で遊び経験をお持ちじゃないから…。

A シーズンに行ってみるとね、高校生以上はかなり泳いでいますよ。多摩川でね。

Q 峰岸さんはずっと青梅ですか。

A ええ、この土地っ子ですから。

Q 小さい頃の多摩川はいかがでした。

A もっと水量が多くて、水深も深かったわね。そこの橋のところなんて、4メートルか5メートル深かったんだからね。

岩の上から飛び込んでも下につかないような。

Q ジャあ、楽しかったですね。

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1995年10月5日

中里崇亮氏（玉川・千川上水の自然を守り清流を復活させる会）

Q 中里さんたちの会はどれくらい前から…。

A 昭和41年だね。昭和41年に玉川上水の埋め立てられるという、丁度高速道路ができるときに、38年のオリンピックの準備のために高速道路ができるときに、玉川上水がヨドバシに浄水場が廃止されて、東村山にできたでしょ。そのときに、玉川上水が武蔵野以降はいらなくなってきたわけだね。埋め立てられたり、高速道路になるっていうんで、杉並の方ではどんどん工事が始まっていたわけですね。それが、吉祥寺から井の頭公園界限とか御殿山とかね、武蔵野の方にもくるんじゃないかということで玉川上水を守る会というのをつくったんですね。

Q そうすると玉川上水の保存活動のようなことに端を発していたようですね…。

A はじめはなにしろ玉川上水を守るっていうことで、それを道路にしてしまうと困るわけですよ。文化財的な問題だとか、環境問題だとか、それから始まって、玉川上水を守る会っていうのをつくったわけですね。

Q 会の活動の中で清掃もなさっていたようですが、それをはじめた理由はなんですか。

A 水が流れてなかったら、ゴミの捨て場になっていたからね。缶がまずすごかったけど、缶とか自転車とか、なかにはオートバイなんかも捨ててあったし。それからビニールもね。生活必需品のなんでもおこってましたよね。中には、自分たちのモラルがひくいもんだから、不必要なものをジャーと捨ててちゃう。古い家を壊し、大きなくぎなんか抜いちゃったのや、みんな要らないからって、ばーんと捨ててちゃったり。

Q 最初の頃そうやってすごきたいへんだったと思うんですけど、しばらくなさってだんだんきれいになってきたとか。なんらかの変化はございましたか。

A どんどん高度成長が行われたものだら、凄い勢いで道路だとか、玉川上水だけでなく千川上水とか、支流がいっぱいあるよね、品川用水だとか、砂川用水だとか、そういうところから流れてくる支流をまず武蔵野市の市自体が、そういうものを道路の拡張用地と

して使ってしまったんですね。それはもとへ戻らないですけども。車の幅が広がるに従って、道路を広げなければならないという、市はそういうのもあったんですね。

まだ、自然環境だとか目をむけていなかった時代でしたよね。東京都の近辺でもそういうことを始めた人は割合少なくて、たまたまうちの檀家さんにそういう人がいましてね、その人が一生懸命やって、文化人だとか、野田ウタロウだとか、金子ミツハルとかね、こういう文化人か武蔵野には随分住んでいるんですね。その人たちが動くことによってマスコミが報道したりしてね。そのうちに光化学スモッグっていうのがでてきてね、息が苦しくなったとか、そういうのがでてきたんですよ、42、3年は。公害が進行していった時代だっていうことで。みんなが道路にしちゃった方がいいっていう考え方だし、東京都もそういう考え方で。なにしろ高速道路作らなくちゃいけない、道路は拡張しなくてはいけない。そういう時代だったから、まだそんなところに目が向かなかった時代なんですけどね。人の手ではどうにもならなくて、拾うなんていう問題じゃないですからね。一応そういうものは掃除なんて…。清掃するなんていうのは一応投げ捨てちゃいけないっていう警告を発するっていうことで、きれいになるっていう時代じゃなかったですよ、そりゃいっぱいあるから。

Q どれくらいの人数でやってらしたんですか。

A 武蔵野市でも手伝ってくれたりして、せいぜい5～60人の人が参加をしてくれる。付近に呼びかけたり。

Q 年齢層はどんな方たちですか。

A けっこう私も若かったからね。30～40かな。

Q 日にちを決めて定期的にですか。

A そうそう。月に1回とかね。なかなか難しい問題で、月に1回ずつやるのはなかなか難しかったですけどね。いろんな所に呼びかけて、千川上水の清掃も小学生に呼びかけたりしてね。いまは一年に1回になったんだけど、それは続けているんですけど。

玉川上水の方は市なんかも難しいんですけど。危ないからとか。お年寄りじゃ危ない、何々じゃ危ないってね。

昔は中に入ってゴミを出したんですけど、今はそういう必要がない。清流が復活したから。いまは、東京都も自身でも清掃をするようになってきたから。

Q 現在は年に1回、千川上水のほうを



A いまうちの方でやっているのは、千川上水の清掃っていうのが。小学生をとかね、付近の父兄だとか中心としてやっています。

Q 他にはどんな活動を？

A 川を歩く会だとか、史跡を訪ねる、植物を訪ねる会だとか。昭和58年にそれを清流を、「玉川・千川の自然を守り、清流を復活する会」にしたんです。清流ということが、流れてなければしょうがないということで、清流を復活させてくれということで、野火止用水に東京都が水を流したっていうんで、都會議員なんか共鳴して、都に働きかけてくれたから。野火止用水の復活を行ったんですよね。うちの方では清流復活させる会を再発足させて毎日毎日、ほとんど毎月清掃っていう。今度は中っていうより周りをね。緑を残そうとかそういうことに市町村も関心を持ってきたから。

はじめ41年頃の出発の頃はそういう関心はまずないですよ。何をやるかっていうと道路だ自動車だ。建築ですよ、家を建てる。みんなが豊かになることばかり考えてたから。自然なんていうのはまず木を伐る。その当時、私なんかたまたま目をつけたっていうことは今になってみると、今の人は自然だ地球環境問題だって言っているけど、当時は環境問題なんて言ったらちょっと変わり者みたいな感じもしてて、あんなものは暇人がやるんだとか。

清掃工場なんかの問題もたくさんありましたからね。美濃部さんなんかも、そういう点では協力体制をとったし、革新の人たちがやってたけれども。

Q 最近千川上水の清掃ではゴミはいかがですか。

A ものすごく少なくなりましたよ。千川上水ははじめはね。トラックに3台とか4台とかあったんです。それがね、続けることによって、そして東京都が残そうという気持ちになってきたから、東京都自身も清掃もする草刈りもするということになって、今度はそこをずーと緑道をつくっていったから、そういう所はモノを捨てるっていうモラルというのが非常に高まって、捨てるということが少なくなってきたしね。今でも缶なんかかなりありますけどね。今は自動車一台もないですね。

直接川の中にすてる人っていうのは少なくなった。けども飛んできて入るのは随分ありますよ。ビニール類ね、袋だとか、ああいうのが木に引っ掛かったりね。ああいうのが一番困るなと思います。それからひも類は非常に困る。それも古くなってね、ペラペラペラペラして。

木にひっかかたり、ずいぶん多く見かけるからね。そういうものもとるんです。

いまは、道路側が一番いけないのはタバコだね。タバコ吸いが一番いけないですよ。よっぽど立派な人でもやっていますからね、タバコの投げ捨ては。

川の中に直接捨てるっていう人は少なくなった。だけど弁当の袋に入って、弁当のかすっていうやつは、まだ捨てるやつがいますね。中開けると半腐りの臭いです。

今は川の中というよりは、沢の淵に茂みに…。今道路に緑化していますから、植え込みのところにみんな捨てて、缶をのっけたり。

Q そういうときに、ゴミ袋だとか軍手とかは、みなさんが持ち寄りでするんですか。それとも市から…

A はじめは、自分たちでやってたんですけど、この頃は一斉清掃を各市がはじめて。まだ40何年かな、40年代っていうのはまだやらなかった。50年代になって市全体で何かやろうじゃないかっていう。武蔵野市にも緑化市民委員っていうのがあって、私もそうなんですけど。いろんな所で市民の提言っていうものをやりましたから。市がある程度予算を出すことになって、ビニール袋を買ってくれるとか、ゴミを集めてくれるとか、そういう理解が深まって、日にちを決めてはやるということ。今は市全体として取り組んできましたからね。

人も多くなっちゃって、草も生えなくなっちゃっているから、歩いちゃって。東京都なんかの整備の仕方なんかが、自然な形で整備していかない。芝生なんかを植えちゃったりしてね。なかなか難しいもんですね。庭にしちゃうんですよ、庭に。だから困るわけだ。多摩川自体だって段々自然に生えているものをきって芝生にしたりしているでしょ。

遊歩道なんていうのは、本当に人工的なものにつくりかえてしまう。いかに、自然を残していくかっていうことをやってもらわないとしょうがないかなと。自然っていうと投げ捨てが増えちゃうっていうこともあるけどね。

我々はゴミのことだけを考えているわけではないから、自然をいかに残すかっていうことで。なるべく人工的なものでなくて、自然な形で残せるかっていうことを考えて、それを自然っていうのは、自分で浄化作用っていうのがあるからね。川にしても周りを石で固めてしまうとか、コンクリで固めるから。それがいかに土と接点を持っていくかね、これが非常に難しい点なんですよ。

Q 最近では玉川上水もずいぶん土手を歩いたり、観察会が人気があるみたいですね。

A いろんなことで市自体もやったり、私は武蔵野シダンカイっていうのをやっていますけど。細かくやっていかないと。どういう植物が残っているとか。

はじめはね、武蔵野市だけに玉川上水を守る会っていうのが生まれたんですけど、そのうちに小平や、三鷹にもできたり、いろんな所があります。いまは直接そういうことで活躍しないで、文化活動なんてしているところもありますけどね。

そういう風にいろんな所で、玉川上水に関するのがたくさんできてきましたね、それは

いいことだと思っているんですよ。ところがですね、小金井市なんてみると、人工的には紫陽花なんか植えたりなんかして。せっかく自然に…。自然に残せるところなんて、川では草が生えていいってところなんて…。玉川上水だって。300年からの草がそこで生い茂って生きてきたものをね、そういうものもある程度残した方がいいんじゃないかなと思います。

都会の中に昔からの草がボウボウしているとなかなか難しいし、ある程度そういうところも必要じゃないかなとは思いますが。そういう所に外国の紫陽花を植えたり…。

ゴミがだんだん少なくなっていることは確かですよ。でも依然として捨てる人もいます。生活のゴミなんかも捨てる人もいなくなりましたね、でも車の中からポンとやっちゃう、非常識なのはまだいますね。あとはタバコだよね。タバコっていうのは、教育程度の高い人もやっちゃうんだよね。見てると。

Q 小さいから捨てる意識がないのかもしれないね。

A かならず下水のところ網があるでしょ。あんなか、こんななってピッピッってポンって。でも注意しにくいよな。

そういうことできればいいけどさ。だから遠回しに、タバコ吸う人は全部そういうものを持って歩いて処理しなければだめだと。指導的立場の人が平然とやっているんだから。今は禁煙とかいって、吸わないようにとか言っているけど。これをいかに禁止させるかっていうことは難しい問題もあるよな。これは教育の問題でもあるし。普通は教育があれば、こういうことはしないと思うけど。

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1995年11月15日

澤田倉吉氏（東京アマチュア無線ネットワーク）

Q 団体名は何になりますか。

A 東京アマチュア無線ネットワークが主団体っていうんですか。

私どもは、TAMAらいふ21っていうのから動いていまして、無線連盟っていうのがからんでまして、その下部組織みたいな位置づけなんです。

Q フリーマーケットを橋の上でやってらっしゃるんですね。

A そうなんですよ。天気に恵まれてまして。

Q 今回が初めてで。

A 初めてです。ゴミ掃除の写真撮りそこなっちゃって。やってる風景がないから。

Q 今回これをやろうとした経緯というか、そのへんについてお願いします。

A 我々TAMAらいふという事業に参加しまして、ボランティアでね。アマチュア無線局を、TAMA21暮らしの祭典というイベントがあるなかに、VOICE93といっているんですが、その中に無線局をつくったんですよ。

その時もいろんな仲間が出て、手作りでやってきたんですよ。終わったから解散したんですけど、せっかくいい仲間ができたので、それをいつでもつなげられるようにネットワークという名前で活動したらどうかということで、組織化したんですけど。

その元となったのは、TAMAらいふ21が終わった後、その財源を活用するために多摩交流センターっていうのができたんですよ。そこから、無線の方に市民のネットワークに、広域的なものなのでね、続けていったらどうかということで、話がかかりまして。

じゃあまた再結成して、またみんなと集まりをやろうじゃないかということで。それが東京ネットワークの意味なんですよ。

東京って細長いでしょ。区部の23区と、こちらの市町村とは分断っていうか、ちょっと違うんですよ。それを一つにできたらいいんじゃないかなって、ということで、府中を一つの拠点にして、アマチュア無線同士の交流をはかったり、興味のある方を集めてなに

かやろうじゃないか、と。去年の11月に東京ネットワークが正規に動きだしまして、アウトドアの事業としては今回初めてなんですよ。

多摩交流センターで何か事業をすれば、助成をしていただけるということもあったので。

普段アマチュア無線って車の中とか家の中とか、インドアの世界なんですね。もちろんアウトドアもあるんですけど。ミーティングを多摩川の川原でやれるといいねって。その時に我々も社会に貢献できるなにかをやってもいいんじゃないかということで。色々探しまして。

環境問題とかゴミの問題。いろいろ言ってますよね。我々も外へ出て、アンテナ建てたり、無線するとき、公園とかいろいろお世話になるので、我々が率先して、ゴミの持ちかえりとか、ゴミを出さないこととか、我々が啓蒙するような動きをどこかでしたらいいんじゃないかということで、探しましてね。

色々探したんですけど、安全性、もちろんいろんな方呼んでやりますから、安全性と比較的キャンペーンですから、来ている人にアピールしませんと。我々だけでやってるんじゃないめですから。パーベキューとかやって、来やすい所。色々探したところ、結局青梅のアマノシの公園って決めたんですけど。自分の家はその側なんで、よけい分かるんで、それもあるんです。駅から近いんですよ、ちょっときれいだしね。

環境を考えるっていうのは、きれいな場所でないかね。多摩川の下流でもいいんですけどね、やはりこういうきれいな所を残そうよ、いつまでも大切っていう意味を出すには、きれいなところでやって。東京からあまり遠くてもね、都内の方も呼びたかったし、近隣の方もお呼びするっていうのだと、地元の青梅だけじゃいけませんから。

アマチュア無線ができるところじゃないと行けませんし。交流センターの方も、ただのゴミ拾いだったら、どこの団体もやりますよ、ということなんですよね。アマチュア無線がやるということで、何かカラーっていうんですか、アマチュア無線らしさを入れながらやったらどうかということで、当然クリーン作戦ですから、アピールとゴミの持ちかえりと、我々もゴミを拾う、と。

ただそれだけですと楽しみがないですから。ゴミの問題となると、リサイクルとか不用品の何かとか。我々無線の人間っていうのは、わりと機械をいじったり、直したりね、その不用品の交換とか売買もあるんですよ。そういうこともできるということで、リサイクルということで、フリーマーケット。フリーマーケットも、実際に思ったほどよくなかったんですけど、やるならば阪神の方に募金というか、寄付っていうか、支援もできればいいな、と。趣旨はそこに書きましてね。5千円くらいなんですよ。あんまりないんですよ。5千円くらい阪神に送っても仕方ないから、百何人集めて5千円だってって言えないんで、青梅市の緑の基金の方に寄付させてもらったんですよ。

クリーン作戦だよということで、多摩川を大切にということで、これは我々の母なる川っていうことじゃないんですけど、東京を縦断してますよね。奥多摩なり、ずーと縦断して、都内もそれなりに通ってきているんで、東京の川として位置づけてもいいのかな、と。

多摩から区部の方に入って、飲料水なりやっていますので。大東京ということで、多摩川のクリーンキャンペーン。それはゴミ拾いをして、チラシとティッシュを配りながら、バーベキューの人に「ゴミの持ちかえりをお願いします」というのを、配付したんですよね。

だいたい、我々が始めた頃はバーベキューの人達が150人くらいだったんですね。我々が120~130人位。だいたい300人くらいがいっしょになってやれたという考えられているんですね。

ちょうどこの11月3日っていうのは、文化の日で、あちこちでイベントがやられてまして、実際に動員数が少なかったんですけど。でもそれなりに、天候もよく、1週間前だったらもっと混んじゃって、我々の駐車場もとれないし、よかったなと思っているんです。

3本柱としては、一つはクリーン作戦。一つはアマチュア無線局を外でやること。フリーマーケットの3本柱だったんです。

会場はすべて川でやろうと思ったんですけど、荷物の搬入の問題とか、人通りがないと売れないとかいう話があって、本来はよくないと思うんですけど、橋の上でやらせてもらったんです。実際は、あんまりバーベキューに来るからは、買うっていうことは…。売れなかったっていうのが現状みたいですよ。

A 無線の仲間に往復ハガキで出店しないかってやって。

販売が目的じゃなくて、クリーン作戦、きれいなところを残すようなね、そういうことを訴えられるといいなと、我々もそういう中で楽しめるといいなと。

とにかくまあ、ゴミは持ちかえってもらいたいなあというのが基本で。

だから、我々もバーベキューはしなかったんです。弁当は幹事が持ちかえり。

ただ問題はね、青梅というのはダストボックスで収集なんですよ。結局呼び水になっちゃったような感じで、片づけていって。夕方もう1回いったら、もう山でした。かえって我々が置いたことによって、みんなが置いちゃったような。だから、青梅に住んでいるんですけど、いいようで悪いようでね。ビールの缶とか、空缶とかたくさんあったんですよ。我々は自分たちのものは持ち帰る、と。基本的にはアルコールはださない、と。ジュースも紙コップで、そして持ち帰るということにしたんです。

あれも見るとお前たちがやったのか、と言われるとやだな、って。その写真をとってこなかったんだけどね。夕方見にいったら、暗くなっても、焚き火しながらバーベキューなんているんだね。寒くなっているのにね。一応青梅の方には我々ゴミだしてないんですけど、これだけなんですけど、って説明しておいたけど。

すごくゴミは出ますね。みんなが持ちかえってもらうとうれしいんだけどね。実際川原には少ないんですよ。ただ、見えない草むらなんかには捨ててあるみたいで、それを我々が捜し出して、川原以外の所から拾ってくれたので。かなりの量がありましたけどね。でも新しい缶はないっていうんで、バーベキューに来た人はやはり集めて、ダストボックスに置いて帰っちゃうみたいですよ。持ちかえりじゃなくてね。

川原に捨てるっていうのは少ないみたいですね。

我々が配ったことによって、この時に来ていた方はある程度話を聞くを、いつも借りているのでちゃんと持ちかえますよ、とか。ゴミは捨てていきませんよ、ということは言っていたと。これを配っていたら、そう言っているよ、っていうのを聞いたしね。

ただ、その11月3日だけかもしれないけど、アマチュア無線がやったっていうことが、ある程度アピールできたのかな、と。

Q 私はアマチュア無線については詳しくないんですが、交信しますよね。相手の方と交信した時に、今日実はこういうことをしているんだというようなことは？

A やったんです。そういう無線の仲間にも呼びかけて。アマチュア無線って、今、日本全国で免許人が250万人くらい。無線局として電波が出せる状態として130万人くらいいるそうなんです。そのうち、関東地区が50%以上を占めていて、その中で東京がさらに多いらしいんですよ。

昔はアマチュア無線っていうのは、アンテナ見て訪ねて行って、いろいろ相談しながらやって。お互いに教えてもらいながらやってきた世界だから。どこどこさんってわかったんですよ。我々が始めた頃っていうのは。

今は簡単にできるだけ、それこそ免許が簡単にとれるんです。わざわざ、交流がないんですよ。その職場のグループとか、仲間同士っていうんですか、ほんとの身近な仲間からはじまって、スキーの仲間とか、昔みたいなアマチュア無線みたいじゃないっていうんですか。

手軽にできるだけあって、目的も広がって。基本的には小さな無線機で交信して、その範囲の仲間って。手当たり次第っていうんじゃないんですけど、「CQ、CQ」ってやって、それが昔で。今は仲間だけでやるっていう感じ。

ですから、我々も武蔵野であり、青梅であっても、みんなを知らないんですよ。職場が違えば、年代が違えば。無線は年も場所も関係なく、交流できるっていうことで、仲間づきあいをしているんですが、それがごく少ない世界になってきている。

だから、こういう機会をつくって、アマチュア無線家同士の交流を、というのも考えているんです。そのためにネットワーク化っていうんですか、アマチュア無線で知り合った仲間が将来いっしょに何かできる、といった世界もありますので。

TAMAらいふという一つの引きがねがあって、その延長上に乗っていると我々は思っているんですけど。少しづつ寄せ集めっていうか、くっつけあわせながら、交流を持るといいな、と。その中の一つのきっかけとして、こういうイベントもできるといいなって。基本的には会話の趣味ですから、コミュニケーションっていうか、交流とか会うとか。無線の仲間って会うこと少ないんですよ、電波ではコミュニケーションするけど、会うのははじめてとかね。そこから意外にいろんな付き合いができて、奥が深くなりますからね。

そういうつながりがずーと残るといいなと思って、こういう事業をしながら。社会の貢献することね、せっかく100人も集まるんだったら何するの？って、ただ豚汁食って帰るの？って。どうせだったら、こういうことしようって。

Q そのへんは、反応はどうでした。

A やはりよかったですよ。休日を使ってくることでですから、それなりのね。いやがられたということがなかったので正解かなって。クリーン作戦もね、2時間くらいやろうかって言ってたんですけど、場所を選定していくとね、そんなに時間かけなくても、大勢でやるときれいになっちゃうかなとかね。時間的には45分くらいにしたんですけど。

実際に8月に青梅市がね、1万人のクリーン作戦。それに参加しましたけどね、30分くらいでしたね。

どうなるかと思ったけど、みなさんに一生懸命ゴミ拾っていただいて。こんなにいい場所大事にしたいよね、っていう言葉も聞けたし、また会おうよねってことも言われるとね、主催者としてもうれしい。

あと当日のこういう交信書をね、これ無線の交信書なんです。青梅のみどりと水の推進事業本部の方と相談しましてね、キャッチフレーズいただいて、写真を借りましてね、私の方でつくって。一応、全国に配付したり、来た方にもこれを配ったですよ。多摩川と書いてないけど、多摩川なんです。見る人が見ればわかるように。できれば、毎年ね、多摩川を中心にやらせてもらおうかなという企画でいるんですよ。

毎回この場所っていうのもなんなんで、段々下流にいくかしながらやれるといいなと思ってね。主催者としてはただやればいっていいもんじゃありませんので、場所の選定には難しいんですけど。

Q 先にアンケートに準じて、さっとお伺いしていいですか。今お伺いすると、この活動を始められたきっかけって言うと、ネットワークとしての社会奉仕活動みたいなことで。

A はい。

Q 拾ってみて、目立ったゴミというのはありますか。

A 空き缶は少なかったようですね。その変わりビニールゴミ。スーパーの袋とか燃えかすみたいな、バーベキューの後の完全に燃えきらなかったゴミ。

Q つり関係のものはなかったですか。



A 時期がずれてますのでね。でも、燃えゴミの中に入るのですかね。

Q 多摩川も場所によっては、釣り人の置いてゆく、えさの袋とか、釣り糸とかがすごく目立つところが多いんですよ。

A あそこも多いんですよ。ただ、地元が清掃をやっているんで。11月にはたまたまなかったんですよ。

地元の自治会が拾っているみたいですね。後は、少林寺剣法のなんとかとか。そのボランティアが入っているみたいですよ。

Q 拾った時の分別はどうですか。

A 燃えないゴミと燃えるゴミ。あとはビン缶。缶類とビン類を分けてもらって。

缶ビンが燃えない方にいっちゃうのかな。私の見たところでは、缶は少ないですよ。意外とね。みんな持って、ダストボックスに入れて帰るんじゃないですかね。

Q その時の収集は、さっきお話にありまして、青梅市の方で。

A はい。事前に打合せしましてね。回収が翌日にしてくださったんですよ。これもどうやっていいかわからなかったんで、我々もトラック持って行って、ゴミの焼却場まで持っていこうとか、作戦を練ったんですけど。やってくれるということだったので。

Q 会員数は今何名ですか。

A 難しいんですよ。東京ネットの場合、個人の会員と、団体ってありまして。団体が12、13。またボロボロ入ってきてくれているんですよ、この関係で。個人が50から60名くらいですかね。当日来た人は130位ではないですかね。

受付を通った方で120～130はいたっていうので、通っていない人もね、当日全然無線に関係なくて、「いーよ、いーよ」って、書くのめんどくさいからって行って。そういう方も多かった。おばあちゃんなんか来てくれて。

あの側に簡易保健の宿があるんですよ。そういう方も手伝ってくれたって言っていましたよ。

キャンペーンですので、その場において、川にいる人はみんな協力してくれたという解釈でいいんじゃないかなって。

Q アマチュア無線のネットワークの年齢層っていうと。

A 大学生もいるし、高校生もいるし。30代から40代っていうんですか。社会に一番出ている人たちじゃないですかね。20代っていうのはまだ。

当日来た人もそのへんですね。高齢の方も来てたけど、中心になっているのは30代半ばから40代半ばくらいで。

Q 年に1回ずつは続けていこうという感じですか。

A いろんなことをやってみたいとは思っているんですけど。一つやった上でそれに付随していくというような方がいいのかな、と。100人近くを集めるわけですから、100人全員が動けるものじゃないと、スタッフだけがやったっていうのもだめだし。参加者が率先して、動けるものの方がいいと思うんですよね。手軽であり複雑じゃなくて。とりあえず、こういうものから入って行って、もうちょっとボランティアなものへ。先ず一番身近な、手軽な、そして楽しめるっていうんですか。川原というところでね。

わざわざ危ない所へ連れて行ってやらせるのもね。

山というのもね、いいんですけど、危ないっていうこともないんでしょうけど、山となると火事の問題とか、無線のやつが行って火事になったって言われても困るなとか。川なら、水辺でやりますから、ある程度ね。将来的には、何かできればね、と思っていますけど。武蔵野とか青梅とか一つのクラブでやっているわけじゃないので、いろんなクラブの方が出てきてやっていますので、やり方についても偏れないっていうんですか。多くの方々に参加していただいて、家族にも分かってもらえるようなものでないといけないとなると、こういう線からは脱皮は難しいかなって。年に1回ですから。

年1回しか集まらない連中に難しい問題はたいへんかなって。

人が集まれて、安全で、やったことによって目に見えた効果があって、また来ようねと言われるような雰囲気がないと。もう来たくねえって言われたらねえ。

海岸やられているって聞いてますけど、水辺の方っていうんですか、そういう所って以外と楽しみっていうか、動きがあるじゃないですか。山だとさ、動きが少なくないですか。

Q そうです。私山でもやったことあるんですけど、登山道とその周辺で、本当にゴミが多いは、そこから外れたところが多いんですよね。楽しくできて、かつ遊べるみたいのがないとね。

A そう、それがないとき。何かいいの教えてください。

Q 無線もできないといけませんね。当日来た方っていうのは、ネットワークの会員のどの位の割合の方なんでしょうね。

A 別のものが集計やっていますので、まだわかりません。

ちょっとね、受付が見えなかった、分かりづらかったっていう苦情がありましたから。書かされるのが嫌みたいですね。

Q そうでしょうね。めんどくさいのかもしれないですね。

A だから、カウントも難しいんですよ。それに閉めた後も来たでしょ。

だからね、人数についてはわからないんですよ。通過だけで120だけいて、それ以外にあの人たちも来てくれたんだって。手袋でてるのみるとこれくらいかなって。人数は今回とりかたを失敗しちゃったんですけど。

Q 手袋とか袋はどうされました。

A 自分たちで買いました。

大きな袋は青梅市からいただいたんですけど、大きすぎちゃって、やはり買い物袋程度にやって、それを大きな袋に集めた方がいいんじゃないか、と。こんな大きな袋をひきづるのも可哀相だなと。買ったんですよ。透明の袋でね、手提げになっているの。

穴があいていて、水がきれるような。自費っていうか、持ちだしですけどね。まあ会費で運営してますから、自分たちの会費でね。参加者からは取らないですけどね。

Q さっきのお話ともつながると思うんですけど、ネットワークの人達とできそうなことっていうと。何かありますか。

A 外の事業ですよ。多摩川の問題今回やりましたけど、東京を縦断している母なる川じゃないですけど、多摩川を中心に清掃をしようじゃないかと。それに伴う、アウトドアでのミーティング。今回写真の中にもあるんですけど、講義をしてもらったんですよ。

最終的には無線の方が中心になっちゃったんですけど、この方は小笠原へ無線をやりにいたり、山の上で無線をやったり。そういうところで、環境っていうんですか、公園の敷地の使い方とか、マナーの問題とか、こうするといいんじゃないかっていうアドバイスを。

この方は、海外で無線をやられるんです。カンボジア行ったりね、ミャンマー行ったり東南アジアとか、オーストラリアとかに行ったり。日本の川の問題、日本やっぱりきれいだっていうんですよ。そういうものを中心にね、海外との比較とか、その無線の集まりですから、無線の中で一つの海外との取決めみたいな、注意点とか、日本との違いとか、川の問題、海の問題をね。海外に行っている人の目で話をしてもらいました。

こちらの方は、八王子でリサイクルの会をやってまして、ゴミの問題をね。捨てるでも絶対どこかに残るものだよってということで、持ちかえりとか、再利用とか、そういうお話をしていただいたんです。

そういう講義をしていただいて。我々がわからないと、人に話せないですから。雨でもやるつもりで、会場とってまして。

Q その時に、困ったこととか、苦労したことってというのはどのあたりでしょう。

A 集まる人が限られるっていうのは、最初ですから仕方ないし、時期的な問題もあるでしょうね。

ゴミの量もまあまあっていうか。事前にやっていただいたというのは聞いてますし。確かにすごいらしいんですよ。7月8月くらいはすごいなとは思ったんですよ。地元が清掃にはいるんですね。

Q 広報についても。

A 新聞に出させていただいたっていうのもね。青梅市さんの協力で、広報課からここに流せばいいよってやってくれたので、こちらから流したんですよ。

午後から増えるんですよ。パーベキューは。終わる頃にくるんですよ。あれが…。11月ですからね。今度は10月の後半がいいかなって思っているんですけど。

紅葉はないにしても適当な頃かなって。

Q 困ったことっていうよりは、人と触れ合えたりとか、川原がきれいになったりとか、よかったことの方が多かったんでしょうね。

A 経験的にはみなさんに悪口を言われなかった。よかった、楽しかった、また会いたいねって、今度は下流行こうかっていう声ができるだけでもね、我々もよかったかなってね。

チラシを配るとによってね、来ている人が意識してしてくれたっていうのがわかっただけでも、成果っていうんですか。

いつも使わせてもらってますから、持って帰りますよっていう声こそら中ででてたっていうのが。なかなかないんですよ。8月にでもやれば、一番のピークに。ピーク過ぎてやるからねえ。

Q ……（周りの声で聞こえない）

手軽なものだったら、何箇所かで交信しながらできるかも。

A そうですね。考えているんですけど。だんだんとそういう風な地域を分けてね、やるとか。

無線っていうワイヤレスのものを使ってね、山のこっちと向こうとか、見えない所とお？ってやりながら、実況中継のようにできるんじゃないかと思っているんです。初めてだから、ゴミの処理の問題とか安全性ね。そういうケガでもさせちゃうとか、事故とか、それを怖がってますから。

Q 関西の方の全国ネットワークで海岸でゴミ拾っているところありましてね、10何人でやっているところが多いんですけど、場合によっては地域の企業は社員がドッと来ちゃうともあるんですよ。

受け入れる方も全員ボランティアでやってますから。責任が負えないじゃないですか。ボランティア保険みたいなのをあらかじめ、だいたいきそうな人数で掛けるようにして。受付のところで書いてもらうときに、保険とひきかえじゃないけど、そのようなことをしている人がいます。参加者が多いから。

自分たちも把握したいし、継続来てくれるように案内もだしたい。それには住所がほしくて、受付だけだとなかなか書いてくれない。たまたま飲み物の会社から、清涼飲料水の提供があったので、保険の確認と、飲み物の引き換え券を予て、受け付けで書いてもらうっていう風に。

A 府中のサントリーの人がメンバーにいるんですよ。だから、意外とそういう手づるはあるんですけど。自分たちで飲んで出したっていうとね、まずいかなということで、自分たちで制限かけたからね。

そうですね、何かと交換っていうの。

今回豚汁出したんですよ。ゴミ持って来た人には、豚汁食べられますよって。だから、ゴミの収集するダストボックスの前に3人くらい立たせておいて、来た人に豚汁券を渡して、それを持っていくと豚汁が貰えるっていう。

Q あったかいものってそういう時うれしいですよ。

A ちょうど時期的に。百人分くらいつくりましたね。保険も一応かけましたよ。200人分の。万が一を考えて。参加してけがしたっていても。まあまあ万全策をしたつもりですけど。

慣れないから。ゴミを拾うっていう雰囲気みんな分からないから。今回やってくれたから、次回からは大丈夫だと思うけど。

外で無線やるとなるとね、電気の問題だとか、テーブルはないのか、とかね。なんだかんだいうんだけどさ。アウトドアっていうのはそこの石でさ、すわてやればいんだっ

て。

限られたところでどうやるかっていうのが、サバイバルにもなるしさ。

発電機を用意したりしたんですけど。いい実験であり、経験かなと思うんですよね。新聞に出させてもらったのもそうだし。

Q 無線をやる方では女性は？

A 少ないんですよ。実際には免許を意外と持っているみたいですけどね。無線の女の方ってモテますよ。

私のかみさんも免許持っているんですよ。そういう関係でいっしょになったんですけど。あの、海外にも行くんですよ。やっぱりそういう付き合いでね。向こうの人がいろいろやってくれたり、もちろん国内もいろいろいるから。

その国にいても、その地域にいてもね、なんかつかしいんだよね。

全国的に仲間がいて。あそこにいけばだれだれさんに会えるな、とか。おもしろいですよ。新婚旅行ヨーロッパいったんですよ。福岡の人がヨーロッパの人と交信していて、その人のカードのコピーをもらって。いきなり「ハロー」って行くんですよ。〇〇さんっていでしょ。僕は福岡の××さんの友達だって。そうすると「おー、ウエルカム」って。その人ともう10年くらい付き合いってますけどね。クリスマスカードとかね。そういう人の付き合いってというのが、世界共通なんですよ。

奥に入っていくとね、時間が無い人はちょっと難しいかなって。やりたくてもできないんですよ。残業で遅かったり。

ゆとりをもってないと。アメリカなんかは高齢者が多いんですよ。リタイヤされた方とか。のんびりさあ、無線機でやってるでしょ、ひまじゃないとできないよね。

海外だとかなりのお金持ちじゃないとできないし。共産圏というか、発展途上国というのは無線に対して厳しいですから。スパイ的なこととかあるでしょ。許可が難しいみたいです。そうするとかなりクラスが高いんですよ。その国の高官レベルだったり、お金持ちとかね。語学がある程度できないといけないとか。厳しいらしいですよ。海外の方っていうと、我々と同格じゃないんですよ。経済的にも地位的にも。アメリカとかはまた違うんですけど。アジアの国々で無線やっている方は。

日本が一番世界で多いんですけど、幸せな世界だと思いますよね。手軽に無線機も買えるし、いつでも使えるような雰囲気ですよ。限られた電波を使ってやるんだしね。

いろんな意味で、人間的な付き合いっていうんですか、話さなきゃ相手に伝わらないじゃないですか。そういう意味ではいい仲間が残るっていうか。見かけだけじゃ絶対にダメなんですよ。

それでこれもね、はっきり言って、こんなことまでしてっていうのはあるんですよ。助成金もらうかもらわれないかって言っても、たかが数万円あったからって、自分の家で

やった方がいいやとか、人のゴミなんて関係ねえやっていう考えになればね、でも100何人集まるっていうのは、それだけね、仲間に対する意識とか、こういう環境問題についてもね、ある程度理解してくれるんだなっていうことがあるだけでもね、我々としてもよかったなっていう。間違いなかったな。

700通くらい往復はがき出したんですよ。それで、100?通くらいしか返事が来ないんですよ。身内いれても、100人いないなっていう。それがなんとか100人越えたっていうだけでもね。返信が返ってこないだけで、出費が大きいんですけど。そういうものかもしれないですよ。かなり宣伝は打っていることは打っているんです。

最初は少なくとも、100越えれば、次回は…。安定した数がくれば力じゃないかっていう話をしたんですけどね。確かに広報を出した人は700通出したんだよ、沢田さんっていうんだよ。分かりますよね。でも0から考えれば、来てもらえたんだし、みんな共通の考えてね、キャンペーンに参加してくれて、見も知らない人にチラシ配ったりしてね、お願いしますってやってくれたんだから、いいじゃないって。

でも意外と少ないんですよ。趣味の集まりですから、逆にその趣味を離れたものって用がないっていう気持ちも持ちますでしょ。そういう人たちを呼んで、社会に貢献しているんじゃないけど、何かをさせようとする自体が、実験的に難しいっていうか、おもしろいっていうか。

それをやったことによって、新聞とかね、ある程度社会的な面に出させてもらったっていうのは、僕は無線家のためにはなったんじゃないかなって。もちろん地域のためになってますけど。

Q … (よく聞こえない) みんなが考えていくべきことであるじゃないですか。お仲間の中でこれだけ来てよかったっていうだけじゃなくて、たった1人できてるんじゃないで、100人も人が来てるっていうのは、波及効果っていったらすごいと思いますよ。

A 捨てた人間は別にしてもね、「持ってかえりますよ、いつもお世話になってますから」みたいな話してくれた人も、我々に参加してくれたっていう解釈をしているんですよ。我々100何人かがやっただけっていうと、キャンペーンの意味ないんですよ。自己満足で終わっちゃうじゃないですか。袋を渡したことによって、「そうですね」って意識を持ってもらうことが大事じゃないかと。

我々無線で無線の人によびかけたって、結局自分たちの中だけです。それを通りがかりの人に、おばあちゃんなんかにも協力してもらったのがよかったのかなって。

場所が場所、パーベキューをしている場所なんで、駅みたいな通りすがりじゃないからその場にいる人たちも意識もってもらったんで。今回のクリーンキャンペーンの参加者だよって。

ただ、少しでも拾っていただくだけでもありがたいってね。

まあ、ゴミっていうとね、自治体の問題とかよく言われるけど、やっぱり、出す人の問題かなと僕は思うんだよね。

うちのかみさんなんかは、「持ち帰りよりも、出さない工夫をさせろ」っていうんだよね。

Q それは正しいと思います。

A 自分たちが何かやろうとしたら、持って帰ってくれっていうのは当然だけど、拾うよりも拾わないような活動、捨てないような？っていうようなことをもっとやったり。缶についてもね、共同でなにかやるとかして。まあ、根本的なことはまた違うかもしれないですけどね。

Q いっぱんの意識で考えると、自分の行動を通じて段階を追ってね。拾ってみて、初めて持って帰れば拾わなくていいんだとか。始めから出さないようにすれば、片づけなくていいんだとか。順番に分かってくる場所があるじゃないですか。

A 何かあったら教えてください。多摩川の関係については一生懸命取り組みたいと思いますしね。

(ここでテープが切れる)



## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1995年12月14日

下村誠氏（国際ボランティア学生協会・IVUSA）

A イビューサって読むんですけど、基本的には学生ベースでやっている団体で。一番最初に1993年ですかね、ラオス住民民主共和国小学校の建設に15人くらい。基本的に国土館大学の学生を中心としてラオスの小学校を建てにいったというのがはじまりで、その年にちょうど奥尻島の地震なんかがあって、その時も20人くらい、災害派遣で行って。実は今月の18日から、第4次隊になるんですが、ラオスの小学校の建設にまた行くと。今年は、阪神大震災に100人くらい行きましたかね。

戦後50年ということで、戦没者の遺骨収集、シベリア、硫黄島、サイパン、パプアニューギニアに行きましたかね。夏合宿で石川県のハクイ市のチイ浜っていう海岸の清掃に40人くらいで合宿やりましたかね。それから11月の23日に多摩川の清掃、ラブリバー多摩川を愛する会というのがありますが、そこと今年はジョイントしてやって。それから12月20日からラオスに行くと。なんだかわけの分からないことをやっている団体なんですけど。

Q 参加されている学生さんは、何人くらいいらっしゃいますか。

A 全部では、そんなに多くないですね。80人くらいですかね。基本的には国土館の学生が多いんですけど、名古屋の学生とか……。結局、どっかにいった時に知り合ったっていう奴が「ぜひ・・・」と。変わり者が多いんですけど、みんなで行っているみたいなの。

Q お伺いしてますと、ずいぶん活動の内容は多岐にわたったボランティア活動をしていらっしゃいますが、次はこんなことをしようっていうのは、みなさんで話あわれて自主的に・・・。

A そうですね、ボランティアというよりも、今の学生たちが非常に世の中に対して白けていてね。偏差値が高いっていうことが、全人格的に優れているような社会的な風潮のなかでね、うちなんかには落ちこぼれて入ってきて、なんとなく自信なさそうで、「そんなんで人生生きててもしょうがないんじゃないの」って。「10人入れば、10人の個性があって当たり前なんだから、もっと自信をもって生きろよ」と。そういうものを掴んでくれるといいなと、いうのが主体で。そのために非常にリスクの高いところに行っているわけですから、電気もガスも水道もないですし、500年とか600年とか高床式の住居で生

活していて、なんの不自由もなく幸せな顔して生きている人たちが、なんで俺たちはこんな物質文明のなかに囲まれて、どうして不平不満言って生きなきゃいけないの、みたいなのがありますよね。

そういうものを見てきて、現地体験して、すごく遅くなって学生たちが帰ってきますよね。そこには明らかに、自分が20何年間生きた人生と明らかに違うものを見て、感動して現地の人たちと本当に抱き合っ、涙して、新しい価値観をみだして、生きてゆくということが、これを仕掛けしている僕としては非常に楽しいことだな、という風に思っています。

ボランティア活動はあくまでも、そういうことをそれぞれの人たちが認識してもらうための僕等にとっては方法論ですよ。

奥尻島に行った時に、特に強烈にそう思ったんですけどね、遺体があがってきたり、右手がでてきたりといった中で、学生と現地の子供と仲良くなりますよね、いっしょに相撲とったりして、すごい遊んでたんですよ。それで仲良くなって「お前父ちゃんどうした？」って、「死んだ」って。「母ちゃんは？」「死んだ」って言うんです。僕たちはかわいそうだと思いますよね、でもかわいそうだった瞬間から子供たちって遊びにこなくなるんですよ。対等じゃないですから。僕たちは行って、もちろん米しょって、みんな持って行っているんですけど、苦しいわけですよ、何もしてあげられない。すごい崩壊状態だし。もちろん、お手伝いしたり、身体動かしてやっているけど。けっして、現地の人たちの痛みなんて、俺たちには絶対にわからないし、何もしてあげられないっていう辛さにみんな耐えられなくなってきている。隊員のなかでトラブルが起こるようになってきますよね、苦しいし、食うものないし。そういうこともあって、とにかく俺たちはここに来ているんだと。俺たちはとにかく来たんだから、俺たちができることをベストつくしてやろうと。人のことって考えるとつらくなるし、何もできないからって。

たまたまその翌日にすごい布団が入ってきて、自衛隊と昼飯かけて、よし競争しよう、と。自衛隊と競争したんですよ。学生ですから大騒ぎになりますよね。その時に初めて島民の人が笑ってくれたし、ありがとうってってくれたし。やった、これだなんて。自分たちが誰かのために何かをするんじゃなくて、自分たちが好きでここに来ているんだから、自分たちが楽しまない以上はボランティアもへちまもねえだろうって。ここを僕等は核において、活動をやっているつもりなんですけどね。

Q 学生の割合は男性と女性とは？

A (女性が) 4分の1くらいですかね。

Q 国土館自体が男性の割合の方が・・・

A 多いですよ。女の子が2割くらいしかいませんかね。

Q 下村先生ご自身はもともとこういったことにすごく強いご関心があったということですか。

A 全然、そんなことはないですよ。だから、学生が4年間、勉強もしないし、大して遊ぶわけでもないし、それでいいの？みたいな感じでね。もっと何かやれよ！ってな感じでね。世の中出たら忙しくなるわけだし、いろんな制約されるわけだから、ラストチャンスじゃないですか。だから、そんなところで係わって。

できるだけ自分たちも楽しんで、現地の人も喜んでくれるようなことを何か企もうよっていうような感じで、はじめはカンボジアに行こうと思ったんですけど、地雷の問題とかあまりにもリスクが大きいというので、たまたまラオスに。

一村一校運動というのをですね、国策上の展開してて、ちょうどよかったということで現地の村人とぼくらと現地の職人と三者で小学校を建設しようと、女の子は集めたピアノとかいろいろな楽器を持って子供たちに教えて、最終日に演奏会っていいですかね、そういう形でやったら、非常に楽しかったし、充実できたなって思ったんですよ

それから毎年ラオスの中のいろんな村に、最初は10人、次は20人、今年の2月はちょっと少なかったですけど、今回は40人。

Q ずいぶん費用がかかると思うんですけどね。こういう活動は。例えば、現地をサポートするのにかかる実費とか、渡航費用とか、そういうのはどのようになさっているんですか。

A 基本的には、学生負担ですよ。今回うちの団体でサポートできるのは、一人頭3万~4万くらいですかね。あとは、実質15、6万は学生負担ですね。

Q いきなり、とんでしましますが、羽咋市に海岸清掃にいらしたというのは、これはまた向こうと何かご縁があったんですか。

A 全然ないです。その前の年はね、奈良県の吉野の森林の下草刈りの行ったんですよ。要するに、最初次どうするよ、どこ行きたいって話をしている、沖永良部に行きたいっていうから、「よし沖永良部に電話しろ」って言って、農協とか観光局とかに電話して40人くらいで清掃したいんですけど、メシと宿を提供してくれれば、なんでもやりますってかたっぱしから電話するわけですよ。それがマッチングすれば行くと。

今年の場合にはね、神戸に行ったときにね、羽咋の観光協会の会長さんが、うどんを千食とか二千食とか持ってきてたんですよ。ぼくらの入っていった避難所といっしょになっ

て、いろいろ話してて、それで電話をしたら「ぜひ」って、羽咋の砂祭りっていうのがありますよね。雪祭を真似して、砂でつくったのがあるんですけど。それが年々、村おこしの関係上、人がだんだん集まってきて、汚いからって聞いてたんで、行きますよってって、宿だけ提供してもらって行ったんですよ。

学生アルバイトだっていうと絶対にかないですよ。ボランティアだっていうと行きますから。例えば、一日五千円だっていったら、みんな文句言いますよ。

Q これだけ働いてこれだけかよって。

A バカヤローふざけるなよって。そういうもんでしょ、でも。

Q 今年はラブリバーの時には具体的にはどのようなことをなされたんですか。

A 三年前からはじめて。最初は国土館の学生を中心として250人くらいで初年度やったんですかね。普通にやってもつまらないし、とにかく粗大ゴミを中心として川の中まで洗っちゃおうっていうことで、スキューバダイビングの連中もみんな川の中に潜らせて、小さいゴミは基本的には拾わないと。粗大ゴミだけは、さらっちゃうという。

だから、ガスボンベとか冷蔵庫とか、なんでこんなものが落ちているのかってというのが山ほど落ちていましたよ。だいたい普通粗大ゴミあげるとたいへんでしょ。後の始末。

初年度はバイクだけでも50台ありましたね。自転車はもっとありましたからね、60台とか70台とかね。それをあげるとどういうことになるかっていうと、バイクの場合はほとんどが盗難車ですから、通常の役所のルートでいくと、ついているナンバーのついてるもよりの警察に行って申請をして、盗難車だということをはっきり報告して、メーカー、ホンダならホンダに連絡をして、ホンダに引き取ってもらうという手続きになっちゃうんですよ。一台、一台。で、粗大ゴミですから、基本にお金を払って持っていってもらうと。通常はですね。

でも、僕等は世田谷区とか建設省とか、東京都清掃局に話をして、無理無理お話をして向こうも予算とっていただいて、今はやっていますけど。

Q そうすると、都や区の協力によって、行政の方で、そういう手続きを肩代わりしてくださっているということですか。

A そうですね。回収はもうそちらでやっていただいているっていう形で。

今回のケースですと、作戦をたてるのに2か月前から動くんですよ。なぜ、そんなに早く動くかというところ、スポンサー協力がありますので、なんのためっていうと、清掃が終わった後に抽選会をやるんです。

いろいろな賞品を来た人にまいているんですよ。賞品を集めなくちゃいけないっていうんで、学生一人50社電話かけて、電話させて・・・。それもすごい社会勉強になるんですよ。かたっぱしから、コンビニにある商品は全部メモってかえってきて・・・。

でも、とんでもない電子部品の会社かなんかに電話したやつがいて・・・（笑）。  
どうすんだそんなのもらってって。

そういうやり取りをやりながら、当日の作戦計画。1000人っていう規模で今年考えていましたから、何回も多摩川に行って、うまくトラブらないようにって。一番問題なのは、ゴミがないっていうのが問題なんですよ。ゴミ拾いに来てて、ゴミがないっていうのが一番馬鹿げた話じゃないですか。そこをいかにどうするか。前の日に撒きにいくっていうこともできないし。だからといって、あまりリスクの高いところには入れられないし。はっきりもう3年目になってきて、ゴミの量が3分の1くらいになってきてますよね。

Q そういう催しをやっていらして、ラブリーバーの催しに関心があって参加してくださる人々ですか、そうじゃなくてあそこの場所は普段からわりと利用者が多いところですよ。たまたま来ていて、いあわせた方っていうのがいると思うんですけど、そのへんの参加されるかたと傍観している方で感じられることはなにかありますか。

A 釣りしている人いますよね。その人たちにダイバー潜っているから開けてくれっていうんですよ。その時にもちょっとあるんですよ。「おう、がんばれよ」って言うってくれる人と「バカヤロー」っていう人と。

Q 従来住民団体とか、そういう方々が一家から一人でて、河川敷の掃除するっていうのがあったと思うんですが、全然違ったイベント仕立てで、学生さんたちらしいやり方で取り組まれていると思うんですけど、そういうことをやったことによって、参加された学生さんたちの変化みたいなことは、先生からみてお感じになることはありますか。

A 一応今年のテーマは、「拾う心より捨てない心」。だから、清掃すればだれだって捨てなくなりますよ。捨てなきゃ拾わなくていいわけだから。そういうことを認識するといいなと思っているんですけど。

参加した人はみんなそう思ってますよ。

でもそれと裏腹に、ゴミが少ないというところがっかりしちゃうっていう。非常に裏腹ですけどね。

Q よくわかります。私も自分でやっていますからね。ゴミがないと参加者がね、拾い甲斐がないっていうか。

特に、川とか海とか特定の自然に対して先生個人のもいいんですが。思い入れってい

うのはお持ちですか。

A そんなに大それたものはないですけど。やはりそのままっていうのが、一番いいわけ。僕なんか今の学生よりうんと年とってますから、出身が四国なものですから、普通の状態そのものっていうのが、僕等の年代だと自然に近かったわけで、それから普通の状態っていうものが、東京を見たときには、ハッキリ普通の状態じゃないわけじゃないですか。そのことを見て育った連中は、そのことが普通になっているっていう感覚ってあると思うんですよ。

普通の状態っていう線をどこに置くかによって、それぞれモノの考え方ってあると思うんですよ。だから、ダイビングやったりしますから、すごくきれいなところに行って潜ったりする人もいますし、そういうところに憧れているっていうのももちろんあるけど、元々あの海っていうのは、東京だって、日本だってあの海はあったんだっていう認識っていうのはほとんどないと思いますよ。

普通の道理をどこに置くんだっていうこととかね。俺たちがご先祖さんからもらったものだとすれば、それをやっぱり子供や孫たちに引き継いでいかなくちゃいけないっていうのはあって、多摩川なんて相当きれいになったらいいじゃないですか、昔に比べて。昔を僕は知りませんが。でも実際潜ってみるとすごく汚いわけですよ。よくこんなところで魚が泳いでるなって。ドブの匂いですし、白い浮遊物がずっと流れているし、よくこんなところに魚がいるなっていう位汚いですよ。表面的にはけっこうきれいになった、昔に比べれば。でもそれでいいのかっていう問題は違うでしょ。

Q 普段、奉仕活動的にそういうことをしていらっしゃる方には、拾っていてどんな変化があるかとか、というようなことをお聞きしているんですけど、先生方の場合は潜っていらっしゃるということで注目度っていうのは、ただ拾うのと全然違うと思うんですが、やっぱり見物する方とかたくさんいらっしゃと思うのですが、反応はどんな感じですか。

A なんて、川の中潜るかっていうのは、本流の方はモノって落ちていないんですよ。なんでかっていうと大水が出て流れちゃうから。ただこれくらいのところにね、自転車とかバイクとかみんな投げ込んであったんですよ。それを基本的にあげようということで、ウェットスーツで入ったんですよ。本流の方っていうのは本当にはないですよ。

A 犬の死骸とかいろいろなモノがでてきましたよね。

Q ラブリバーの活動は継続的に今後も・・・。

A ラブリバー多摩川を愛する会っていうのが、多摩川の清掃を二十何年やっているらし

いんですよ。で、去年初めて清掃を実施したときにパッシングしちゃったんですよ。ええ、向こうは二十何年もやってて、メンバーが変わってなくて、ちょっとこうね、お疲れになっていた。いろんな意味で。でもやらなくちゃいけないから、やっているみたいな感じで。

もう基本的にレンタカーを借りたりとか、おにぎりにしても、グロスで50万とか60万とかはかかるわけですよ。1000人っていうと。

学生だときついでしょ。そういう部分はラブリバー多摩川がやってくれる。しかし、すべての段取りはうちでやろうということで今年ジョイントしたんです。

学生はおもしろがってやりますから。向こうは豚汁とかそういうのはつくってくれて、スポンサー、当日のお金に関しては向こうが持つということで。それからそういう話をしていた、向こうは二十何年もやっていたから、二子玉川小学校のPTAとか、砧南のPTAとかとすごくネット持ってますから、その子どもたちも出てくるっていうので。

いろんなイベントを、ニッポン放送の人たちとかいろいろいますのでね、子供たちをいかに楽しませるかというイベントを毎年やっていますから、うちは清掃を主でやりたいと押し切って。PTAの人がすごくサポートしてくれたのは、清掃に行ってるわけだから、イベントのおもしろいのあるからそこに行くっていうこととは違うって。「清掃させてくれ」って。そうPTAのおかあさんがおっしゃってですね。

Q それはよかったですね。

A じゃあその線でやらせていただきますって。だから多摩川清掃大作戦っていうことでやったんですけどね。

Q 拾ったものは、分別とか・・・。

A します。子供にもやらせますし。清掃時間が基本的に2時間くらいしかないですし、汚いですからね、くさいですし・・・。どっちみちうちのスタッフがやらなくちゃならないので。当時は考えたんですけどね。量も多いですし。けっこうつらいですよ。

Q ラオス行きの準備でたいへんですね。

A もうなれてますからね。

Q 同じ方は・・・。

A 基本的には行かないです。スタッフで一人か二人は経験者を連れていきますけども。

Q 何年生が中心なんですか？

A けっこうね、4年になると行きたがるんですよ。それまでノンポリで過ごしてきて、世の中でちゃうっていうので、最後にね、自分のね、最後に許されることをやりたいっていうのが多いですよ。

阪神は今年の1月だったですね、圧倒的に4年生が多かったですよ。

Q 今のうちに、社会に出る前にここままでいいのかって。何かやってみたいというのですかね。

A そうそう。4年くらいになると考えるみたい。けっこうテレビに出たりして有名になってますけど、1年生、2年生は入らないんですよ。やっと受験終わってのんびりするぞって学校入ってきているのに、わざわざなんでそんなとこに行ってるって。3年とか4年になるとポチポチと乗ってくるようになるんですよ。

Q 他大学でもこうした活動があると思うんですけど、そういうところの交流とかはされていますか。

A けっこう、早稲田とか慶応とかの連中がうちに入りたいて言ってくるんですよ。いろんな団体のほとんどの団体が、ボランティア論とか・・・。アクション起こすってお金がかかるし、外務省だとか厚生省だとか、学生レベルでやりとりするってたいへんでしょ。特に現地のわけのわからない政府とやりとりしなくちゃならないって。そこまで学生普通やれないでしょ。

たまたま僕が物好きだから、そういうことをやっているから成立しているけれども、各大学は阪神には行った。そのことで、こういうことで立ち上げようということで、立ち上げた。しかし、じゃや何やるの？って。災害待ちなのかって。それもおかしな話になっちゃうでしょ。じゃあ、何やっているかって。ボランティア論を喧々愕々とやっているわけですよ。うちは、そうじゃなくて、アクションを起こすために団体を組織しているわけだから、組織を守るために何かのイベントをかまさなくちゃいけないっていうことではないから、おもしろくなくなったらやめちゃうっていう、団体ですから。

3年前にたまたま250人でやれたんだと思う。翌年、当然4年生は卒業しますから、翌年のチームはノウハウがあるわけですから、手抜いてやろうと思えばやれる、でも同じ感動を味わおうとしたら、倍の人数でやろう。じゃないとお前ら同じ感動を味わえないだろうって。500人でやって、今年は当然またそのノウハウがあるわけだから、1000人にしようというわけで1000人にしていくと。そうすると先輩たちと同じ感動を味わえるだろうって。



ラオスも10人から20人、今度は40人。奥尻島は20人だけど、神戸は延べ人数で90人とか100人とかいましたから、5日間で1500食の食糧を用意して、ポリタン40本の水持って、最初は50人いったんですけど、50人が寝泊まりできるテントと食糧から全部5日間で用意するわけですから、発生と同時にですね。これはなかなかたいへんですよ。すごいノウハウですよ。

Q そういう体験を学生の時にやるというのは貴重な体験ですね。

A そうですね。自分たちが何かやろうと思ったら、なんとかなるんだっていうのがね。ほとんどが不眠不休ですよ。出発までに。

神戸の時はさすがにすごいと思いましたよ。最初災害が起きて、募金をはじめて、駅にお願いして。250万くらい集まりましたかね、それはそこに市役所に渡したんですけど。人々の募金の入れ方がすごいんですよ。1万円入れてったりとかね。

これなら「行こう」ってね。行こうって決めてから5日間、本当に・・・高速で行くにしてもお金かかっちゃいますから、結局トラック3台とワゴン車6台。最初50人行きましたから。いろんな手続き、警察とか、高速代ただにしろとか、あらゆることを駄目もとであちこちに電話するわけです。ただになったりなんかして。

たまたま、日本船舶振興会が応援してくれて、レンタカー代はうちが出してやる、と。車10台用意して、スタッフ10何人、5日間ほとんど寝てないしね。現地入ったら、当然50人がテントはれるところなんてそうそうないですから、僕等は元々その予定だったから、全国から救援物資が入るところ、神戸から北に30キロくらいのミキ市っていうところでね、テントはったんです。

10トントラックとか20トントラックとかドンドン入ってきてるけど、下ろす手も無いし、もちろん運び出す手もないんですよ。とりあえずそこに入って。運送屋になっているわけです。

3つの班に別れて、長田区、灘区、東灘区に車で3人ずつくらい走って、その避難所に入れて。公園で寝てる人たちがいますよね、昼間そこに寝ている人たちのオーダーを聞いて、夜本部に連絡がきて、夜中に配送するわけですよ。一日一時間か二時間くらいしか寝られてなかったですよ。10日間。寝てるテントの中で、朝起きると水が凍っているんですよ。だって病気になるなかったですよ。女の子も。1回ももちろん風呂も入っていないし。

Q 気力が充実しているとそれくらいまでいっちゃうんですね。

A あのテンションでしょ。すごい状況だし、本当に欲しているし、いろんなものをね。だから、非常に難しいところなんですけど。どんどん要求がね。

ただの布団持って行くと喜んでくれたのがね、もっと厚い布団持ってこい、もっと高級な毛布もってこいて。だんだんそういう風になっていくじゃない。

そこまでいくと、もう僕たちはケアできませんから。だから、学生がボランティアにそこについて、ボランティア元年だとかいって、学生が非常に評価されているけれども、決してそうじゃなくて、うちはそういう活動していて、学生いっぱい来ていて、うちへ入れてどんどん取り込んでいくじゃないですか。ほとんどの学生はずらかっちゃったんですよ。うち以外の連中は。

それで避難所に入って、行政からもらった弁当食いながら、行政の悪口言っているわけですよ。それは話が違うだろうって。行政の人達だって被災者なんだぞって。そこに、うちが50人も行って、働いていたわけですから、いなくなったらたいへんなことになっちゃうわけですよ。お前ら帰った後どうなっちゃうんだ、ばかやろっていう話になったり、じゃあ行かない方がよかったのかっていう話とか、いろんなことがあるわけですよ。

でもすべての基本は、俺たちが来たくて来ているんだから。そういうことですよ。それで割り切ってっていうかね。あくまでも背中が痒いから掻いてくれっていうお手伝いで行っているわけじゃないから。現地の人たちが社会復帰するためのお手伝いで行っているわけだから、やっちゃいけないことはしないし、いくら被災者だって「うるせえコノヤロウ」って喧嘩にもなるし。そのことの方が僕はずっと健全だと思うんですね。

Q そうですね。別に施しをしに行っているわけじゃないんですから。

なんかいいお話を聞いて、ありがとうございました。

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1996. 3. 27

佐々木一男氏（全日本釣り団体協議会理事・広報委員長  
日本溪流釣連盟副会長）

A

釣りってという言葉は、我々今平気で、こういう場所とか、町中とか、通勤の電車の中でね、「明日釣りに行こうや」なんて言うけど。釣りってという言葉は今使えるわけなんですよ。ラフな気持ちで。ところがね、10年から、15年前までは釣りってという言葉は使えなかった、意識の中で。なぜかって言うと、釣りってというのは非常に同じ趣味であり、レジャーであっても、非常にレベルの低い、そこにはマナーの悪さとかも含まれてもいるんだけどね、非常に低俗な趣味と思われていた。

「あなた、釣りおやりになるんですか」という言葉のなかに、「なんだ、あんた釣りやるのか」っていうね。道楽ってという言葉があるでしょ。例えば、何かに凝っているのを道楽っていうじゃない。道に楽しむっていうのが、道楽だよ。釣りの場合ね、道に落ちるって書いて、ドウラクって言われたくらい、その低俗な趣味とされていたわけよ。あまり大きな声でね、言えなかった。

満員電車の中でね、新聞広げたり、雑誌読んでいるでしょ。釣り人の雑誌なんて見てい

る人なんて一人もいなかったの。それくらい釣りはね。

ようやく、この15年くらい前から、大手を振って語れるようになったの。

それは認められたというよりも、日本人がレジャーというものを、生活の中に広げていって、釣りもそれにきただけなんです。今もってまだ釣りってというのは、レベルが低いです。全部が全部そうじゃないですけどね。

というのは、釣りをやる人間というのは、不特定多数なんです。ピンからキリまである。金持ちもやるし、貧乏人もやる。何千万もする船を買ってね、ドンドン乗り出していく人もいるし、溪流の好きな人は山奥に広大な土地を買って、別荘を建てて、そこに流れている川を「これは俺の川だ」と。川は個人では固有できないんですけどね。バラ線を張って人を入れないようにして、自分だけの魚を放して楽しんでいる人もいる。

全くお金なくてもできるんですよ。そのへんで竹切ってきてね、糸がなかったら、それこそこういう古い洋服を糸にしたってできるわけですよ。針がなかったら、木綿針曲げてつくれば、えさはそこらへんの糸みみずでもなんでもいいわけ。

そういう風に釣りってというのは、ピンからキリまである。釣りをやる人もピンからキリまである。要するに不特定多数なの。全く卑下された言葉ですよ、文法、文字からするとね。

不特定多数という掴み所のない、釣り人口ってというのは、3千万とか4千万なんです。1億2千万しかいない人間のね、たいへんな数ですよ。実際はそんなにいるわけじゃないですよ。生まれて、死ぬまでの間にちょっと釣りでもやったことがあればそれは釣り人になっちゃっているわけ。

本当に週末を利用して、月に1回とか2回釣りに行ってるね。その釣りの道具を買ってっいていっている、本当に趣味にしている人は、裏の計算でいってせいぜい4、5百万じゃないですか。そういう人たちは、不特定多数、ピンからキリまでであるから。川を汚したり、ゴミを捨てたりっていう人もピンからキリまで。意識の高い人もいるし、低い人もいる。

釣り人っていうジャンルを形成している中に、上と下の区別がつかないような……。僕等のところではね、あなたたちにそういう質問を受けると思ったけど、「なんで釣り人はゴミを捨てるんですか」って。僕は、釣り人より、普通の観光客の方が多くて僕には言うつもりができたけどね。でも、それは僕や僕の関係している仲間とかの意見を総合しているだけであって、何十人か何百人程度の人間のですから。また違うところから見ると、釣り人はやっぱりゴミ捨てているんだということになるかもしれない。

でも、そういう風に全ての釣り人がみんなゴミ捨てて、マナーが悪くて言われちゃったら、ここでなくしなくちゃいけないですよ。

・・・（聞き取れない）・・・

僕の個人的な考えだけど、釣りっていうのは芸術だと思っているんです。やっぱりね、人間の持っている技っていうのは、簡単にね、禁止したりすることができないと思うんですよ。ゴミを捨てる、マナーが悪い、魚を採りすぎるっていう日本人の釣りはいけないんだっていう風になると、口では強気でいっても、僕は反省しますよ。リーダーとしての掌握ができないのを悲しく思います。だけどね、僕はさっきも言ったようにね、あなた方が多摩川でゴミを集めてくる、そのゴミを仕分けしてみて、それがハッキリ分かるんだったら、釣りをしにきた人のゴミと一般の人が捨てたゴミでは、僕は釣り人が捨てたゴミの方が少ないと、5、6年位前からね、マナーっていうか、そういうことを、あらゆる釣りの組織の中でうるさく言ってきているからね、少ないと思う。

Q

一部の人が行いが目についてしまうということじゃないかと思うんですけど。

団体の中でね、マナーの問題とかが活発になってきたというお話はあったんですけども例えば初心者の人に対する教育とまではいかななくても、釣りの技術だけではなくて、総合的なことをレクチャーする場面ですとか、幼少の人が来たときになんとなく大人が教えてやるというような中で、ゴミや環境に言及するような場面っていうのは多少は、増えてきているんでしょうか。

A

いま、ピンからキリまでっていう話をしたけど、年齢的にも老人から子供まで。老人とか、物心ついた中学くらいに入った人とかは、基礎教育でそういうことを教えられているから、よほどのことがなければ、そういうことはしないとと思う。

じゃあ、小学生くらいの子供がゴミを捨てるかということ、もちろん捨てるケースもあるけれども、とにかく日本の教育っていうのは、小学校から大学まで、レベル的には高いですよ。これで、直接「君、釣りに行ったら、川にゴミを捨てにいっちゃいけませんよ」という風には言わないにしてもね、そういう意識というのは啓蒙されているわけだから、多少の個人差はあっても、そんなにしないとと思うの。

ただね、農耕民族ですからね、まだね。野原があるだけで、川は田畑に水を供給するあれですから、そういう一つの農耕の中にある仕組みで、いろんなものが使われて、それが何年かたって、壊れて行って、なにかバラバラになって、川にひっかかっているというものはありますね。そういうものが多いわけです。

溪流やる人たちの話はね、あの川はゴミが多いから行くのをやめようという意識が出てきているんです。選ぶようになってきているんです。それくらいにね、ゴミのある川はイヤだと。魚が居てもね、ヤダとね。

日本の場合は、農耕民族と同時に狩猟民族だから、食べるという意識が強いですよ。僕も食べますしね。そういう基礎的な観念の中で、汚れの激しい川っていうのは、まあ、いろんなものを含めて、食べないとか、触りたくないという気持ちが起きてくるでしょ。そういう風になっているんですよ。

今特別組織の中で、諸君ゴミを捨てないでくれたまえなんていうことは、そんな大人に向かって言いませんよ。こういうパンフを作った片隅に「ゴミは持ち帰りましょう」なんていうのを入れておくけどね。面と向かってゴミを捨てるな、なんていうことはない。

これなんか、自分で編集してますからね。本当はね、ここに「沖縄の海は日本一汚れている」なんていうサブを最初は入れたんですよ。

これ見たってね、そんなにゴミを捨てることが罪悪だって書いてないんです、僕は。やっぱりそこで生活している人とか、1匹か2匹の魚を釣ってね、それが自分の食糧になっている、そういうような人がね。例えば、ゴミを意識的に捨てたか、あるいは忘れたか、いろいろあると思うんですね。それは咎められないですよ。

その人がおいてったゴミを僕等が持って帰ればいいわけだね。たまたま、ここではそういうことがなかったということだね。だいたい内地の場合は、そんなにないと思うんですね。僕等の場合は、誠に申し訳ないけど、大人がつくった組織で大人同志で活動していて、少年なんかの指導もやっているけれども、これからっていうような感じじゃないかな。市や町の教育委員会に働きかけて、釣りっていうよりも、その野外活動のね、その指導に

・・・

あなたたちのように、クリーンアップとかって言って、ストレートに言わないようにしているのよ・・・（聞き取りにくい）

Q

・・・（聞き取れない）

A

団体に所属している人の方が意識が高い。それは日本のいろんな組織あるじゃない。組織があり、監督官庁があるわけじゃない。組織に入って、組織の中で活動していることが望ましいんじゃないかな。釣りの場合ね、釣り会に入るといろんな制約を受けるとかいてね、会費という名で金を払わなくちゃならんとか、いろいろあるわけよ。入りたくないとか。

ぼくらの中では、一匹狼という言葉を使うんだけど。今ね、日本に釣り人口が3000万人いるっていう、仮定にしてもね。全釣協の会員全部含めたって18万人くらいしかないんですよ。私なんかがね、入っている日本溪流釣連盟っていうのは、全釣協の傘下に入るんです。北海道から九州まで支部があるんだけど、・・・・・・。

各地の市町村のクラブが集まって、60団体くらいのこと。個人の組織に入らない人も勧誘したらいいんじゃないかっていうんだけど、他の連盟はやってないけど、日本溪流釣り連盟だけは、全国の溪流釣り愛好者の人に声をかけたんですよ。単独で組織に加盟しませんか、と。個人会員でね。その会費に見合ったものは、それ以上のものは、毎月出している会報を送ってやっているわけですよ。会報いれて、送料いれて、袋いれて、一回出すと200円くらいかかるものを、毎月やるから、年に12回、2400円でやって。それを3000円くらいの会費で勧誘して・・・。そうしたらね、今は300人くらいだけど、一番多い時は400人くらい、個人会員が加入してきたの。個人会員の中にもね、組織に入って制約を受けるのはいやだけれども、マナーとか釣り場を保全するとかね、自然保護運動というものもないがしろにできない、と。それは、みんな組織の中で一つのそういう活動をしなくちゃならないという意識はできちゃっている。他の磯とか海とか、の会では個人会員とかやってない。日本溪流釣連盟というのだけやっているんですよ。

個人会員っていうのは、一人ですからね、20人、30人からできてくるクラブと、あなたたちが心配している意識の部分は弱い。弱いっていうよりも、発言がないね。僕等にとっても物足りない。一人じゃできないんだろうけどね、3、4人が集まって会じゃなく、グループをつくりなさいと。組織の中でやった方が、一人二人よりも組織の方が力が強いじゃない。そのエゴイズムっていうのかな。ピンからキリまでっていう、不特定多数の一人とか二人とかっていう話になったちゃう。意識をそこまで持っていくのは、難しいじゃないかな。

Q

それだけじゃなくて、日本全体でもアウトドアブームで・・（聞き取れない）・・・。

A

アウトドアっていうのは最近のことですよ。それまでは、野外活動とかなんとかって言って。アウトドアなんていう言葉は、ゴロもいいしね、同じ趣味でも上質っていうかな、かっこいいっていうかな。最近はやヨーロッパ的な考えで、服装なんかでもね。全くすごいんだよね、キンキラキンで行っているからね。そういう雰囲気の中で、自然の中に自分のものを持ち込んでその雰囲気によってそれが楽しんでいるんだよね。

そこで、車の中へ持ち込んだテーブルや椅子を出してね、ランタンつけたり、ガスバーナ持ってきたり、発電機持っていったりね、僕等には想像もできないようなことを平気でやっているものね。

僕等は、それまでは山に行って、テントでねて、ささやかな食事をつくって食べるのがあれだったけど、今はそうじゃないでしょ。なんだかんだって。そういう人たちが持ち込むね、食料のカスだけでもたいへんなんだ。持って帰る人もいるよ、燃す人もいるよ、もちろんね。燃しきれないうちに、水かけて帰ってしまう人が多い。それとね、僕等の場合はね、河原で静かに釣りを楽しんでいるのが、そういう人たちが、川を占領するでしょ。これはもう僕等は釣りができなくなっちゃうのよ。

ぼくらの釣りっていうのはね、ライセンスをちゃんと払っているんですよ。入漁料払うわけ。だから、合理的なやり方なの。管理している漁業組合に払って、釣らせてもらいますよって。それが、川に遊びに来ている人にはそういうのが全くないわけ。だからその、僕等とアウトドアを楽しんでいる人たちの間にはかなり、今まで目につくような、争いはないけど、将来絶対にあると思うな。

川の中に入って石を持ち上げて、なんかこう、したりね。いわゆる川の流れを変えてしまったりするわけよ。これはもうなんていうかな、傾向だからしょうがないよね。

きれいごとに片づけられちゃってね。

ちょっと話ずれるけどね、日本の釣りをちゃんと組織だてて、政治レベルまであげて、それを漁民とか、魚の問題とか、環境に対応しようっていうのは、全国釣り団体協議会で、農水で・・・。それを始めようとした段階で、文部省がね、同じような構想を持ったわけ。文部省の場合は、青少年の教育と育成というような言葉で、文部省の考えた言葉は、アウトドアとか、スポーツナントカとか、農水の場合は、ぼくらの場合みたいに年配の人間が参加したから普通に釣りとか、釣り人とかっていう言葉を使ったのですが。

農水の場合は、釣りも含めたアウトドアと自然とかね、環境とかのかかわり合いを、文部省公認のインストラクターで持ってきたいというのはあるらしい。

釣り団体協議会というのはお金がないですからね。麴町に事務所構えているといっても、傘下の組織がお金を出し合うわけですけどね。

あとのいわゆる活動費というのはでないですよ。農水はいくらか補助してくれていますが、全く知れてますね。3000万人も4000万人も釣り人がいるっていう、そういうバックがあるのに、300万円ですよ。年間に。だから結果的には何もできないんですよ。

インストラクター制度っていうのをやれば、受験者から受験料をとれる。合格したら登録料もとれるっていうんで、これは今年で3年やってて、それでもってようやく活動も、こういうものも出せるようになったんですよ。

僕がやるんだったら、もっと厚くして、雑誌形式にして、広告入れて、賄えるようにしたいんだけど、やっぱり広告入れるのもよくないし、制約されるんで、できない。何もできないっていうことは、あなたたちが言いたいだろうと思うのは、例えばゴミの回収運動とかね、ボランティアが少ないんじゃないかということになるんだろうと思うんだけど、今の現状ではね、金銭的な問題が解決できなければ無理だろうと。年に6回、理事会っていうんですよ。大阪と東京で半々くらいでやるけど、旅費は全くでないですよ。

.....(聞き取れない).....

ゴミ拾いに多摩川へ行こうっていうっても、「だれが車出すとか」、年寄りばかりだったら、車もそんなにできないでしょ。若い人は、釣りに行きたいですよ。なかなか足並み揃わないですよ。

期待してくれる人もいるしね、組織もあるんですよ。うちは出してもいいから、もう少し啓蒙運動に力入れてくれてって言われるんだけどね。情けないと思ってます。

原健三郎さんっていう代議士がね、前の衆議院議長が組織の会長やっているんです。・・(聞き取れない)…要らないっていつているの。成り金さんでいいと。バブルで大儲けた、人に会長になってもらおう。全国組織の会長になってください、と。そのかわりお金使わせてくださいと。名義料みたいなものですよ。むしろそういうことやりたいわけ。

だけどやっぱり政治家みたいなのを会長にしておかないと、農水からたくさんのお金はもらえない。だけど、ちゃんと仕事をやっていけば、予算も増やしてくれるだろうという密かな期待も持っているわけですよ。

釣りもね、大きく分けると、海釣りとは川釣りにわけられるんですよ。いわゆる海は海面、川は内水面、農水でも海面と内水面と専従漁業者っていうんですかね。もちろん海面の方が強いんだけど、海面の海の釣りの中にも磯釣りっていう、岩場の釣りと、船に乗って釣る釣りと、投げ釣り。港やボートの湾で小さなプレジャーボートなんかを出して、人工的につくった屋形とか筏を漂流して、そこに魚を集めてやる、これは関西だけ。内水面でもヘラブナ釣りとか、溪流釣りとか、最近ではルアー、フライっていう向こうの釣りがさかんですからね。いくつもあげられるんですよ。海面の釣りはですね、日本の場合は海面の釣りが多いんですよ。内水面の3倍くらいいるんですよ。で、その海面ではそういう釣りの行為をするためにライセンスをつくって、お金を払って釣るっていう制度がないです。全くない。釣り放題。だから、漁業者として●●権を出しているんです。



漁業者の場合は権利を持っていますからね。内水面の場合は、ヘラブナ釣りも、溪流釣りもアユ釣りもお金をちゃんとライセンスを取得します。年間の取得もあるし、その日だけの取得もあります。川のそういう場合は合理的なギブアンドテイクのあれが・・・。今の日本の釣りの場合にはね、海と川が、海の方が危機感がある。釣り場の汚れが・・・。

(A面からB面へ)

・・・川を汚したわけじゃないですよ。お金をとらない、お金を払わないっていう安易さがあるから、よけいそういう汚れを誘発するっていうかな。漁民もそうだし、釣り人もそうだろうし、単に海岸に遊びにくる人もそうだろうし、非常に意識が弱いんですよ。川の場合には、釣り人はお金を払ってこの川で遊んでいるんだということは、だんだん分かってきているからね。川に遊びにしている人は最近はそんなにゴミ捨てないですよ。

魚もね、捕り放題捕られているので、海は少ない。川の場合は、我々が払った入漁料っていうのは、漁業組合入って、その漁業組合は我々の払った金の何分の1かを、アユとかヤマメとかという魚を放流しなくちゃいけないというのものもあるわけです。漁業組合法で。だから、魚を放しているから、川沿いの方は危機感がないんですよ。毎年、毎年放しているから。漁業組合が釣り人からとったお金で魚を買って放す他に、我々釣り人が自主的に放しているんですよ。すごく放している。だからもう、日本の川釣りの魚の放流っていう行為をこれは、世界一だと思っている。アメリカの場合は、政府や州がどんどん放しているから、釣り人個人はそんなに放しません。

ヤマメとかイワナの養殖所っていうのがあるんですよ。各県でだいたい養殖所を、自治体で経営しているんですよ。

あと5、6年もすると。川釣りをする人と、海釣りをする人の意識が逆転するかもしれない。海から離れていきますよ。釣れないからね、やっぱりおもしろくないもの。釣れないからね、マナーも悪くなっていくの。

Q

多摩川でも中流とか下流とかでも釣りをやっていると思うんですが、ああいう釣りは入漁料とかは関係ないんですか。

A

本当はありますよ。

川は、多摩川を例にするとね、青梅のちょっと下流くらいから上が、奥多摩漁業組合っていうその、組合があって、これは溪流ですね、ヤマメ、イワナを主体にした、漁業権を持っている。それから下にね、羽村の堰あたりから、下全部かな？ ちょっと不勉強で申し訳ないんですけどね。組合が違うんですよ。それはね、どうなっているかな。

東京都と神奈川とね、一本化しているかな？

Q

上の方では解禁日とかそういうのが分かりますけど、下の方ではわかりませんよね。

A

下はないよ。確か、禁漁期間とかそういうのはないはずですよ。フナとかコイは。溪流はね、魚が産卵するでしょ。その産卵期にかけて守るために、禁漁期間というのがあるの。下流はね、ないのかなあ、多摩漁業組合だよな。

あれもね、僕等という雑魚釣りっていうのはね、雑魚権っていうのがあるんですよ。溪流をやるのより安いですよ、半値以下かな。さらに中学生が半額とかね、あるんです。60歳以上の方は半額とかっていうのもあるんです。川の場合は、今の日本で全ての川で漁業権っていうのは設定されているはずなんです。

戦争が終わって昭和30年前くらいまではね、漁業権のない川っていうのがいっぱいあったんですよ。それがどんどん出来ちゃって、大きい組合が手をのばして、それはね、ダムをつくってね。発電につかったり、灌漑につかったり、工業用水につかったりするでしょ。それに対する補償めあてにね、漁業権を設定したんです。でもほら大きなダムができる。ここに組合に漁業権を持っている。何年かでこれだけのお金を使っている。これだけの人が遊びにくる。いわゆるダムで儲けたっていうところがたくさんあるでしょ。それでみんな設定しちゃった。

まあ、管理していればね、いいんです。だけど今の漁業組合は我々からお金をとって、たまさか魚を多少放すっていうだけで、川の掃除とか、例えばアウトドアの楽しみにくる人にトイレを作ったり、ベンチを作ったり、そういうことは全くやってないですからね。市町村、自治体では、中央に対するゼスチャーっていうかな、多少やらなくちゃ地方交付税もらえませんか、やっているっていうか。

Q

普段いかれる川はどんなところですか。

A

東京とか関東とかは、釣り場がないですよ。東京から車で150~200キロくらい走った外へ行っちゃいますよ。例えば金曜日の夜ね、仲間の若い人がお勤めして帰ってきて食事してね、釣りの用意をして、じゃあ、11時にね新宿へ集合していこうなんていうでしょ。

高速に入っちゃえば、夜明けまで走れるわけだから。僕等の溪流釣りっていうのは、今のこういう時期だと、5時くらいにポオッと明るくなくからね、それまで走れるわけよ。途中で仮眠したりしますからね。かなり遠くまでいっちゃいますよ。金曜日の晩に出て、日曜日に帰ってくるとなると、秋田くらいまでいっちゃいますよ。

遠くへ行ったほうが楽しみがね。自然も残っているしね。

Q

ずいぶん、参考になりました。ありがとうございました。

A

釣りの本では、日本では僕が一番出しているのではないかな。今は、名前出さないですよ。飽きられちゃうから。

公認インストラクター、平成9年度で、組織をつくって、いわゆる地方の都道府県単位に支部をつくって行って、いろいろと活動してもらえるようにするんだけどね。たいへんな仕事なんだよね。その組織をつくるのはわけないんだけど。

例えば、活動の場がないと。今度で約2000人くらいがインストラクターになる。全国散らばってますからね。東京なんかでは、300人くらいいるんですよ。いわゆるボランティアで活動してもらうんだけど。受入れがなかなかね。

ただあなた方のように、休みの日曜日に掃除するとか、ゴミを拾ってくるとか、それだけじゃだめなんだよな。子供たちをつかまえて、釣り方を教えてやらないとね。拾って自分で持ってきて、それを子供たちが見て、「このおじさん、僕の捨てたゴミを拾っていった」。そういう教え方をしなくちゃならないからね。大人と子供っていうかね。

大人同志だと、コレ（ケンカ）になっちゃうわけよ。俺は楽しみにきたんだ、金払って楽しんでいるのに、ゴミがなんだって。その活動のもっていきかたがね、難しいっていうか、たいへんなんです。

これはちょっとね、さっき言い忘れたけどね。日本人の釣りが、不特定で、纏まりがなくて、全国組織の18万人くらいしかいない・・・。俺についてこいってというようなリーダーがないから。これからも当分ないだろうしね。そんなことでインストラクターの活動についてね、あなた方が発表の場を持つっていうんなら、資料を差し上げて、正しい理解をしてもらえるような紹介をしてもらえるかなってというような気持ちで来たんだけどね

Q

私たちがお目にかかれるのは、佐々木さんのようにご自分がなんらかの活動をされているという意識の高い方ばかりなんですよね。立場は違いますが、同じ海とか川とかを共有する人同志としていっしょにやれることがあるような気がして・・・。

A

これからはね、インストラクターも、そうでない人も全釣協っていう団体にね、加盟しているとね、ドンドン釣りだけでなくね、ボランティア活動だとか自然保護だとか、僕はどういうものを含めて活動に出していかななくちゃいけないと思っているんです。

でも、我々でやるとどうしても釣りが優先しちゃうわけよ。5人くらいのリーダーがいてね、やろうじゃないかって。だから、こういうことをやっている人もいるんだとか、お互いに協力しあうとか、っていう風にできればやりやすいし、飛び込みやすいよね。

例えば、僕らのような74歳のじいさんが、私も四件受けてインストラクターの四件うけて合格したんですよ。それがね、やっぱり若い人たちといっしょに海行ってゴミ拾うなんていう、ほほえましさをね。老人には老人に、若い人には若い人に・・・。

いくら、早く起きてジョギングしたとか、健康法かもしれないけど、野外で若い人と同じ目的で同じ行動してっていうのは、すばらしい健康法であり、生活のアレになるわけよ。そういうことをやっていきたいなと思うんだけど。

心の隅に止めておいてほしいんだけど。野鳥の会っていうのがありますね。あれは物凄くお金を持っている組織ですね。政府だって年間何億っていうお金を補助している。去年の夏ごろかな。全国の新聞に1ページ広告。

おそらく100万、何百万だろうな。全国にですよ、都道府県。これはうらやましが先にくるんだろうけどね。野鳥の会がよく鳥の足に釣りの針がささったとか、飲み込んでいるとか、糸をひきづっているとか、写真を出してやるわけだよな。

僕らにとっては非常に迷惑なんですネ。それはね、そういうこともあったかもしれないけどね。我々にも釣り人の意識を啓蒙していこうという活動体もあるし、そういうこともやっているわけですよ。やっていることは、野鳥の会と比べたら、雲泥の差はあるけど、他の団体を非難するようなやり方っていうのは困るんですよね。

我々の力が弱いから反発できないんだけど。私はねこの鳥を撮りにいったの。200ミリの望遠でもって撮って、ここに釣りの糸がね、足にもし付いている可能性があるかどうか、ちょっと無理なの。写りません。ましてやね、写真のネガでは写ってもね、新聞の広告に引き延ばした場合には絶対にうつらない。ボウとしてしまって。それがね、アリアリと出ているわけよ。それをね、僕らの計算でいくとね、あの鳥の足に写っている糸っていうのは、ぼくらの親指大くらいの糸になっちゃうわけ。そんなことありえないわけ。

それをね、釣り人が糸を捨てるから鳥がこうなっちゃうって。叩くわけなんですよ。この写真をとったカメラマンはだれなのかって、会見させてくださいって。どこでいつとったかね、ネガを見せてくださいって。

釣り人が捨てないとはいわないけどね、そういう足に絡めた鳥も出てくるかもしれない。だけどね、本当に新聞で騒ぐようなものではないだろうと思うの。

Q

釣りをすることがすべて悪であるというようになってしまうのは、よくないですね。

A

こういう広告にあなた方の団体の、こういう写真を載せますよというようなことがあれ

ばね、会員に対する啓蒙ができるわけですよね。そうでなく、ただ釣り人の捨てたゴミという風に扱われちゃうとね。

例えば、漁民もいるんですよ。もっと港なんかにはゴミを捨てているんだよね。

同じ環境保全というスローガンをかかけてね、やっている仲間っていうか、そういう組織があるのにね、そういう過激な言葉を使って我々を一方向的に悪者にするっていうのは、いつか反発してやろうなんて思っているんだけどね、力がない。

何かあった時には、うちの事務局まで来てくれれば、ボランティアが足りないとかそういうことをおっしゃっていただければ、一月とか三週間前とかだったら、動員できますから、お手伝いできると思う。

ゴミを調べてみても、釣りのゴミは多い？

Q

圧倒的にということではないですけど・・・。

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1996. 3. 28

疑似餌釣連盟（JLAA） 相川直之氏

A

僕は割りと多摩川で釣りをしますけどね。ゴミの問題っていうのはね、何種類かあるんですよ。

一つは、釣り人や遊びに来た人が出すゴミと、生活排水だとか、地元の人が川を一種のモノ捨での場所にするような、大きく言うと二種類あるんじゃないかと思います。

私は主に溪流釣りをやっているんですが、釣り人の間ではね、最近では川だとか、山にゴミが出るということについて、非常に最近のハイキングの流行がね、悩ましい問題だなというふうに言ってます。

最近では、中高年の方々もずいぶん川だとか山に来るようになったんですけど、都会感覚が残っちゃっててね。ゴミっていうのは、だれかが掃除してくれる、回収してくれるという風にね、思っている人が結構多いんですよ。非常に開放された気分になって、食べたものを残していくっていうのが多くて、以前はね、山屋さんがね、釣り人を嫌っていたんですよ。で、それが大分、川を釣り人が汚さないようにっていう風になってきたら、今度はハイカーたちを釣り人たちも「困ったもんだ」というようになったって言うのが一つの動きですね。

それともう一つは、今すごいリクリエーション、ビークルだとかっていうことで、釣りにていうものを、そんなに詳しくない人もドンドン参入してますよね。そういうことの中で、自然っていうのは、ほっとけば汚れちゃうだっという意識が割合少ないっていうか、そういうことまで、教育されていないっていうか、お互いに気をつけあってないっていうケースもかなりあるように思いますね。

我々の団体だけでなく、釣り人の団体、全釣協なんかも始終ゴミ袋を送ってきましてね、要するにゴミ掃除をすとか、自分たちで使ったものは持ち帰るとか、それは各クラブ、我々のクラブでも心掛けていますし、今日日置川<sup>ひきがわ</sup>って行って、和歌山県に川があるんですけど、サツキマスの放流<sup>はなう</sup>っていうことを、地元の漁協と協力して、釣り場をつくらうっていうのをやっているんですけど、そういう時の催しでは、いっしょに川の掃除をしよう、と。

ゴミを拾ってきれいにしようということもやっているんですね。ご存じかもしれませんが、疑似餌釣りというのは、餌を使わないんですよ。フライとかルアーとかっていうので。非常に悩ましい問題なんですけども、海でも川でもそうですが、餌の公害っていうのはあるんですよ。蒔き餌をすとか、そういうことをやって、いろんなことがあるんです。そういう意味で言うと、餌釣りだから駄目だ<sup>だ</sup>って言うようなことではないんですけど、

所謂川虫であるとか、ミミズではない、団子をつくってあれすとか。そういうのは色々な問題が、あるんですね。

餌よりも、何より一番の問題は、缶でしょう。缶とか、自然にほっといても、腐食しないようなものっていうのが、非常に増えてますよね。プラスチックとか缶だとか。そういうモノは、持ち帰る以外に方法はないんですよ。なかなか持ち帰るっていうことが、なされていないというのは、気がつきますね。

我々は、谷に入るとみんな持ち帰るということですよ。そういうものは、みんなで心掛けています。「ゴミは持ち帰る」と。燃えるゴミもね。そういうようなことで、心掛けていますし、各クラブでもみんなで心掛けようということでやっていますけどね。

全釣協でも、釣りインストラクターということで、釣りのあれするだけじゃなくて、ルールやマナーなんていうことにも、随分、そういうことも仕事なんだということでやっていますよね。

ただ、悩ましいのは権限がないわけですよ。要するに、注意をすとか、アドバイスをすることであって、やらせないっていうことができないわけね。それはそれで仕方がないんだけど、「俺は勝手だ」なんていうことに対してどうするか。

例えば、どこでも今の川というのは、入漁料っていうのがあるのね。漁協が占有権を持っていて、漁協が入漁料、ほとんどの川がそうなんです。そういうものを、入漁券を持っていない人に対して、入漁券を買わなくちゃだめだっていうことを言うにも、たいへんな難しさがあります。どういう資格があって、お前はそういうことを言うんだと。ということがあられるわけですよ。やっぱり基本的にはみんなで心掛けなくちゃいけないことなんだけど、日本で今一番の問題は、ライセンス制とかね、そういうものがないでしょ。川っていうのは、川に対する知識だとか、釣りに対する知識だとかというものがありませんよ。だからそういうものから始めなくちゃならないというのが、非常に難しいですよ。管理されている釣り場ならば、明らかに、それでも密漁はあるんですけど、されている場所でどうするか、それに対する類班をするのに、どうしたらいいのかと。

アメリカの場合はすごいですからね。

僕の仲間も始終アメリカだとか、海外に行ってますけども、非常にクローズドですよ。だから、一つの釣り場、私有地も多いんですけども、例えば、川は州だけじゃなくて、その地域地域でライセンス、入漁料を払わなくちゃ釣りができない。それに違反したら、一種の逮捕されちゃうのね。そういう風なことになってますし、しかも川は餌釣りを絶対にさせないという所もかなりあります。基本的に言うと、餌ならどんなんでも釣れちゃうと。で、遊びっていうのは、要するに、遊びなんだから、漁じゃないんだから。生エサは使わせないという川はずいぶんとあります。

ルアーの禁止の川もあります。フライだけの川も、毛針だけの川もあります。そういう意味でいうとかなり厳格にね、しかも匹数制限がある。何匹以上は釣っちゃいけない。何センチ以下は釣ってはいけない。そういう厳しいルールっていうのを守らせていますね。

監視制度もあるから、みんな守るっていうか、当然のこととして守る。それじゃないと釣りができなくなっちゃう。

ですから、そういうことから見ると、日本というのは残念ながら、行政というものを、レジャーだとか、そういうものの市民権がないんですよ。行政の窓口というのがないわけですよ。要するに、ついでなんですよ。

だから例えば、川の管理というのが、おそらく二つ、僕も詳しくは知りませんが、建設省の河川局というのがあって、それが川の管理をしているわけですけど、一方では漁業との関係から言うと、農水省なんですね。農水省は基本的には、釣りというのは、遊漁ということで言っているけど、その権利があるかということ、それは微々たるものですよ。要するに、ともかく、漁を優先しているわけです。

Q

生業としての、漁業者に対する保護はあるけれども・・・。

A

関心を持ち出しているけども、かなりその少ないですね。そうすると、結局どうするかということ、今の川の管理だって、漁協が川を管理しているわけですよ。しかも、それは川と言うと基本的にはアユね。アユは徹底してやっているようですね。

どうしてかということ、アユは罟も売れるし、必ず罟がないと友釣はできないし、それを売ることによって、入漁券も売れるわけですよ。

Q

収入として安定している。

A

そうですね。それ以外のところだと、入漁券というのを買うのにも、漁協が管理しているということになっているんだけど、どこで売っているかもわからないというケースもあるんですよ。川に行って川はそれに監視員が日当を含めて取るわけですよ。だから1000円のところは、1500円を払うということになってくるわけですね。

要するに、みんなで川をきれいにしましょうという問題と、そういう意味も含めて川をきちんと管理をするという、管理をするのは誰が、どういう権限で、やるのか。要するに倫理的な問題といっしょに法律的な問題も併せて考えていかなきゃならなくて、日本の場合には、自然はタダだと思っているわけですよ。アメリカはタダだと思っていないわけですよ。だから、そういう問題っていうのは、非常に難しいっていうか、総合的に考えないと、善意のボランティアの人たちのっていうものは、もちろん大切だし、やらなくちゃならないし、釣り人も川で遊ぶためには自分たちの釣りをなんとかしなくちゃならないん



ですが、トータルとして遊ぶことを認めさせると同時に、それなりの存在の認めると同時に、それをどのようなもので法律的にもいろいろな権限的にもやるかというのは、もっともっと整備しないと難しいと思いますよ。

それともう一つの問題は、それと含めてね、最近少しずつ変わってきましたけどね、川についても対するね、その建設省の考え方もすごく問題があるんですよ。

みんなコンクリートで固めちゃうのね。護岸っていうのは。それを側溝みたいにしちゃうのね、川を。自然を残さないというわけですよ。そうすると魚は住めないわけですよ。そういう問題が非常にあって、建設省は氾濫をすればいろんな問題が起きるからヤルっていうことは確かにあるんですけども、自然の中で川をどういう風にしていくかという思想がたいへんに遅れてましてね。あの、要するにもう、僕等からすると一種の恨み骨髄でねつくる、それで工事を、仕事づくりだすためにやっているように思われるのね。どうしてこんな所に多目的というダムをつくらなくちゃいけないのか、さっぱり分からないところにダムができる。お金が落ちる。工事もあるというようなことでなされて、しかもそれが自然を破壊するような川になっている、と。最近はずっと変わってきているという話なんだけれど、ヨーロッパなどはかなり前から変わってましたよね。

なるべく、コンクリートを使わないというようなことで。なるべく自然を残した護岸にするというようなことを盛んにやっていますよね。僕の友達で環境問題を研究している人がいまして、「相川がそう言うんで、ライン川をずっと下ってみた」と。そうしたら、さすがに、あの大きなライン川ですら、コンクリートを使っているところは船着場だけだと。あとは、かなり自然をいかした護岸だったと。

これからですよ。やっと去年あたりからそういうことが出てきたのかなと。

なんでそういう話をするかということ、河川というものを管理するのはどこかと。環境というものや、遊ぶ人たちをきちんとさせると同時に、その人たちの遊ぶ権利も守るのは誰なのか。そういうものをやらないと、統一して考えていかないと。建設省は川をやるわ、それから漁業との関係でいうと農水省はやるは、これじゃあね、よくなると思うね。だからそのへんがあるんで、当面はみんなで気をつけようというようなものでしょう。ところが、これはもの凄い勢いで遊びに行く人は増えていくわけで、レクリエーションブームだから、ドンドン増えていく、ドンドン川は・・・。そういう人たちが教育されて遊びに行くわけじゃないですからね。

僕は煙草を吸うでしょ。吸っちゃいけません、というところが増えて、まあ、煙公害だとかいろんなことを言うわけでしょ。それを「だめです」と言ってやめさせちゃえばいいかということね、確かに捨てられなくていいかもしれないけど、例えばここならいいとか、そういう所には灰皿を置いてあるとかというのがないから、結構汚れてますよね。まだまだ歩き煙草をする人も多いと。そういうのをどうするかと、やっていったらいいのかと。規制を強くすればいいのかという問題も含めてね。

一方ではレベルアップもするし、一方ではきちっとさせるし、するかっていう問題。み

んなに共通しているんじゃないですか。

日本もこのへんがきれいだっていうのは、掃除する人がいるからきれいなんですよ。だから月曜日出てくると、このへんだったたいへんなものですよ。

川もだから、とくかくいろんな意味でね、統一的にやる、その政府、役所の部局、それから釣り人の権利をどう守るか、遊ぶ人たちの権利をどう守るか、そのへんを統一して考えないと、なかなか難しいんじゃないですかね。

せいぜいだけど、僕等は汚くなったら楽しめないですから。たまに行く人たちは、そんなこと考えてませんよ。

Q

キャスティングのやり方とか、スクールがあると聞いてるんですけど、そういう釣りそのものの基本だけではなくって、欧米にあるようなね、自然との付き合い方のマナーみたいなものっていうのは、それも併せてレクチャーするっていうような動きはないですか。

A

そうですね。

まあ、一般的にはないけど。みんな先輩に教わってやっているんですけどね。だけど、最近のブームに対するアレっていうのは、どうなんだろう。我々のグループの支部で、やっているようだけでも、連れてっていろんな所で、これは釣りの雑誌社もやっているし、釣りの店もやっているけどね。そういう問題も含めてというのは少ないかもしれないけど。だけど、我々はみんな教わるんですよ。山の人もみんな先輩に教わったんですよ。

釣りの方でもそうですね。それでもね、釣り糸の問題はかなりありますよね。釣り糸を捨てたのに鳥が絡まっているとか、木の枝に糸が、あれはよく絡まるものなんですけど、絡まったところに餌がついていて、それを鳥がついちゃって、引っ掛かっているとか。ないわけじゃない。

最近溶ける糸も出てきたようなんですけども、水に溶ける糸がね。やっぱりそういうものを持ち帰るとかっていうのは教えないと。要するにそういうのはマンツーマンじゃないとだめだと思いますけどもね。教えるような釣りの教室がマナーを含めて、そういうのをもっと強調した方がいいというのはあるかもしれませんけどね。

危険なんです。後ろが見えないと後ろに針も飛んでいくわけですよ、だからそういう意味で必ず確認をしろ、後ろも前もよく見てやれと。知らない人たちというのは、飛んでくるの知らないから、近づくんですよ、平気でね。そういうたいへん悩ましいこともあるんですよ。

釣りっていう問題についても、知られているようで、ほとんどみんな知りませんね。そういう意味からすると、日本の遊びのレベルというのは、すごく低いっていうか、これから色々やらなくちゃいけないんじゃないんですか。全然わからないでしょ、みなさんも分

からないと思うんですけど。例えば、川でもこの下に住んでいる川から、アユが登ってくる川、さらにはヤマメのいる川、イワナのいる川、全部違う。それと同時に釣る道具も全部違うんですよ。だから、それでその釣りの話をすると、一か所でのんびりとやっていると思われているわけね。

僕等は、それこそ何時間も歩くわけですから、逆上るわけですから。

Q

溪流釣りってというのは、単独行なんですか。

A

そういう人もいます。どうしても危険が伴うので、谷から落ちるといってもありえますので、だいたい何人かで行きます。

それで川に入るのに、まあ、よく知っているところは、一人で入りますけど、あとはペア。万一足を折るってということもあり得るし。

ちょっと奥に入るときは、笛持って入りますけどね。呼び子。

Q

川について変わってきたとか、自然全体がいろんな変化があると思うんですけど、そういう全般的なことについては、どうお考えですか。

A

それは川が、すごく荒れてきまして、これから何年釣りができるかということについては、心配ですよ。で、その大きな原因はね、釣り人のせいじゃありません。

やっぱり、この一つは林野庁のせいですね。もう一つは、建設省のせいですね。それからもう一つは生活排水で生活の問題はあるし、あの遊ぶ人たちの問題。

魚自体はね、放流が多くなりましたからね。僕は昭和40年代くらいから始めているんですけど、溪流釣りは。その時代に比べると、魚自体は放流が多くなって、「減った」とはかならずしも言えない。天然魚は非常に減ってます。

川にはあちこちにダムができちゃって、かなり荒れてます。

それからもう一つは、山の奥を木を伐られるために、川が保水力がなくなってます。で、そのためにドッと流れてしまって、水量が安定しないというケースがありますね。東北のある川に入ったら、いろんな動物に出会うわけですよ。熊にも会ったこともあるんですよ。確かに上ではあるけれども、こんな所に熊がいたり、鹿がいたり、うさぎがいたり、ずいぶんと自然があるんだなと思ったら、土地の人間に大笑いされました。「あんたはそれだからだめなんだって」。自然っていうものが良く分かってないって。あれは上で追われて動物たちが下に来ているんだと、本来は人間たちに近づきたくないんだって。

それを上で木を伐られちゃうんで、少しずつ少しずつ下がってきているために我々に出会うようになってきているんだというようなことを言いますね。

最近では東北でも海の漁師が木を植えようというような動きがでているでしょ。ああいうものっていうのは、本気で取り組まないとこれから20年後、50年後にはすごくたいへんになるんじゃないかな。僕は本当に林野庁が独立採算制をやっちゃって、伐採をやって、これもコストがあわないって言うんで、荒れたまんまにさせると。放置するっていうことが起ると、山がだめになって、川がだめになる。

それから、自然をあまりに知らなさすぎるんで、白神なんかで、ブナの原生林を残すんで人を入れないなんて言ってるでしょ。あれもバカなことであって、ほっとけば、山をほっといて、人がいかなければいいかっていうと、それもダメなんですよ。やっぱり、ある一定量では、キノコを採ったりしないと、木はちゃんとならないとか、というのもあるわけね。

僕が一番感じるのは、川が悪くなった。だから、自然の魚が少なくなった。それだけじゃなくて、動物もかなり追われているという気はしますね。そういう意味でいうと、日本の開発優先のこの状況というものに対して、なんらかのことを考えていかないと、不味いんで。例えば長良川の河口堰なんて、うんと問題だと思いますね。

どうみたってね、あそこの河口堰をつくらなくちゃならない必然性なんて、ないと僕等は思います。いろんなことを言っているけれども、もう一つは何でも堰堤つくるっていうとね、砂でなくなっちゃうでしょ。海がだめになるんですよ。自然の生態系をなるべく壊さないようにみんなで心掛けていかないと、ということを感じますね。

そのへんでゴミの問題も併せて、遊ぶ人たちも自分たちが遊べなくなるような遊び方をしているはずだと。だけど、心掛ける問題っていうのが一方であって、もう一つ管理する、きちんとするっていうことを併せてやっていかないと、なかなかうまくいかないんじゃないですかね。

Q

こういう調査をしても、個人のモラルというところで、話が終始しがちなんです。あの、相川さんがいくつかが指摘されたように、倫理と法律の問題とか、それから川だけでなく、全体を絡めた全部で動いていかないと、小さなモラルやマナーだけじゃ解決しないなあというのは、ゴミを拾っていても感じます。

A

そうだと思いますよ。僕等も悲しくなりますよね。とにかく、そのまた年代のいい悪いを別にして、昔はね、ちょっとやそつとは捨てたって、溶けちゃったし、そんな汚れなかったんですよ。今は人数が多いから。

Q

ゴミも変わってきちゃっているしね。

A

あれはね、日本は絶対に遅れているせいだと思いますよ。ヨーロッパでは缶は使わせないですよ。アルミ缶は特に使わせないですよ、瓶ですよ、ドイツなんかは。なぜかという、一つは溶けないでしょ。もう一つは再生するのに、アルミはエネルギーを必要としすぎる。要するにペイしない。そういうものはいくら便利であっても使わせない。そういう風になってますよね。そういったヨーロッパがあって。あれは宮崎タイイチロウ、あのオーストリーかなんかで、音楽やっていて、釣り人もやっているんだけど。あの、ライン川の上流で大水が出たときにね、化学工場がね、そのどさくさに紛れてね、廃液をねライン川に捨てたんです。そのためね、何年もかかって回復してきた川が死んじゃったと。そういうレポートを4、5年前に送ってきてましたよ。

遊ぶ人たちのルールの問題と同時に、企業の問題というのね、依然としてあるんですよ。みなさんにも見たりしてもらいたんだけど。それが要するに金を結びついてね、鴨川のある支流あたりでは、有害なものを捨てているはずなんですよ。それが川に流れ込んでいるはずなんですよ。それはかなり力のある業者があって、それでみんな口チャックしちゃっているとかね。そういう問題もあるんですよ。

中禅寺湖なんかでもそうですけど、別荘地帯からの生活排水は、そのユカワに入って戦場ヶ原からずっとみんなああいう所に流れこんじゃって、臭いがするようになっちゃったんですね。

例えば、軽井沢のね、中軽井沢、沓掛っていいですけど、あそこにユカワの支流でいい川がありましたけど、あそこ釣るとね、なんとなくプーンと臭うんですよ。いろいろと出さないようにしているんでしょうけど、相当数が増えてきましたから、だからそういうものが流れ込んでいるんですよ。本当にそういう川が増えているんじゃないですかね。

芦ノ湖なんかでも生活排水なんか、いろいろ工夫して努力しているようですけどね。ドンドン人が増えてくると、やっぱり環境、だから大きな意味でいうと環境問題っていうのを本格的にみんなで考えるっていうのと、それをトータルの問題として、そういう問題とレクリエーションの問題とどこでどういう風にしていったらいいのかという問題が、問題で。

とにかく・・・こんなこと言っちゃ不味いんだけど、お役所っていうのは縦割りでしょ。すごく、例えば一つの権力を持ちちゃって、権限を持ちちゃった、例えば建設省があると。それに対して、他の環境庁があろうと、農水省があろうとダメですからね。

あのへんをなんとかしないと不味いんじゃないかと思うけどね。

Q

どこに行っても縦割りの話は聞きますけど、解決法はないんですかね・・・。

A

結局はだからね、それは僕は要するに、遊ぶ人たち、普通の生活者ですよ。それが、生活の一つであって、遊ぶということは、昔のことで言うと、遊ぶということについては認められなかったですよ。だから法律にそういうアレがないんだと思うんですよ。

市民権を要するにどうやって持つかということ、どのように発言していくかということをやっていないと。つまり全て戦後の貧しい時代からのアレで言うと、遊ぶっていうのは怪しからんことで、働くっていうのがベースなんだという思想が今でも強くずーとあるから、だから遊ぶということに対する市民権をどうやって確立してくかということ、そういうものがないと、法律だとか、官庁の仕組みというは変わらないんじゃないでしょうか。遊ぶんですからね、ヤですよ。めんどくさいですよ、そんなこと言って、一々交渉したり、あれしたりっていうのは。でも、そういうことをしないと、私どもは社団法人の全釣協に入っているわけでしょ。入って会費を収めてやっているというのは、なんでだと思います？

Q

釣りをする人たちの親睦。

A

それは、自分たちの団体だけで。全国組織ですから、やっていけばいいですよ。それだったら、会費なんて収めてみんな入りたくないんだから。

だけど僕等は、全国組織でやっていて、それなりにやっているけれども、そのその全釣協っていう団体にも加盟しているんですよ。全釣協が社団法人だったからですよ。

社団法人の意見しか、国は、意見としてね。そこからしか言えないから。釣り人のアレだとか、こういうことだからこうしてくれとかね。行政との接点は社団法人しかないのよ。社団法人の場合しか、予算の措置っていうのも。任意の団体には出さないもの。

だからみんなパイプをなくしたくない。釣り人の意見をなんとか言えるようにしておきたいということで、それ入っているんですよ。

その全釣協だって年寄りが多いですからね。やっている人たちは、役員もそうだし、事務局もそうだから。

我々みたいな働いている者は、ウィークデーの会議なんて出られないじゃないですか。それからね、有名になりたい人なんていうのもいるだろうから。そういうのもあるし。役人との関係もあるからね。僕等は全釣協の団体に釣り人として、場所を確保するために入っているんです。だからそれがいいかどうかというのは問題であって、釣り人の意見をど

うやって、そんな所に入らなくても、ちゃんと取り上げられるような、そういう仕組みをなんとかつくらなくちゃダメだろうな、と一方で思っているんですね。

Q

お話たいへん、参考になりました。ありがとうございました。

A

いえいえ、私この問題の専門家じゃないものですから・・・。

◇自治体担当者に対するヒアリング

事前に担当者宛てのアンケートを送付したが、回答率が低く、あまり効果が期待できない状況であったため、改めて直接ヒアリングを行い、各行政区内での清掃活動実施状況を中心に話を聞いた。

ヒアリングに応じていただいたのは、

東京都河川部建設局

青梅市みどりと水のふれあい事業推進協会

狛江市清掃局

稲城市市民部生活環境課



## 多摩川流域における河川敷清掃活動についてのアンケート

そちらの行政区で行われている河川清掃活動についてお聞かせ下さい。

\*該当するものがある場合はその数字に○印を、( )内についてはご記入下さい。

Q1 清掃の活動体についての質問（活動体が複数の場合は主なものについてお答え下さい）

- 1) 活動体の数は概ねいくつですか？ ( )
- 2) 活動を開始したのはいつですか？ ( )年
- 3) 清掃の実施回数は、年( )回
- 4) 実施日は( )
- 5) 参加人数は約( )人

Q2 参加団体の内容は？

- ①自治会 ②スポーツ団体 ③漁協 ④青年会議所 ⑤ロータークラブ・ライオンズクラブ ⑥地域の企業  
⑦ボイスカウト・ガールスカウト ⑧商工会 ⑨地域の自然保護団体 ⑩その他( )

Q3 実施形態は？

- ①行政が主催 ②市民団体が主催 ③行政と市民団体の共催 ④その他( )

Q4 支援の方法は？

- ①特にない ②補助金 ③ゴミ袋 ④軍手 ⑤記念品 ⑥人員を出す ⑦その他( )

Q5 宣伝や参加者の募集方法は？

- ①特にない ②広報紙 ③ポスター ④回覧 ⑤ちらし ⑥横断幕 ⑦煙火 ⑧広報車  
⑨その他( )

Q6 ゴミの回収は？

- ①職員 ②業者委託 ③その他( )

Q7 事故への対応策はどうしていますか？

- ①特にない ②救急箱の用意 ③当番医の確認 ④医療従事者が待機 ⑤保険に加入  
⑥その他( )

Q8 これまでの河川清掃でどんな効果がありましたか？

Q9 他の自治体に紹介したいユニークな取り組み方法や、市民との連携などがありましたら  
教えてください。

Q10 現在把握されている活動体の他に、清掃活動を行っているグループ・個人があるとしたら

- ①申出があればなんらかの支援ができる ②特に考えていない ③積極的に支援したい  
④その他( )

Q11 今後広く参加を促すためには、イベントなどを組み込むのも一つの方法ですが、実施するとしたらどんな事をしてみたいですか？

- ①自然観察会 ②フリーマーケット ③スポーツ ④音楽会 ⑤魚の放流 ⑥植樹・花を植える ⑦工作・スケッチ大会 ⑧環境パネル展 ⑨その他（ ）

Q12 清掃活動は平日以外に行われることが多いのですが、庁内で参加を呼び掛けることについては、

- ①現状では難しいが、将来的には行いたい ②既に行っている ③とても無理である ④その他（ ）

Q13 これまでの河川清掃活動で問題点や困ったことがありましたらお聞かせ下さい。

Q14 他の自治体から得たい情報はどんなことですか？

- ①ゴミの回収・処理・管理について ②事故への対応 ③宣伝・参加募集方法 ④イベントがあればその情報 ⑤持ち込みゴミへの対策 ⑥その他（ ）

Q15 近年『川』のとらえ方が地域という点から上流～下流という線、さらに広がりを持った流域という面へと変わりつつあります。今後、河川散乱ゴミについても流域のゴミと位置づけて、流域自治体の相互協力・情報交換などの場が求められてくる事でしょう。これについて率直なご意見をお聞かせ下さい。

区市町村名

担当部課名

担当者名

直通電話番号

－お忙しい中、ご協力を感謝します－

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1995. 11. 15

東京都 河川部建設局

A

私ども東京都といたしましては、河川を管理していくには、河川ってというのが、1級河川、2級河川、色々法律上の河川がございまして。国からの、機関委任事務ということで知事が受けているわけです。受けているものに関しましては、箇所がありましてね、平たくいいますと、多摩川では万年橋から上流は東京都が管理する、と。

その多摩川水系ですと、多摩川に落ち込んでおります下水系の河川は東京都が管理いたします。それからまた、独立水系の2級河川も東京都が管理しますよと。あと一部の準用河川。準用河川は市区町村が河川法の基づいてやる。

そういうなかで、河川のですね、機能を良好な状態に管理していくということがですねまあ、基本の姿勢としてあるわけですよ。その中には、草刈りだとか、河川清掃と。工夫をしましてね、良好な状態に管理していくというのが、私たちの事務になっているわけです。

都の姿勢としましては、基本的にゴミのひどい所は、当然ゴミを拾わなきゃいけない。草の生えた所は草を刈らなきゃいけない。管理の中での対応ということでやっておりますから。

程度の問題になってこようかと思えます。まあ、東京都全般、都外の神奈川県さんのあり方、埼玉県さんのあり方がどうであるか、細かく見ますと、どこか違うのかもしれませんが、私ども東京都が長い間管理している河川に関しましては、まあゴミの清掃、草刈り等に関しては、一貫した管理姿勢というのは変わっていません。

Q

個人とかあるいは町内会とかで清掃活動などがかなり行われていると思うんですが、そういった活動以外に、都として目に余るような状況をお掃除するというのは、業者に委託されてなさるんですか。

A

今のご質問の趣旨ですと、ボランティアの方たちが、というお話ですか。八王子の方はですね、一部そういうふうな浅川をきれいにする会などがあつたなかで、都としましては、集められたゴミを清掃工場に運搬するとか、一部ゴミ袋だか軍手を支給するというような対応はしております。あとは、他には予算上はくんでいませんね。

Q

市町村さんの何箇所かお話を伺ってまいりましたが、何々市クリーン作戦といったような形で、今まで活動していた団体と、自治会、町内会とに声かけをして一斉清掃するというようなことがあって。物品の支援のようなこともなさっているようなんですよ。

それ以外に、住民による一斉清掃活動っていうのは、年に1ぺんか2へんのことで、草刈りとか、場合によっては不法投棄とか、住民の奉仕だけでは手においかねることもあるように見受けられまして。それは当然その清掃側に苦情がいたりとか、片づけてくださいっていう要請が多いように思うんです。

都としては、もし要請があった場合には随時対応なさっているんですか。

A

すべて、対応するかしないかは、その時の状況で判断することなんですが。一つホームレスというお話があったもんですからね。

河川を管理していくなかで、隅田川が一つの例になりまして、非常にホームレスが多いんですよ。ホームレスがそこに居るとなりますと、非常にせっかくつくったテラスがね、みなさんが利用するのに利用しにくいという状況がでできます。当然そのものに対する住民のみなさんからの声もあがってきますし、行政からの執務室もなんとかしなきゃというなかです。まだ十分な対応まではしていないんですけど、基本的に事務所、ご存じだと思んですけど、私どもの建設局の事務所っていうのは、23区に7事務所、多摩に5事務所あります。

そこが各河川の管理をしておるんですけど、その管轄の中の事務所で隅田川なんかは、地元の警察、区と3者が一つになりまして、やはり警告をだし、撤去をするというようなことを繰り返す。やはり1度やったから効果があるというものではなくて、何度も何度もやるっていう、繰り返すしかない。

こうすれば絶対に来ないっていうのが、今はまだ見えていないというのがあります。それと同じように、まあ具体的には挙げられないんですけど、というよりは入っていないということです。何かの都合によってゴミが捨てられているといった場合にはですね、事務所がその状況を把握するか、または住民のみなさんからそういう状況があるからなんとかせよといった場合には、当然調査した段階です。一般の箇所よりも酷いという風なもの、常識的に考えて、これはしなくちゃならないものについてはしております。

そういう風なものも隅田川関係は多いんですよ。テラスができて、ホームレスウンヌンだけじゃなくて、護岸の背面にですね、ゴミが置かれていく、山のようにになってしまうというのがあると思うんですよ。そういうものは、特別に気がついた時点で処理をするという風になっています。多摩川につきましては、特にここという風なゴミが散乱しているから、とってほしいというようなものは、私どもの方まではあがってきていないみたいですね。事務所で処置しておりますのでね。私どもの方にあがれば、当然事務所のほうにね、

調査していただいて、通常の状態に、著しい状態のものに関しては、即その処置ができるような体制を組んでおりますので、そういうもので処置する。

維持管理していくのに、一つ一つ設計書を組まなくてはということではなくて、臨機応変にできるような、電話一本で業者が飛んでいく、そして後で精算するというような手法があるんですよ。それを使いまして、都民のみなさんに迷惑のかからないような、処置ではですね、各事務所がそういう契約もしておりますし、そういう対応もしておるとい、私たちも確信しております。

Q

ボランティアの話に戻るんですが、環境保全局さんの方では都内で活動している市民活動についての名簿を発行されたりして、どういう人たちがどういうことをやっているかというのを把握されているようですが…。河川関係では特にそういうことはなさっていないですか。

A

河川担当としての動きのなかで、そういうものを把握していこうという動きはまだちょっとないですね。環境保全局さんが、隣にありますから、いくらでも情報は入りますし、そのへんの情報交換はしておりますので、うちの局としてどうのこうのということはないです。

Q

河川の草刈りを含む、清掃関係の費用の方なんですが、税金で処理費が賄われますよね。道路の方の清掃の部分と河川とが合算ででているというお話を清掃局で聞いたんです。それは伝票かなにかを繰っていけば、多摩川だけというのは無理かと思いますが、維持管理されている川のゴミ関係がどれくらい費用がかかっているかというのを調べることはできますか。

A

言われていることが…。ゴミの収集でなくて、処理のことですか。

Q

収集に関わる費用のことです。回収費用のことです。

A

そうしますと、基本的に清掃局。川に関しても、低地の方は隅田川とかは、清掃局が清掃船を持っているんですよ。船が入るところは、清掃船で清掃しますよと。船

が入らないところは、基本的に河川管理者が、事実上、実態は河川管理者がゴミの処理をしている。23区につきましては、大半の河川については、区長に委任条項っていうのがありまして、各区に管理を委任しているんです。そういうなかで、処置してますので、実際のところは私どもでは把握していないと。

多摩については、建設事務所が管理していますから、その中でもどの程度草刈りだとか護岸の清掃というようなものが、どういう割合で年間どれくらいの費用がかかったかっていうのは…。

一括してね、管理にかかる費用は、日々管理のなかの費用という決算になっちゃってますからね、どの地域でどのくらいの清掃に関する費用がでてこないと、事務所がですね、市区町村単位じゃないんですよ。多摩のですね、多摩部に関しては5事務所。それがまた川も各市区町村別にあるんじゃないかと、つながっているものですからね、その事務所単位で、管理している河川の精算をしますから、それも草刈りだとかそういうふうなもの、転落防止策の補修だとか、護岸の破損箇所の修理だとか、入ってくると。そういうもので精算してますから、今私の方ではそのものを出すのができないんです。

Q

お聞きしたのは、私も自分でゴミ拾いしますが、きれいにするとそこで先が見えにくくなってしまって、実際は色々ね、人の手を経て、お金も掛かってますよね。研究費をいただいて調べてますので、そういう全部で見たときに、市町村でどれくらいかかっているとか、東京都でどれくらいかかっているとか、建設省でどれくらいかかっているとか、拾い集めて数字に合算していくことができると、その中で河川というのはこれだけお金がかかっているんですよっていうような結果になるかな、と思ったものですから、どこかをあたって調べることができるかなと思ってお聞きしたんです。

A

自治体、特に河川の清掃に関しましてはね、あの川の中の草というもの、水生に入るような草もいっしょに取るわけですね。その時にいっしょにとってしまうっていう、草刈りだか、ゴミ処理だか、そういうものがいっしょになっているものが非常に多くて、川のある日は清掃の日ですよということで、業者がゴミだけを集めるというような仕事はしてないんですよ。

そうしますと、清掃だか草刈りだかが、ごっちゃになってましてね、清掃費としての指示は業者に出してなくて、基本的には草刈りの中での清掃が含まれてしまっているんだろうと。特別、山にポコッと置かれたと。その時で、これを処置しなさいといえば、トラック何杯分、手間がいくらっていうようになるんでしょうけど。その中での清掃ですね、それを一つ一つ拾っていくっていうことはしてないので、その中で清掃費だけを分析するっていうのは可能かなって。

Q

わかりました。ありがとうございました。

あとは、全体の仕組みのなかで、この部局に直接ゴミに関して、都民からの声がかかるという感じではないことはよくわかりました。

過去から現在まで、河川の利用形態っていうのは世につれ変わってきていると思うんですが、ゴミという視点から、何か近年変わってきたとお感じになるようなことはありますか。

A

逆に僕なんかは思うんですけど、非常にね、ある地域では、一つ大雨が降るとゴミを川に捨ててしまうというようなものもあったように聞いています。そういうようなことで、低地の方の河川ですと、ゴミをとる、または下流に水門だとか、排斥所があればその地域差によってね、除塵機（じょじんき）っていうのが、あるんですよ。地域差によって、通常の除塵機ではダメだとか、ようするに、ロータリ式で効率のよい除塵機をみつけなくちゃいけないとか、地域差があったりしたのは事実ですね。

確かに、私が役所に入ったのは40年代なんですけど、その頃はかなりゴミというものはいくらでもあるといったような時でしたし、また今ほど、ゴミゴミというようなものはなかったと思いますね。

やはり時代が変わって今になりますと、みんなで作ろう街づくりというなかで、ゴミの問題も非常にクローズアップされている。同時に都民のみなさんのモラルも向上してきているなかで、時代の流れの中ではゴミの問題については、だれもが意識が強くなり、昔ほどのゴミというのはなくなっているように思います。非常にすばらしいことではないかと思いますけど。

Q

どうもありがとうございました。

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1995年10月5日

稲城市役所市民部 生活環境課

Q 稲城市さんの場合には市が窓口になって、自治会とか町内会とかをまとめて、多摩川清掃に長年取り組まれているというのは、十分承知しているんですけども、そのあたりについて、少し細かく教えていただけますか。

A まず、稲城市の清掃の歴史というのは、非常に長いんですね。今年で16回を迎えまして。年1回です。これは、あくまで啓発・啓蒙ですからね。多摩川清掃を…。前置きが長くなりますけれども、最初は、市民活動として誕生してきました。稲城市の前に三沢川っていう川があるんです。青少年対策？で、長沼の東長沼の青少年対策地区委員会のメンバーの方々が、このミサワ川をきれいにしましょうよ。という運動が20年近く前にはじまったんですね。そのときに一番最初にやったのは、アヒルを放したんですよ。その時に、コイを放流しました。多分今ミサワ川のコイは1000匹以上あります。やっていくうちに、多摩川もきれいにしようよというわけで、当時多摩川河川敷を運動公園化する形がだんだんできてきてまして、多摩川が汚れただと。そんな中で多摩川もということで、最初はそこを使われている体育協会を中心にやろうという意識が芽生えてきました。もちろん市もいっしょにね、やっていく形というのが…。市も主体的に動いてはいるんですけども、多摩川を美しくする会という半官団体みたいなものを作りましてね、ここの会長さんが、歴代体育協会の会長さんがやると。そういう組織を作ったわけです。そういう長い歴史の中で、毎年40～50団体くらいの団体が参加します。特に体育関係が多いことは多いです。体育協会の、要するにあそこで色々運動しているんだら多摩川きれいにしようという、体育協会の傘下団体、特に強調して動員をかけているという実態があります。そういう中で、平成7年度は55団体、団体の数はスポーツ団体が16、あそこを使っていない団体、例えばバレーボールの団体とかね、剣道の団体とか、普段あそこを使っていないところも。

それから、地域の自治会あたりが6団体くらい入ってますよね。それから、ボーイスカウト、ガールスカウト、3団体あるの全部来ます。

金融機関はね、二箇所来ています。企業も来ております。それから、青年会議所、PTA、婦人会、それからボランティア団体、シルバー人材センターも来てますね。NTTとか東京電力も来ております。ライオンズクラブ、ロータリークラブ。

Q 漁協はいかがですか。



A 漁協はね、最初入ってたんですよ。漁協そのものが、稲城市からつぶれちゃったの。そこでやめちゃいました。

Q その主たるのは、やはりスポーツ団体ですか。

A そうですね。でもスポーツといってもいろんな所ですからね、55のうち。自治会さんも多いし。PTAなんていうもの。

Q 市とそういう団体の共催のような形で…

A 団体は多摩川を美しくする会が実行主体で、市はもちろん、市の担当課がね、そっとお膳立てしているんですよ。文書出したり、お願いをしたりね。実行委員会を運営していく司会進行とかそういうのは、多摩川を美しくする会の会長さん、うまく取り仕切っていただいていますから、いろんな団体が参加すると。

Q 実行委員会というのは、どれくらいの頻度でやられるんですか。

A 1回ないし、2回。もう慣れてますからね。

Q 実施日は毎年いつですか。

A 基本的に4月の第3日曜って決まっています。ただ、選挙がある年は…。選挙というのは、4年に1回、市町村長と議会とありますから、稲城市の場合は市長と市議会の選挙は同じですから、その時は、4月の下旬が選挙になるんですね。で、その時は、選挙運動が始まっている1週間前にやることはできませんから、4年に1回は5月になったりします。

Q ゴミ袋等々、軍手のようなものですか、実際に掃除に使う物品は市の方で提供なさるんですか。

A 建設省さんの管轄でありながら、最初はあまり協力しなかったのね。私共の方も建設省のずいぶん働きかけというか、本来建設省がしなくてはならない仕事をボランティアでやっているわけですから、働きかけというか。清掃課でなくて河川を担当する課にお願いしましてね。言い方は悪いけど、もう少し協力するように言ってくれよ、と。一昨年くらいからは、ゴミの袋とか、軍手とかは、建設省さんが提供してくれるようになりました。これはまあ、みなさんのお力もあると思います。それは決して否定しません。

Q 記念品などはお出しになるんですか。

A 記念品は、建設省さんも若干はくれます。私共もこれが一番困るんですよ。市では金がありませんから、東京電力さんや多摩中央警察までいきます。だいたい1000人分から1500人分くらいですかね。確保するの。一時確保できなくなった時代があるんですよ。くれなくなっちゃって。

Q 警察はどういうものをくれるんですか。

A 警察はノート何冊くれたかな。これが警察のノートです。

毎年警察にはお願いに行くんですよ。だいたい200冊くらいくれるのかな。

特に多摩川清掃の時には、警察にお願いすることが2つあります。一つは、多摩川に住んでいる浮浪者について、ホームレスについて、巡回お願いしますということ。それと子供たちが大勢参加しますので、何か記念品をとということでお願いしてます。景気のよい時は、けっこう景品くれてたんですよ。平成3、4、くらいが一番厳しかったですね。ほとんどくれなくなって、私共も苦勞した時代はありました。最近はみなさんの力のおかげで、建設省さんも事前に状況把握をして協力してくれるようになりましたから、そのへんでは楽になりましたね。

Q 広報、参加者を募る方法っていうのは、市の広報紙に載せられるとか、ポスターをつくるとか、回覧板を回すとか色々あると思いますが、どういったものを

A まず、ひとつは広報ですね。それから、もう一つが…。色々あるんですよ。目黒の方だと、目黒区のリトルリーグがこの会場使っているところがあるんですよ。そこも使っている以上はお願いします。それから、どういうわけか分からないけど宗教団体が、2つあるんですよ。みんな日連系ですけどね、そこの方々もくるんですよ。稲城にいなくても。各種団体に、会社宛だとか、商工会宛だとか、市の方から実行委員長の名前でご協力をお願いを致します。学校にも出します。だいたい60通～100通くらい。

もう一つは、例えば体育協会とか商工会とかは、そこのルートで下部へおとしてます。2重、3重にね。体協の役員会のときにね、各連盟の団体がきますから、何月何日にありますから、来るようになってね。で、体協の会長さんが実行委員長ですからね、参加者のとき名簿書かされますから。あんまり来ないとおしかりをうける。

もう一つ、稲城市内約半分くらい、1万くらいにケーブルテレビが入っているんです。多摩テレビという。その中でも広報します。

自治会さんは独自で広報紙を使って呼びかけていただいているところもあります。基本的には稲城市の場合、多摩川に面している地域っていうか、自治会はね、お願いしており

ます。山の向こう遠い所から来るのに相当時間掛かりますからね。

Q 集めたゴミの回収は市でなさるんですか。

A 市のお金で業者に委託をしてやります。稲城市のゴミの収集は全て委託業務です。直営職員持ってませんから。

Q たくさんの方がおみえになるので、万一の場合、例えば怪我をなされるとかということも考えうると思うんですけど、保険とか、お医者さんを待機させるとか何かなさるんですか。

A 救急箱の用意はしております。保険をね、いつもなやんでいるんです。ボランティア保険をかけるべきか、かけないべきか、色々議論はあるんですよ。今の所かけてません。イベント保険ですなえ。かけようか、かけるまいか。一人30円位ですかね。

Q そうですね、30円から50円くらいですね。

人数を把握するのが難しいですからね。

A 私たちの場合は、1000人から1500。去年の場合は1200人。平成7年度では、1220名、去年が1176だからそんなに変わらないですね。1200名前後。ピークが1500名きましたけどね。

Q 今まで長年取り組まれてきて、その効果っていうのはどういったものがありますか。

A ゴミが減ってきてるっていう実感はあります。多摩川清掃に参加する方はゴミを捨てないんです。一番困るのは、ごみを捨てていく人っていうのは、川にきて魚釣りをやったり、バーベキューをやったりする方々、タトッシュの大学生、ようするに、市内に住んでいないで、ユニホックみたいのあるじゃん、かごになってて、いま大学生のブームなんですね。グラウンドがあいてれば、勝手にあちこちでやっていますから。マナー悪いです。大学生の女子も男子も入っていますけど。

不法投棄のものもあるんですよ。タイヤだとか自転車、バイク、ベット。バイク関係は多いですね。

Q バイクは盗難車が多いでしょうねえ。

A 多いでしょうね。魚釣りの方がね、いろんなものを持ち込んでいるんですね。腰掛け

みたいのとかね、ビールのとかね。ビールのケースを持っていったり、大きな板を持っていったりとか。ほんとに魚釣りの人は困りますよね。

おきっぱなしでいっちゃうんですよね。

これをやることによって、なるべくゴミを捨てないでって。意識づけをやってますよね。だから、1回で効果があるとは思っていません。それは今言ったように、そういうことに参加していただきますと、ゴミを捨てちゃいけないんだっていう気持ちに。

Q 稲城ならではの、自負されているようなことは。

A みなさんとの協力もお願いして、子供たちの水質調査なんかもやってます。実をいうと前からやっています。お金がかかりますから、そちらさんからくれるものはもらおうと。

稲城の特徴は、非常に多様な団体がやっているっていうことですね。ラジコンクラブも来てましたね。

Q ラジコンってさかんなんですか。

A まあ、多摩川でやっているみたいですから。いろんな人が。

いろいろな組織の人が来ているっていうのが、特徴でしょうね。

Q 多摩川清掃に参加されている団体の他に、個人的になさっていらっしゃる方とか相当いると思うんですけど。そういう方々の状況がある程度把握されていますか。

A 個人的にくるかたの記帳はしていただいているんですよ。団体のだけで。個人的にも大勢こられますね。

わかま？さんっていう方が、神奈川で缶トリークラブをつくってたんですよ。その方はね、ずーと集めてたんですけど。

グラウンドがたくさんありますのでね、これをシルバー人材センターに頼んで、日常的というかね、1週間に1回か2回かならず清掃していただいています。それによって、ゴミが出ずらくするようにしています。とりあえずはそれくらいですね。金がないだけで…。

対岸の清掃を見ているとうらやましいくらい。対岸はすごく金持っているから。企業があるから。府中市です。あそこは青年会議所が主催でやっているでしょ。

青年会議所が主催するから景品でも、個人商店も多いからいっぱいあるんですよ。

こちらは、個人商店からは全然もらっていません。今言ったように警察だとか電力会社だとか、多摩川の建設省さんとか…。

Q 楽しみながら参加していただく、イベント的なやり方をするっていうのも、一つの方

法かとも思うんですけども、そういうものも先立つものがあっていうところでしょうか。

A あの、多摩川清掃の後川下りをするとかね、いろんなイベントを考えることもあるんですけど、お金の問題とか県政の問題とかまだそれほど定着していないというのもあるんですけどという部分と、一回TAMAらいふで莫大なお金をかけて綱引き大会をやったのかな。府中と稲城と。全部イベント屋に金とられたでしょ。あの時やってくれていったから、動員かけたんですよ。そうしたら、参加者に対して何もなかったですよ、景品もなにもなかったですよ。

あの費用2000万かかるって言ってましたからね。ひっぱるだけで。

旗竿？をつくってね、橋かけて。そんでこんな、木のタワーみたいのをつくったり。アルバイトに40～50人動員したでしょ。なにもしないアルバイトを。人手はこっちで集めろっていうから、集めたんだけど。でも参加者に対して何もでなかったですよ。我々にも何もでなかったですよ。

イベントをやるときには東京都はすぐに委託しちゃうのね。だからTAMAらいふでイベント屋さんが相当設けたんですよ。

多摩川では早く掃除を終えて、会場を使いたいという方ばかりですから。他のイベントというのはなかなか。

Q 多摩川清掃の時には、市の職員の方は担当課の方が中心ですか。

A いや、担当課とね、公園緑地課と、体育課と、管理課。生活環境課が窓口ですけど。生活環境課は全員です。で、あとの管理課であるとか、公園緑地課、体育課はまあ、1、2名。

Q 職員の方が自主的にボランティアで出てきたりっていうのは。

A 市内に住んでいる職員はできるだけ出なさい、と。いう形でやっています。

Q 今までの活動で問題点というか、お金のことっていうのがあるとは思いますが、他には何かありますか。

A 建設省には悪いけど、建設省さんが我々市町村やボランティアに頼りすぎている。管理責任を放棄している。やるとなると莫大な金がかかるんですよ、わかるんです。マナーの問題ですから、みんながマナー守れば建設省さんも金がいらぬ。きれいになる。ところが本当にマナーが悪いから、といって市町村の任せていいものじゃないしね。こちらへんは、まあ。最近は変わってきましたけど、草刈りをするようになって来たし。

Q 費用だけでももうちょっと負担してくれるとね。

A 袋だとか手袋くれるだけでも随分助かりますよ。いままでは、家が全部揃えてたんですから。

Q ばかにならないですよ。

あと、横の連携ってということでね、流域の自治体さんもほとんどこういったことに取り組まれていますけど、同じ自治体同士で情報交換として知りたいことってありますか。

A TAMAらいふで多摩川のイベント。それから来てると思うんですけど、あのとき色々やったけど、自治体の参加ってというのは結局難しかったですよ。

Q ええ、従来の歴史の方が重くて。

A だから、私ども、正直言って、早くやめたいという気持ちはあったんですよ。今年やめようと思ったんですよ。でもやめられなかったんです。

Q どうしてやめられなかったんですか。

A やっぱり、トップがね。こういう定着している市民の環境に関する活動は、やはり市が係わってやっていかなきゃいけないんだって。市が手をひいたら必ず止まります。こういう運動は。

そういううちの市長の姿勢です。担当課は本当にいやだ。雨が降るのか、降らないのかね。そういう心配もしながら。

Q 雨が降ったら順延になさるんですか。

A 基本的には中止です。イベントが盛り沢山なんですよ。春のシーズンってね。

Q 市の事業所とかご家庭から出るゴミについては、ものすごくご苦労が多いと思うんですよ。河川清掃のゴミが減ってきているっていうお話だったと思うんですけど、実際減らすっていうことって一生懸命やらなくちゃいけない、それに加えて建設省が管理する河川敷の清掃も引き受けるっていうのは、すごくつらいものがあるんじゃないかと思うんですけど。

A そうなんですよ。ゴミの割当がありますからね。これなんでもかんでも。平成5年

度は約6トン。平成6年が約4トン。今回は少し多くて2.5トンですね。ゴミの量は減ってきているんですね。実はこのゴミは半分くらいは、埋め立て処分にいくんですよ。多摩川清掃やらなければ、この3年間やらなければ、10トンくらいへるのって思いますよね。大雨で流してくれますから、下流へ、悪いけど海へ。

そういう矛盾もあります。私共はこれだけじゃなくて、夏に市内の美化運動もやるんですよ。それもまたゴミもでるんですよ。そういうゴミもありますから。

Q 河川清掃とか市内清掃とかでたゴミを、家庭のゴミと同じように分別されるんですか。

A 拾うときはね。燃えるゴミ、燃えないゴミ、大きなゴミと分けて拾っていただいています。多摩川清掃でも同じです。袋3枚もたせます。燃えるゴミ、ビン・缶専用と、金属物と。プラスチックとか、燃えないゴミ。燃えないゴミに関しては2種類だけど、ビン・缶についてはこの別の袋に入れてください、と。ただ、多摩川に落ちているビン・缶は資源化できません。さびたり、タバコの吸殻や土が入ったり。使いものにならない。瓶も含めて。

Q じゃあ、一応分けていただいてもリサイクルの方にはのせずに。

A ええ、できないです。埋めちゃいます。これは意識づけです。意識づけ。稲城市はビン・缶・ペット分別収集してますから、資源回収。正直いって資源化はできないけど、これは資源化できるごみだからって言って。拾ってもらってます。たしか平成4年のときかな。みなさんの方で、ビン・缶をどれくらい拾いましたかっていう調査があったと思うんですけど。あの時は、使える缶だけをよったんですよ。

Q 時間的にはどれくらいの時間やられるんですか。

A 9時集合で9時半ですね。セレモニーとしては、市長のあいさつと実行委員会のあいさつとか。うちは3会場つくるんですよ。あの、稲城市の多摩川原橋っていう所の周辺とキタ緑地公園と、是政の3か所を設けます。実行委員長さんなり、副実行委員長さんに挨拶をしてもらったら、はじまるようになってますから。だいたい9時半からやって11時には終わりますよね。来年からは、人手が多いので、8時半か9時にははじめようかって言っています。

Q 来る方は毎年同じ方が参加することが多いですか、新しい方はどうですか。

A 団体は増えているんですけどとは思わないですが、毎年来るっていう人もいますね。ようするに、連続で来る方もいらっしゃる。でもね、ほんのね、何十人かそこらですよ、義務感で来てますから。会から言われますから。

Q 子供さんの団体がかなり参加されているのが、その点ではいいですよ。

A ええ、子供は300人くらいですね。1200人のうちのね。ボーイスカウト・ガールスカウトなんかは、年間の事業の中に入ってますからね。

Q 本日はありがとうございました。

A 頭さげながら、景品をもらいにいくのもたいへんなんですよ。景品がなくても、参加できるようになればいいんですけど。気は心でね、なにかもらえればね。

こちらの方も掃除自体が目的ではなくて、意識づけなんで、地域ごとにやるよりは、いっしょにやって川全体を考えてもらおうっていう。

親しみやすい多摩川にしたいっていうのはすごくあります。野球やサッカーするだけじゃなくてね。稲城市では、アカシア林を保存したりとか、ニセアカシア？の大群があるのを多摩川の流域でも少ないんですけど。

また環境をよくすればするほど、危険が増えちゃうんですよ。スーパー堤防構想っていうのがあるのを知っていますよね。あれはいいのかどうか分からないけど。

で、川見てもわかりますよに。北側がきれいに整備されているんですよ。お金があるからかどうかかわからないけど。本当にもう稲城市の方は石ころだらけ。調布とか府中はきれいでしょ。きれいって言ったらへんだけど、運動公園みたいにピシーと整備されていますもの。石ころなんてないでしょ、あれがうらやましい。稲城の方は川べりに入っていこうとしても砂利の道でね。

Q 本来の川の姿って…。

A 昔はもっと、入りやすかったですよ。

Q ズーと、稲城にいらっしゃるんですか。

A 私は、若い時こちらに来ただけど。その頃はまだ泳げてましたね。稲田堤とかこのへんは海水浴によかったんですよ。夏になるといろんな所から泳ぎに来てたの。38、9年の頃までですね。その頃までは川はきれいでした。

また泳げる川になりたいですね。稲城市もそれを目指しています。ようするに水に親し



む。それには、ゴミを捨てるのをやめてもらって。もう一つは下水処理施設の水をもう1回、いま2次処理っていう。3次処理まであるでしょ。コウトウ？度処理っていうのが3次処理なんです。本当にもう濾過するとすぐ井戸水？になる位きれいになるんですね。いまはほとんど上流、八王子の方、秋川があって、八王子があって、日野があって、国立があってね、オオマル？のところがあって、府中の調布の北多摩地区の処理場があって、世田谷の処理場があってというふうに、ずーと下水処理場があるんですよ。

で、私たちの活動の中で、多摩川の水質検査はもう20何年間やっているんですよ。一斉に。多摩川流域の市町村が年2回、そういう中で、東京都にかけあって、一年中水を流してもらいたいという要望をだした。

そして、東京都は、平成5年に、通常は9月から翌年の5月までは、水を放流してなかったんですよ。あったけど、下水処理水と家庭雑排水だった。多摩川が非常に汚れたんですよ。羽村の取水堰で毎秒1トン、水を9月から流すっていうことを東京都が決断してくれたんですよ。建設省ではないですよ、東京都ですよ。ただじゃないですよ、買うんです。東京都水道局から。羽村の堰から、水道水をとっているわけ。平成5年のときは、11月から放流してもらおうんですけど。約4億かかります、半年間でね。

多摩川の水だいぶきれいになりました。

Q 水質はずいぶんよくなりましたね。

A よくなったでしょ、よくなったよね。それはそういう歴史がある。みなさんがやる前に我々公害担当者が一生懸命やってきたんですよ。

だから下水処理施設の水が、一日20万立米くらいあるのかな。下水処理水が多摩川に流れなくなると、多摩川は…。

Q 上流で雨の分量が2分の1になっちゃったですからね。

A 多摩川の場合は、下水処理施設できれいにしてもらえばいいわけですから、下水処理水はほとんど地下水なんです。あれをくみ上げてきれいにしていますから。

Q 流域人口の多い川だとたいへんですよね。田舎だったらね、ゴミをぼんぼん投げても、人が少なかったら汚れないけど。

A2 私はいま、多摩川の上流に住んでいるんですけどね。あそこに来る観光客っていうのはやたらパンを投げってくるんですよ。それが自分たちの胃の中に入るんだっていう認識が薄いんだと思いますよ。

Q 雨の水はどこから来るとか、飲んでる水はどこから来てるかっていうことを気にしてない人がすごく多いですね。

A2 うちの方も多摩川の上流ですから、河川清掃とかやるんですよね。

A 秋川溪谷とか五日市とか上流の方にキャンプ場とかありますが、あれも善し悪しですね。汚くしますよ。

Q 最近ではマナーを知らない人が増えてますから。

A2 上流に住んでいて、我々が汚せば下に行ってどんどん汚れていくんだということで、石鹸だとか洗剤だとかみんな気を使っているんですよね。ところが、こちらへんの人たちは全然気を使わないでしょ。だったら我々はなんで気を使ってあげなきゃいけないのかなってね。ちょっとこう…。

下水道100%完備なものね。そのくらいきれいに保とうとしている訳ですよ。上流の方はね。下流の人がだめなんです。

A2 人骨まいっちゃった人もいますしね。家はそこの人骨をまかれたところなんですよ。

うちなんか桜の花のシーズンになりますよね。多摩川のでるゴミ一日4トラック2台分くらいかかるんですよ。石組んだのとかね、ほったらかしとかね。ゴミの山なんです。マナーがほんとに悪い。立ち入り禁止にしたいくらい。

Q 食べ残しだけでなくね、コンロとか、1回使ってそのまま置いてありますよね。

A だからね、アウトドアもいいけど、もう少しマナーをどうにかしていただいて。

## 川ゴミ研究会ヒヤリング

1995年11月1日

粕江市 清掃局

Q 河川の清掃については従来通り。

A 通年ですと、4月第3週っていうことでやっているんですが、クリーンエイドの方でね、統一清掃ということで、今年は選挙もあったので、6月4日にやりました。

Q この活動に参加されている方々はどんな？ 何団体くらいありますか。

A 63団体ですね。

Q それは増えていますか、だいたい平行ですか。

A 前後ですね。

Q 活動を開始されたのは何年からですか。

A 何年だっけ。今回18回のはずなんだ。18回だから、18年前からやっているはず。

Q 今年度の参加人数はどれくらいですか。

A 今ちょっと持ってきますので。

Q 先に違うことをお伺いしてもいいですか。読み上げますので、参加団体に入っている団体を教えてください。

A 自治会はあります。ロータリー入ってます。ライオンズは協力してもらったことはあります。あと、ボーイスカウト・ガールスカウト。商工会はあります。

地域の自然保護団体は登録はないんですよ。おそらくは来ていると思いますが。

A2 土手の会がある。横山先生の。

Q 実施団体としては、狛江市さんが？

A 狛江市と美化運動推進実行委員会。

Q 市としては、記念品をお出しになるとか、物品を用意しているかと思いましたが…。  
どういった小物を。

A ゴミ袋、軍手ですね。あとは、記念品は文具類ですね。建設省からいただいた、ティッシュとかゴミ袋なんか、生ゴミの三角コーナーに使う、ああいうものをいただいていますので、そのようなものを配っています。あと、ノートとか、ペン類。

Q 宣伝広報の手段としては、新聞、広報などあると思いますが。独自のポスターをお作りになっているとか。

A ポスターはつくっていません。広報とですね、各団体にね、実施要領、レジュメですね。送付しています。

Q 当日会場では横断幕とか幟旗とかは。

A 幟旗はやっております。

Q ゴミの回収は市でなさっていますか。

A 市で委託した業者ということですね。

Q 万一事故とか怪我とかという心配もあるかと思いますが、保険をおかけになるとか。

A 保険をかけてます。万一、些細な怪我の場合は当番医っていうのが、いますから。そちらの方に連れていく。大きな場合は慈恵第三病院っていうのが救急病院になってますから、そちらの方に。

Q 今までは、そういうことはありましたか。

A 2年前にね、お子さんが怪我をしまして、行った経緯があるんですけど。足を切って。

Q 今まで18年やってこられて、いろんな効果があったと思いますが、一番「やってよ

かった」と思うこと、効果として実感されたことはありましたか。

A 私3年、4年くらいやってて、みんな同じ位。古い人が少ないからね。効果っていうと疑問だよ。

Q ゴミは減ってます？

A 減りませんね。基本形に怪我させたくないから、ケンバンから法面までだから。ズーとそれより大きいゴミとか、粗大ゴミとかあるわけ。事前にしゃくわなくちゃいけないもんね。事前にやっているわけです、私たちが。

そういう風にしておかないと、危険は伴う。それに奥に入っていっちゃうから。

減っているという気はしない。一つの「やっている」という喚起にはなるかもしれない。でてきた人たちからも「やってやっているんだ」という気持ちも見えなくはないし、減ることもないし。ただ、やらなければドンドン増えるということは目に見えている。

だけど、効果があるのかなというのはね、モラルの問題に関わってきているから、そういう人たちがたくさんいれば。だから捨てる人たち、あれの10倍くらいいると思うんです。参加人数2000人いるうちのね。逆転すれば、きれいになりますよ。でも、ゴミは減りません。

もちろん、来てる人には効果あるでしょうね。

Q おそらく、ここらへんは地域住民以外の方が相当利用されますでしょ。

A マップに載っちゃっているのが、一番の原因だね。バーベキューができるって。

近隣で車の乗り入れができるのは、狛江だけなんです。

土日見ていただければわかると思うんですが、すごいですね。陸が見えないくらい人がいっぱいいますよね。

Q 平日行くと、みんな残していったゴミが…。

A 月曜日から火曜日には必ず片づけているんですけど、取りに行く前にカラスにやられちゃいますから。

分けるようにはしてあるけど、分けてくれないでしょ。

Q そこに粗大ゴミ持ってきて捨てている人とかいないですか。

A いっぱいいますよ。便乗でね。

Q 他の自治体さんでもこういった河川清掃やってますけど、狛江市独自でこういうことをやっていて、是非これはいいよっていうようなお取組は？ 連携してるとか。

A 連携はどこの自治体でも不特定多数の人を集めるのは、動員力では難しいと思います。そのへんはどこでもやっているとありますが。特に狛江ならではの特色のあるものは、とりたててはないですね。

Q 年に1回の河川清掃の他に、グループとか個人で近所に住んでてしょっちゅう掃除しているような方もいるかと思いますが…。

A これは各団体いっぱいいますよ。

Q これは特定のところを把握は？

A よくやってくれる所は堀越学園ですか？ ここは年3、4回やってますね。それから、ボーイスカウトですね。老人会ですか。この3団体が定期的にやっているみたいですね。

Q その時はゴミの回収などを手助けなさっているかと思うんですか、他に何か助けているとか。

A ゴミ袋等、物品調達が難しければ、市の方で提供します。

それくらいですね。あとは、ゴミをそこらに置かれちゃうと困りますので、集積場所を指定して、そちらの方に出してもらおうようにしています。

Q 不特定多数の参加を促していくために、ただ清掃だけじゃなくて、フリーマーケットのようなものとかね、イベント的な要素を組み合わせるといった例もあるんですが、狛江の場合は。

A イベントやるとゴミがでる。これは昔から私の持論ですからね。冗談じゃねえって。ゴミをやっている人はイベント嫌いなんですよね。多分。

イベントやるとでちゃうんですよね。だれかが始末してて。やっている人はいいんですよ。どっかに寄せておけば持ってってくれるっていう。

人に断りもなく掃除やっというて、分別もしねえで、ゴミでましたって。ふざけるなって。おめえたちのところはやらねえって。自分たちで勝手にやったんなら、始末まで引き受けろって。

だから、そういう感覚がまだある。コンタクトをとらなければ、最後の行き先まで。ゴ

ミが埋め立てまでいく状況が見えていなければ、だめなんだ。だから分別もできなくなっちゃう。

イベントやって、みんなで日が一日遊んでね、そこで店広げてやって。それじゃあ、縁日のおんちゃんといっしょなのよ。それじゃダメだって言ってるのだけど。そういう形態が心にある人は、やるでしょ。イベントでやった方がいいっていうでしょ。

私たち実際にゴミをやっている人間はそうは感じられない。清掃は清掃だっていう風に割り切りたいていうのがあるよね。

第一清掃やっている最中だって、バーベキューやって、タッタカタッタカ、ゴミ捨てにくる馬鹿たれだっているわけだから。しょうがないよね。

Q 私も拾っていて、「これもついでに」なんて言われますよ。

A その時に拾っていてもね、狛江は厳しいんだよね。ビンと缶分別しなさいよ。不燃と可燃も分けてくださいよ。っていうわけですよ。

なぜかっていうとね、不燃で全部巻き込んだらね、ゴミ減らないんですよ。燃やせるものは燃やすんじゃないとね。ビン缶だったら、リサイクルするんだという論で拾ってないとね。ただ拾ってきれいになって、ああよかったっていうのは多摩川清掃の18回の流れのうちの14回までは、その流れなんですよ。だって、ゴミは処理すればよかったんだから。

そういう状況じゃないんだよね。減量と両方考えたら、手元手元。

Q 切り換える時のご苦労ってすごかったんじゃないですか。

A 結果的に私たち持ってきて、ビンと缶を分けだすようですよ。

本来そこまでやって、その行き先も見えてくれる人たちはいいんですよ。行き先見えない人はそれで終わっちゃうでしょ。

Q どこも同じですね。ここがきれいになったっていうんで「いいことしたー」って。

A 簡単に言えば、自分のうち掃除して、ゴミがでたって。袋で前に出した。一日取りにいかなくて、取り残しになっちゃった。キャア、キャアって電話かけてくるもの。それと同じ。それが目の前からなくなるとストレス解消じゃん。

今でもそういう状況だよね。全体は。一部分の人はそうじゃないけど。

Q でも、多少分別しながら拾うんだということで定着しましたか。

A してきたね。ビンと缶は別で、燃えるゴミ燃えないゴミはいっしょくた。4つ袋は持てない。

袋変えてますのでね。ビン缶とね、可燃不燃はね。

A2 でも、まだどっちにしても…。だから二人で歩きなさいって。袋持って、二人で歩いてやりなさいとは言うけれども、一人で4つ持って歩けないでしょ。いいとこ2つでしょ。不燃と可燃でやって、集積所に来たときに分けている人もいるけど、実際問題はごちゃまぜだよな。途中で置いてくるやつは特にね。

全部最後の集積所まで持ってきてくれればいいけど、途中途中に置かせるとそこがゴチャゴチャだよな。あれと同じなんだよな。普段の「出し」が。

Q 庁内では、その多摩川清掃の時は、担当の職員の方が中心に。

A そうです。清掃課だけです。

Q あと、例えばボランティアでね、他の課でも出られる人は？

A2 いますよね。市内の職員は。地域の住民としてね。

A 職員もそれぞれ、各団体に入っていますのでね。それで来ますけど。

A2 多摩川清掃にっていうと、仕事だと思っているから。

Q いままでの中でご苦労が多々あるとは思いますが、問題点とか、困ったことっていうのは、一番なんでしょう。

A2 あまりにもね、住宅が川に迫っているよね。調布と府中と事情が違う所は、川のテンプンの上に道路があるっていう決定的な所とプラス入れちゃうっていうのがあって。

Q それは近隣の方なんでしょうか。

A2 いやあ、近隣だけとは限らないでしょう。通りすがりもいるでしょうし、色々いるでしょう。でも、あまりにも住宅が近い。バーベキューをやる人間も近いから、物を買って、その商店街売れるからもしれない。肉屋さんとかね。持ってって、最後捨ててきちゃって、ここを止めると、商店街にゴミの山が構築される。早くいえば、いたちごっこだよな。



Q 雑誌で、バーベキューのいいポイントって。

A でてましたよね。

A2 あれが、そもそも。

Q 車のない人は小田急線の終電で行こう！コンビニで買い物して、始発で帰ろうって。

A 最近コンビニでもバーベキューセット売っちゃってますから。薪と炭といっしょになってね。

A2 それでゴミはどうするんだい。

機関銃とパーズーカ砲だって言うてんの。そしたら、全部きれいにしたるって。その位悲惨な状況だよ。

Q ひどい人は鉄板も置いてかえりませぬものね。

A2 私らあそこでゴミ分別してるわけよ。昼間やっててね、収集車両に分別していれば、ゴミめいっぱいなのよ。わかってるわけですよ。分けてやっている最中に、車で来て、缶缶飲んだやつ入ったまま、そこに置いていく奴がいるんですよ。けどこれもしょうがないんだろうなと思うけど。本来はあってはいけない所、多摩川暗渠でいいんじゃないかなって思うくらい。

車で乗り入れられるっていうのが、一番の。府中なんか、調布なんかでも、バーベキューやっているわけですよ。大量に運びこめないわけですよ。担いでいく分しか。だから見ると、調布はあんまりバーベキューみれないけど、府中の方は桜サンリバーの方やっているよ。車を止める所が少ないわけですよ。だからいいとこ健康センターとかね、府中の。あそこまで車を入れて、えっちらおっちら担いでいなくちゃいけないんだよね。

そうすると大量に運びこめない。みんな不便だと、苦労したくない人はやらない。だいたいああいうのは苦労したくない人がやるんだから。

苦労したい人はゴミも持って帰れるんですよ。きつとね。そこらの違いがあるのかもしれないって。

Q 車で来ているんだったら、ゴミを積んで帰ればいいのに。

A2 そんなことありません。自分の車に草履履いて乗っている人だっているんだから。自分のはきれいで、人は関係ないでしょ。もう自由だ。

自由すぎちゃうんですよね。自由の中には規制があるんだっていうね。

規制の方は勝手だろで済んじゃう。規制があったら。自分がやったら、やり返されるっていうことがないから、だめだ。モラルに頼っているだけじゃ。

Q さっき冒頭でおっしゃられてましたけど、車のね。乗り入れをやめようということになったら、また別の問題っていうみたいに。一か所蓋すると、また次へ次へっていう。

A2 私たちは蓋したい。蓋したいけど、今度道路を管理する方はどうなのかなって。道路管理。それから役所の総体の単位としてね、多摩川の河川敷借りているわけですよ。占有許可で借りている。タマリ屋さんの部分に関しては、タマリ屋さんが営業権持っていて、京浜多摩事務所から借りている。占有を受けているようなもんだ。実際問題で、グランド借りていたりとか、〇〇借りている、市としての管理のものがある。

清掃係があそこを止める。止めた時に今度道路が管理している所があそこに〇〇する。その対応をどうするか。全体的な対応をね、明確してやらないと、ただゴミのために止めちゃうっていうわけにもいかないだろうというのが現状です。

ただはっきりしているのは、建設省が多摩川の河川敷をどう使うかという基本的な論を建ててしまえばいい。それ以外はやりません、といえればいい。看板1個建てるだけで、これやっちゃいけねえ、あれやっちゃいけねえと文句いうわけよ。

看板建てるのに。じゃあ使う人間に言えればいいじゃない。管理すればいいじゃない。そうすると相手いわく、市は市で借りている占有している。占有しているんだから、自分の所くらいやりなさいって。河川敷はこんなにあって、借りているのはこれだけでも言われちゃうよね。ギブアンドテイクの部分があるから、仕方ないのかなというのがあるけど。実際管理しているところが、なんでもできるわけ。それを全部統制してしまえばいいっていうのね。それが一つの手だと思うけど、ただ今の時代、強行手段が使えないんだらうなって。

そういう一つの使い方。占有はさせない。元々昔貸していた、お金とって貸していた時代もあって、ポート屋さんとか、あるところがいくつもあって。そういう所の営業権どうするのかなというのもできちゃって。

そうすると、ゴミは市町村が処理する。そういう法律の違う所からきちゃう。だから、道路一本とったって、管理の部分と掃除の部分が違っちゃう。

もちろん、ゴミも道路へ上がれば、私たちの範疇じゃないよね。処理はしますけど。範疇は道路管理の範疇だよ。

Q もう一つ日常の河川利用者の人が置いていくゴミもそうですし、清掃活動をするとう然たくさんゴミがでますよね。一方では自治体でゴミ減量っていうことを努力されていて、こっちで掃除するとドカンと来るわけじゃないですか。このへんも、本当だったら触

らないでそっとしておきたい、じゃないけど。

費用的にもね、バーベキューの後のために、毎週車出されているって、バカにならないと思うんですけど、こういうことに対しては市としての方針といいますか…。

A2 今の所はないけれども、考え方っていうのはたくさんあると思うのね。

タマリ屋さんに袋だして、袋売の。お金とるということ。逆にお金とると、使う人間は優位の状態になる。有料だからね。

なぜ、河川なのにゴミ有料なのかって。建設省では戦争になる。だから金とるってことも一つだけ、いろいろそれをやるためには、クリアしていかなきゃならないことがたくさんある。

もう一つは完全に入れない。作業の方もそうだよ、あとは、逆に多摩川に出たゴミというのは、私たちは占有はしているかもしれないけど、建設省が処理をするという考え方。処理をするにあたって、事業者という形で処理すれば、産業廃棄物と同じ扱い。事業ゴミといっしょ。でも各市町村からでているものだから、それは事業ゴミじゃなくて、一般ゴミだと。これを処理をだれがするかと。

今までね、川崎か東京都のものか、どこかの清掃工場にいったと思うんですよ。来年からは入れさせてくれない。ゴミだけじゃなくて、草刈りの草も。

狛江の部分は自分のとこで面倒みなくちゃ仕方ないだろうって。だけど、結果的にはそうなる。続かないからね。また入れるにあたって条件はつけます。で、結果的に広域処分場が入れられなくなったら、はい残念でしたと終わり。市民のゴミもいっしょで、入れられないから終わり。あそこは許容量で入れられなくなれば、取ることができなくなるから、取ることができなければゴミは溢れます。

ですから、ゴミいっぱいにして銭湯だね。それしかありえない状況にはなるとは思いますけどね。ゴミがきつくなったらから、建設省がやってきているから、だけど有料ですよ。有料でとりますけど、処理は廃掃法の中で一般廃棄物は市町村が収集・運搬・処理まではしなくちゃいけないってうたわれているから。これは仕方がない。

入れさせはします。ただ最終の埋め立て分がなければ、とりようがない。ここに戻ってくるしかない。建設省もそうなっちゃっているし、なりつつあるし。たしかにそうだよ。ただ、ゴミまでの処理持っていないもんな。

燃えるものはまだしも、燃えないものはたいへんだね。結果的には潰してゆくしかないものね。だから金属分別して中間処理場ではやってますけど、それでも中々捨てられちゃったしょうがない。捨て勝ちなんですよ。捨て勝ちだから一番いけないんでしょうね。やり方としては。

捨て勝ちじゃない情景をつくりえないと、ゴミはなくなるらない、減らないですよ。減量と多摩川清掃は全く別の考え方でやらないとだめ。

うちだから、いま私減量ですから、「俺やだよお、入れさせたくないよ」って。「だっ

て処分するところない」って。

これが、対市民なんです。掃除したのなんで持っていかないんだって。多摩川の西川原ってっている、集合場所があって、あそこの脇に〇〇屋さんっていうのがあるんですよ。この脇に山のようにゴミが集まっています。そのたこ焼き屋が近だけで、ステーションみたいになって、不特定多数の人間が捨てていっちゃうの。花見の時はそう、もうむちゃくちゃ状態。モニュメントの所に日にちを決めておけて。だけどつりやっている人たちが、やってくれている経緯があるの。つりの人間は置場がないからそこに置く。だからゴミの山がこっちに。ただ、つりの人は土手の下でゴミを確保する。確保しておいて、収集日にあわせて、日曜日の夜、夕方に全部モニュメント前にあげる。できる限り分別するっていう条件もつけてるけど。なかなかうまくいかないけど、少しずつなっている。

少なくともゴミのちらかりがよくなったってこと。量は同じよ。減るというよりも増えているかもしれない。ただ収集する人間が助かっているということはある。

ボランティアっていうか、自分たちも汚しているうちの一人なんだけど、その人たちはやってくれているという経緯はある。

そういう方向もね、自主運営ですから。その変わり、籠も貸すし、袋もあげる。結果的にゴミの減量と清掃とは完全にマッチポンプの状態ですよ。

だから、両方の政策としてどうするか。減量だけを施策にするにするか、ゴミを清掃しないで、出しっぱなし、やらない。そうすると、一番大きい法律の清潔で安全な生活の一番上の部分に抵触しちゃうわけですよ。だから拾う、掃除するということ。

どうしたら減るが教えてほしいよ。そろそろ首が飛びそうだ。

だから、あそこのさ、アンケート調査やったら、どこから来ている人間がどれくらい、市内はどれくらい、どんな考え方持っているかというのをできたら、早くちょうだい。

少しは足しになるかもしれない。

Q 見てるとね、纏めて持って帰る人は少ないですね。

A2 持って帰るふりして、途中の和泉多摩川の商店街の商店の中のどこかにポイって入れちゃったり。それもある。

Q 反対の方もそうだって言ってましたよ。

A2 川崎の方だろ。川崎側はさ、ゲージないじゃない。あのゲージできてからどう思う。

Q 理想論を言えばね、ああいうものがなくて、持ち込んだ人が持って帰るべきだって、考え方として私は持ってますけど。現実は違うことが多いわけですよ。難しいですよ。

A2 建設省もきれいごとの話なんだよね。

Q 海でもゴミ拾いするんですけど、それをどうしたらいいかっていう話になると、ゴミ箱おけばいいってすぐなるんですよ。

ゴミ箱を置いて、その維持管理に相当人手とお金がかけると、かえってたいへんになっちゃうっていうのがあるのに。

A2 調布もあるよな。自転車があるような、道になっている。走っていて、籠が置いてあるじゃない。うちは昔籠が置いてあったところから撤去しちゃって。

府中もポイントポイントに、河川敷じゃなくて、土手の上に置いてるじゃない。たいへんですから。

置かないから捨てる、置いたから捨てるっていう。どっちかっていったら、両方同じなんだよね。置かないと集まらない。バラバラになっちゃう。置けばそこに捨てられるって。そこだけよね。

タマリ屋さん喜んでいるのは、あれだけ汚くても、あそこにゲージがあることによって、よってくれているわけ。昔はあれが飛び散ってたから。

A 量的には増えますよね、なかった時よりは。置けるっていう状態があるわけだから。

A2 情けない、世の中だよな。

A だから、ゴミを置いていく人に聞いてもらいたいですよね。どうして置いていくんだって。

持って帰る人にアンケートなんて要らないんですよ。立派な人ですから。

Q やっぱり聞きにいくと、建前と本音と使いわけて答えますからね。本当は毎回捨てていってても、たまに捨てていっているくらいに脚色して言うじゃないですか。

A2 そりゃあ、人間良く思われたいっていうのがあるから。現実ね、ゴミは理想論とね、自分でやっていることとね。それとやらなくちゃならないことと、それくらい別れますよ。

Q ヒヤリングっていうのは別に、聞かないでコンタクトをとらないで、一日ウォッチングをやると面白いかなって。

A2 だけどケンカになるよ。それだけでやると。

だから、ボート屋さんとか、そういう所にね、借りて、ゴミの分別徹底させるとか。そ

ういうのやっている人たちって可哀相だよ。タマリ屋のおじさんだって、とてもじゃないけど、夜は手を出せないって。

相手酒飲んじゃって気違いでさ。

Q 何回もボート無断ではずして、あわや事故…。

A それだけじゃなくて、羽目板焼かれちゃったりね。すごいらしいですよ。

Q 時々見回っているって。

A2 それやっても注意しようとするでしょ。注意しようとしても、相手気違い水飲んじゃっているから、気違いですもの。それと戦争しろっていうこと。

戦争には道具が必要だから、道具そろえなきゃ。それくらいないと勝てないでしょ。

モラルだけに頼ってちゃ。話し合いすればなんでもいい方向にいくって、不特定多数じゃないんですよ。

一つ一つの統制っていうのをしないとね。だから、いつもイタチゴッコの繰り返し。一生懸命やってくれてる人はやるし、やらない人はなにもしないし。

Q 普段ポイポイ捨てる人なんて、清掃には来ないし、ゴミ拾っている人はそうそうは捨てないでしょ。

A2 じゃあ、俺たちかっこいいこと言っているけど、タバコの吸殻捨てないかっていったら、捨てるだろって。例えばね。

ゴミ捨て場いらんってかんばっている人もいるけど、じゃあ食べたもの出さないかって言ったら、出すだろって。それだって、一般廃棄物だからね、処理方法が違うだけで。あかんぼのおむつだって埋め立てていくんだから。

そういう考え方がいつでもくっついてくる。イタチゴッコなんだよね。それをどこかで是正しないと、どうしたらいいか私共が聞きたいよ。

Q 予算的にはすごく非現実的な話だけど、ああいうゲージみたいな所にね、人が来る時だけでもね、一日っていうのは無理でも、指導員っていうか、あんまりいかめしい高飛車に言うんじゃないで、「分けといてください」って促すような人を付けてみるとか、そういうことができると少しいかなって。

A2 それはだれがやるべきなのかって。役所っていうのは、縦割り行政と横の並びとあるから、じゃあ、建設省がやるのか市がやるのか。

その注意できる人間に権限があるのか。委譲できるのか。アルバイトでいいのか。正職でいくのか。だれでも、だんごでいて、そこでできるならいいけど。横のつながりと縦の並びが、だれがやるのか。

A いつからでしょうね、こんなに道徳が欠如しはじめちゃったのは、一番秩序がある国民だと思ってたのに、子供の頃はね。いつのまにかへんになっちゃってね。

Q 自然の場所に出掛けていくのは、やはりそこが気持ちいいからじゃないですか。

せっかく憩いに来た場所にゴミを置いて帰るっていうことは、始めからないですよ。また来たいから、当然ゴミがでたら持ってかえるし、汚さないっていうのが、始めから当たり前の価値観としてあるんだけど。違うんでしょうかね。

A 最近なんていうんですかね。若い人はそういう事をやるのが、はずかしいって言うんですかね。そういう言葉で全て片づけちゃうんですよね。

もう一度幼少の頃からね、ドイツなんて。結構モラルの授業なんて長いんですよ、ゴミの問題とか。長期間に渡ってカリキュラムがあるんですよ、小学生だけじゃなくて中学や高校もあるですかね、確か。日本は4年生の社会の時間に数時間やって、もうゴミの問題は終わりですよ。中学生くらいになると、もうカスなんて捨て始めちゃうし。高校生になるともう全然関係なくなっちゃうしね。

Q 知り合いが注意したら、「俺は中身を買ったんだ」って。

A この間多摩川で我々が掃除している最中に、中学生が捨ててったから。怒鳴って「拾え！」って。そこにあるのを全部拾って言って拾わせましたけどね。

なんていう学校だかっていて。先生に言うぞって、言ったら、黙って拾ってましたけどね。だから、注意する人間もいなくなっちゃったですね。

Q 私言ったら「くそばばあ」って言われましたもん。

A2 言ったら負けなんですよ。「くそばばあ」って言ったら、「ズドン」っていいんだ。

(笑) 頭坊主にしちゃうとか、そうでもなきゃあ。

簡単に言うと親もいけないんです。子供怒ると親も「何よ」って。だから昔の怒るおじさんとかおばさんがいないんですよ。言ったら不和が生まれる。

今度は大人は大人で、「いいじゃん、勝手じゃないって」。

昭和20年前に戻ればきれいなるだろうって。

A 犬なんか散歩してて、ビニール袋と小手をみんな持っているでしょ。中身入っているの見たことあります。あれはポーズですよ。ほとんどね。

いいところで、土手に穴掘って埋めていく。犬の糞尿させるために散歩に出るわけですから。袋の中に中身の入っている人は10%もいないでしょうね。

A2 人間の子供を飼っているとは言いませんけど、飼っていると同じでしょ。自分の子供の糞拾って行って、そのままそこに入れていくかっていったら、同じことやっている人間がいるわけですよ。

特に、だから紙おむつ。紙おむつも業者さんね、3大メーカー全部私の所現れましたけど、私が質問投げかけたら、現れてね。だけど結果的に、あなたたちは世の中を考えていないって文句言ったけど。

一般廃棄物ですって、し尿は。紙おむつ単品だったら、これ処理困難物です。可燃でもないし、不燃でもないし、処理できないって。それを売っていてですよ、それにもかかわらず、それを吸わしたものをどう処理しろって貴方たちは思っているんですかって。

Q なんておっしゃってました？

A2 やあ、紙の厚みを減量に協力してうすくなっていますから。

「それじゃあ、し尿っていうのは燃やして処理するものですか」って。

そうしたら、そういうものがあるから、衛生的に扱うためには燃やすって。燃やすという論だけれども、し尿の処理は別ですよ。し尿はし尿の処理をして、し尿でつくって肥料にしたりとかやっているわけですからね。処理方法が違うものをいっしょくたにしたものを、貴方たちは助長しているんだ。「でも、今日本のなかで認められている」って。「それを要求されている」って。

あなたたちもおかあさんになって、そういう風にやられたときにはそう風になる。

犬の糞と同じなの、それが紙おむつに包んで捨てるか、ビニール袋に入れて捨てるか。まだビニール袋に入れて捨てる人はまだいい。自分の家でやればね、流して、ある程度落として、それでもゴミはでる。犬の糞の人だって、持って帰ってきて、そこに入れてしかるべき。だけど、それはしないからよく若いお母さんたちが、ディズニーランドのゴミの中に入れていくのと、役所に来て入れていくのと、全く同じ変わらない。それが同じようにゴミに回るんじゃないですか。

布おむつっていうのは、なかなか受入れにくいものがあるかもしれない。私たちは、市では貸しおむつの事業を組んでますよ。紙おむつもありますが。市の事業としてはまかりならん。

あくまでも布おむつですよ。ただ寄付があるわね。福祉なんかだと、その寄付のやつは、無償で必要な方に出している。それをずーと捨てるのはあくまでもメーカーだと思います



がね。

Q これから、老人系が成長産業ですよ。

A2 簡単なのは何かって言ったら、捨てること。捨てればいい。燃やしてその処理まで、その使うところにやらせたらできないでしょ。だから貴方たちつくりなさいって言ったの。処理場つくるくらいの器量がなきゃ。そういう所にくってかからなきゃ。

市民の人くってかかんないんだもん。行政がくってかかったってしょうがない。

Q 市民の人はね、いっしょに中身も捨ててしまえば、それで忘れちゃう。

A2 目の前からなくなればね、だから処理場つくるのと同じですよ。文句言うのは言うけどさ。

俺たちの親父は戦争負けたけど、俺たちはまだ負けていないって。だから、あの時代に戻しちゃえば、でなくなる。(笑)。

Q 清掃課は何人いらっしゃるんですか。

A2 8人で、課長が一。9人。収集に関してはほとんど委託。直営は粗大ゴミ。の中で減らす方と取る方と、あとは…。

A 1054名です。

Q 不法投棄で、大きいものとか、困ったものとかは特にありますか。

A なんでもあります。電化製品はほとんど。自転車もありますし、バイク。車もあるし。物置一戸おこったのもありましたよ、4畳半くらいの。

A2 小河内開けてくれないかなって思う時あるよね。ドワーって。

A 昔は河川敷で野焼きやったですよ。ゴミもけっこう燃えてくれたんですよ。今は周りがうるさくなったから、やらなくなっちゃったから。あれでも定期的にゴミを燃やしてくれてたんですよ。いまあんなことやっちゃったらたいへんですからね。

Q ホームレスの人は？

A2 いますよ。二人いるよ。

A 3か月に1回、トラックに1杯ゴミ溜めちゃうんですよ。どっかから持ってきちゃね。

A2 拾ってきて、その中からアカセン抜いてやっているんだけど、それ以外にもいっぱい持ってきちゃうの。そこに置いておくから、そこに捨てるやつもでてくるの。ドーっと山になっちゃう。もう2年半いるなあ。

A 解決した市町村なんてないんでしょうね。あったらね…。

Q 結局ね、ここで出たものを片づけたって、こっちに移動しているだけですからね。

A2 そうそうその論がフリーマーケットね。フリーマーケットっていうのがそれ。売っている人、リサイクルに名を借りた金儲けしだって。私たちはそれくらいにしか考えてないですよ。外交辞令では違うこというけど。

営利を目的としてないんだったら、その売上を全部寄付してくれたっていいでしょ。リサイクルに名を借りた、ゴミの移動だよ。

A リサイクルはしないですよ。AのゴミがBを経由して出るだけです。多少の延命にはなるかもしれないけど、ゴミはゴミですよ。リサイクルっていうのはまた元に戻るのがリサイクルですから。缶とか紙とか。

A2 蚤の市だってさ、リサイクルっていう言葉にグラッと弱いから。

A あれはリサイクルじゃなくて、リユースっていうんですか。

A2 いいレポートできたら、ください。

## 川ゴミインタビュー 発言ピックアップ

<ゴミの発生源、ゴミの様子について>

- ◇大水で流れてしまうから、本流の方はモノはあまり落ちていない。
- ◇イベントやるとゴミがでちゃうんですよ。やっている人はいいんですが、どっかに寄せておけば持っていつてくれると思っている。
- ◇一番の問題は缶だと思う。自然のほっといても腐食しそうなものは、非常に増えている。そういうモノは持ち帰る以外になりえないんですよ。それがなかなかないことは気が付きますよね。

<ゴミを捨てる人について>

- ◇直接川の中に捨てる人は少なくなった。しかし、どこからかビニールや袋類が飛んで来るといのは随分ある。
- ◇ゴミが減ってきているという実感はある。多摩川清掃に参加する方はゴミを捨てない。一番困るのは、ゴミを捨てていく人っていうのは、川に来て魚釣りをしたり、バーベキューをしたりする方々。魚釣りの人たちが、いろんなものを持ち込んでくる。腰掛けや、ビールケース、大きなまな板など。
- ◇生活のゴミを捨てる人もいなくなった。

<河原のゴミ問題の原因について>

- ◇釣りや遊びで海に来る人から、お金をとらない、お金を払わないという安易さが、よい汚れを誘発しているとも考えられる。漁民も、釣り人も、遊びに来る人も非常に意識が弱い。  
川の場合は、釣り人はお金を払ってこの川で遊んでいるんだということは、だんだん分かっている。
- ◇車で乗り入れられるのが、一番の問題。車が入らなければ、大量に運びこめない。みんな苦労したくないから、不便だとやらない。苦労したい人はゴミも持って帰れる。
- ◇バーベキューができるということ、マップに載ってしまっていることが原因。
- ◇日本で一番の問題は、ライセンス制などが無いこと。川に対する知識とか、釣りに対する知識とかがない。そこから始めなくてはならないというのが非常に難しい。

<ゴミ拾いの方法と効果・変化について>

- ◇ほとんど毎月清掃をしてきた。最初は上水の中の方、いまはその周囲。
- ◇ゴミ拾いははじめて3年目になり、ゴミの量が3分の1くらいになった。
- ◇昔は上水の中に入ってゴミを出したが、今は清流が復活したので、その必要がなくなった。ゴミ自体も少なくなった。続けることによって、東京都も上水を残そうという気持ち

ちになり、自身で清掃や草刈りをするようになってきた。

- ◇少なくともゴミのちらかり方がよくなったってこと。量は同じ。減るというよりも増えているかもしれない。ただ収集する人間が助かっているということはある。
- ◇近くの堀越学園、ボーイスカウト、老人会などが定期的に行っている。
- ◇シルバー人材センターに頼んで、日常的とかね、1週間に1回か2回かならず清掃していただいている。これでゴミがでにくくなった。
- ◇3、4年やってきているが、効果という疑問。
- ◇一つの喚起になるかもしれないが、減っているという気はしない。ただ、やらなければどんどん増えるということは目に見えている。

#### <解決への道?について>

- ◇自分たちのようは会ができれば、自然に川もきれいになっていくと思う。
- ◇捨て勝ちじゃない状況をつくらないと、ゴミはなくなる。減量と多摩川清掃は全く別の考え方でやらないとだめ。
- ◇自由すぎると思う。モラルに頼っているだけではだめ。
- ◇きちんとゴミの最終の行き先まで、ゴミが埋め立てまでいく状況が見えていなければ、だめなんだ。
- ◇ゴミの問題は環境といっしょに考えていかないと、いけないということ。見えるゴミというのはほとんど資源です。

#### <河原での対策について>

- ◇河原にゴミ籠を置くと、家庭のゴミを持ち込む人がいるって建設省に怒られるから、もう置いていない。
- ◇ゴミ籠を撤去した当初は、大分抵抗があったようだ。

#### <河川の利用状況・利用者のマナーについて>

- ◇アウトドアをする人で、ゴミを持って帰る人もいるし、燃やす人もいる。燃やし切れないうちに、水をかけて帰ってしまう人もいる。
  - ◇アウトドアをする人が、川の中に入って石を持ち上げて、川の流れを変えてしまったりすることもある。
  - ◇よくテグスが落ちていて、鳩の足にひっかかるとかいう話がよくあるが、あれは本当は釣り師ではなく、はじめて来た人や子供などが、放置するのではないか。
  - ◇釣り人が糸を捨てるから鳥がこうなっちゃうって、たたかれる。釣り人が捨てないとはいわないが、本当に騒ぐようなものではないと思う。
- 同じ環境保全というスローガンをかかげていながら、一方的に悪者にするというのはどうかと思う。

<人々への啓蒙、呼び掛けについて>

- ◇子供がいれば、釣り方を教えたり、「ゴミは絶対ちらかすなよ」っていうことを指導している。
- ◇組織の中で、「諸君ゴミを捨てないでくれたまえ」なんていうことは、大人に向かっては言わない。パンフをつくった片隅に「ゴミは持ち帰りましょう」というのをいれるようにはしている。
- ◇公認インストラクター制度ができれば、休みの日に掃除するとか、ゴミを拾うとかだけでなく、釣り方も教えなくてはならないだろう。ゴミについて、拾っている姿を子供がみて「このおじさん、僕の捨てたゴミを拾っていった」というような教え方をしなくてはならない。
- ◇今年のテーマは、拾う心より捨てない心。だから、清掃すればだれだって捨てなくなる。捨てなきゃ拾わなくていいわけだから。そういうことを認識するといいなと思っている。
- ◇意識づけとしてやっている。
- ◇ゴミ拾いの目的はあくまで、啓発・啓蒙のため。
- ◇釣り糸で最近ほろけるのも出てきたようですが、やはりそういうことではなく、持ち帰るということを教えないと。
- ◇キャンペーンですから、来ている人にアピールしませんと。我々だけでやっているんじゃない。
- ◇自分の趣味で、自然や野外施設のお世話になる。ならば、自分たちが率先して、ゴミの持ち帰りとか、ゴミを出さないこととか、我々が啓蒙するような動きをどこかでしたらいいのではないかなと思った。

<人々の意識とその変化について>

- ◇以前は捨ててあるゴミが多かった。いまは、ずいぶんマナーがよくなっている。
- ◇ゴミに関するマナーがよくなった気がする。
- ◇なにかの団体に所属している人の方が、意識は高い。
- ◇都民のみなさんのモラルも向上してきた。時代の流れの中ではゴミ問題については、だれもが意識が強くなり、昔ほどのゴミというのはなくなってきているように思う。
- ◇普段のゴミ出しが、ゴミ拾いの時の集積の出し方で。全部最後の集積所までもってこないが、途中途中に置かせるとそこがゴチャゴチャになる。
- ◇上流に住んでいて、我々が汚せば下に行ってどんどん汚れていくんだということで、石鹸だとか洗剤だとかみんな気を使っている。ところが、中流以降の人たちは全然気をつかわない。
- ◇モラルの問題に関わってきていると思う。捨てる人たちは拾う人の10倍はいると思う。参加人数2000人いるうちのね。これが逆転すればきれいになる。

<協力関係・サポートについて>

- ◇青梅市の環境衛生に、「捨てるな」という看板を立ててくれという要請をすれば、立ててくれる。
- ◇軍手だとか、タオル、ゴミ袋、そういったものは市で全部支給してくれる。
- ◇自分たちはイベントではなく、清掃を主でやりたかった。それについて、地元のPTAが「おもしろいイベントがあるから、それに行くというわけではない。清掃をさせてくれ」という姿勢でサポートしてくれた。
- ◇建設省には悪いけど、建設省さんが我々市町村やボランティアに頼りすぎている。管理責任を放棄している。しかし、最近は変わってきている。草刈りをするようになってきた。
- ◇袋だとか手袋をくれるだけでもたいへん助かる。
- ◇こういう定着した市民の環境に関する活動は、市が関わっていかなくてはと思う。市が手をひいたら、必ず止まります。
- ◇ゴミ袋、軍手、記念品の文具類を建設省からもらっている。
- ◇本来建設省がしなくてはならない仕事をボランティアでやっているのも、もう少し協力してもらおうと働きかけをした。一昨年からは、ごみの袋とか軍手などは、建設省も事前に状況把握をして協力してくれるようになった。

<プラスαの活動について>

- ◇夏休みに入る前にはPTAで川をみたりする。
- ◇遊歩道なんかは、草刈りもします。
- ◇一年間水温調査もやった。
- ◇スキューバダイビングの連中もみんな川の中に潜らせて、川の中まで洗っちゃおうということで、粗大ゴミだけはさらった。
- ◇川を歩く会とか、史跡を訪ねる、植物を訪ねる会なども実施している。
- ◇子供たちの水質調査なんかもやっている。
- ◇多摩川では早く清掃を終えて、会場を使いたいという方ばかりですから、他のイベントというのはあまりしない。
- ◇多摩川の水質検査は20数年間やっている。多摩川の市町村が年2回、東京都にかけあって一年中水を流してもらいたいという要望をだした。

<川との関わり、川の管理？について>

- ◇自分の育ったころは、自然に近いのが普通の状態だった。その普通の道理をどこにおくかっていう問題だと思う。多摩川も以前に比べてきれいになったらしいが、実際に潜ってみるとすごく汚い。ドブの匂い、白い浮遊物。よくこんな所に魚がいると思う。表面的にはきれいになった、でもそれでいいのか、と思う。

- ◇コンクリートを使ったり、そういうのが、川の整備だと思っているから困っちゃう。
- ◇川が悪くなり、自然の魚が少なくなり、動物がかなり追われていることを感じる。そういう意味でいうと、日本の開発優先の状況というものに対して、なんらかのことを考えていかないと、まずいと思う。例えば長良川河口堰なんて、うんと問題だと思いますね。
- ◇自然の中で川をどういう風にしていくかという思想がたいへん遅れている。
- ◇川をきれいにしようという問題と、その意味も含めて川をきちんと管理するという、管理するのはだれか、どういう権限でやるのかということと同時に考える必要がある。要するに論理的な問題と法律的な問題も併せて考えていかねてはならない。
- ◇自分たちはゴミだけのことを考えているわけではないから、自然をいかに残すかということに大切にしている。回りをコンクリで固めてしまっっては、自然の浄化作用も働かない。いかに土と接点を持っていくかが非常に難しい点である。

#### <ゴミの減量化について>

- ◇不燃で全部巻き込んでしまったら、ゴミは減らないんです。燃やせるものは、燃やすんじゃないとね。ビン缶だったら、リサイクルするんだという論で拾ってないとね。
- ◇建設省が管理する河川敷の清掃も引き受けるというのはすごくつらいものがある。ゴミの半分くらいは、埋め立て処分にいくことになる。多摩川清掃をこの3年間やらなければ、10トンくらい減るのに、と思いますよ。
- ◇多摩川に落ちているビン・缶は資源化できません。

## 結果からの考察

河川利用者のゴミについての意識は、川を汚すものとして不快感や問題意識をもっている人が多いが、その状況にたいして自分自身が積極的な活動をして改善しようという考えはほとんど見られない。むしろ河川利用者のマナーや自覚に促すべき問題ととらえている。

対応策としては、意識改革や持ち帰りを促す事といった啓蒙啓発が有効であるとの意見が圧倒的に多い。次いでゴミ箱の設置や増加という設備面での対策があげられている。

他には教育を通じて訴える、ゴミ拾い、罰金制度、監視員を置くなどの意見もあった。全般的に個人のモラルやマナーの問題であるとの見方から、その向上につながるような方策が有効なのではないかと考えている。

裏返せば、ポイ捨てをする可能性がある河川利用者自身が、啓蒙啓発活動によって、意識が向上するものと認識しているといえるわけで、従来の啓発活動にはまだまだ工夫の余地があるものといえるだろう。

川そのものや川の水については、汚くなったとの認識が41、3パーセントとなっており、多摩川によく訪れるあるいはまた来ようと思っはいるが『もっときれいであってほしい』と願っているといえよう。

河川利用者の割合は男女比では男性7割、女性3割であり、都区内からの利用者が5割を占めている。利用目的では釣・バーベキュー・散歩がそれぞれ約2割、あとは日焼けや写真撮影、スポーツ、俳句など多岐にわたっている。

散乱ゴミ対策の一つである河川清掃などへの関心は約3割で、4割の人は実際に参加経験もあるが無関心という人も同様にほぼ3割であり、必ずしも関心度が高いわけではないことがあきらかであった。

要は川は汚くないほうが好ましいし、今後とも多摩川を利用したいと考えてはいるが、自らが積極的に清掃などの活動に参加しようという人はせいぜい3割ということになる。一方で、ゴミ問題は改善すべき（改善してほしい）とも思っており、その方法としては幅広い啓蒙活動があげられている。

清掃活動実施団体へのヒアリングでは、活動以前の状態に比べれば、定期的に清掃したり行政に働きかけてきた結果一定以上は悪くならず済んでいるとの指摘が複数あった。しかし、ゴミが捨てられなくなったわけでもなく、定期的活動がなされている場所とそうでない所では差が大きいし、活動自体もマンネリ化や参加者の減少に悩む面も見られる。しかし、IVUSAやアマチュア無線協会のように格別多摩川だけを活動地域としていない団体であっても、多摩川での清掃を実施していることを考えると、多くの流域人口を抱え様々な利用者が訪れる川であるだけに、流域住民による『住民運動』型の活動のみに依存しなくても、こうした活動に関心をもつ人は潜在的に多いものと思われる。

住民や地域行政が一体となって展開する活動による基礎的な効果と、『川に遊びに来る』人全体を対象とした啓蒙啓発活動が重層的に作用すれば、波及効果が大きくなるだろう。



自治体担当者へのヒアリングでは、まず河川の散乱ゴミ対策の責任はどこが（誰が）負うのかという基本的なところで、現状への疑問や課題が噴出した。

（東京都建設局河川部では、直接清掃活動やゴミの回収処理を実施しているわけではなく建設事務所や委託業者に依頼しているという状況のためか、抽象的な話を聞くにとどまった）

ゴミの回収処理は市町村が担うこととなっているが、河川管理者である建設省や都、あるいはゴミの元となる様々な商品を売っている企業の責任はどうなるのかという問題。ゴミ減量が切迫した課題であるのはどこの市町村も同様だが、家庭や事業所にゴミの減量と呼び掛けて協力を仰ぐ一方で、河川清掃などで集められた大量のゴミ（しかも分別が不徹底であることも多い）が搬入される現実が生む困惑。

さらに河川のゴミの場合は、観光客による持ち込みなど他地域からの流入ゴミが多く、『他人のゴミを処理させられている』憤りもうかがえる。

地域団体や住民団体による清掃活動は、いずれも古い歴史を持ち各地に根付いていると言える。町内会やスポーツ団体を通じて動員をかけ、団体ごとにとりまとめを行うという形式で実施され、全体調整をはかる組織は『実行委員会』などの名称で連絡窓口が市の担当課に置かれているケースが多い。『美化清掃活動』の位置付けであって、河川環境全般についての意識向上やマナー啓発が積極的に行われているわけではない。

これらの活動は概ね早朝に実施されるため、他地域から来る河川利用者が清掃に参加するチャンスは少ないと考えられる。したがって、各地で問題視されている持ち込みゴミの原因者に対しては、地元の清掃活動だけでは直接的な働きかけとはなりにくい。

ゴミの置き捨てなどがひどい場所では、建設省に許可をとって『ゴミを捨てないで』『ゴミは持ち帰ろう』などの看板を設置しているが、逆効果となる皮肉な結果もあるようだ。

14~15年前まではゴミを拾って集めて処理して終りだったが、『ゴミ減量』という大きな課題が目前に差し迫っている現在では、拾い集める段階でできる限り分別し、リサイクル可能なものはそのルートに乗せる努力が必要になっている。

また、河川のゴミは、河川敷への車の乗り入れなど、利用形態とも深く関連している。『縦割り』と言われる行政の仕組みでは解決しにくい問題が山積しているのである。

行政の担当窓口から見ると、散乱ゴミのもつ問題が処理方法、減量、リサイクル、コスト、河川利用など様々な視点で浮き彫りになる。散乱ゴミ問題を解決に導くためには、それぞれの視点からの問題点を総合的に検討していかなければならない。

## 今後の課題

河川におけるゴミ拾いの効果・効用は、

- ◇ゴミをその場所から取り除いて景観を美しく保つ
- ◇きれいにしておくことにより、ゴミを捨てにくくする
- ◇清掃活動参加者の河川環境への関心が高まる

などがあげられる。地方自治体や地域団体、ボランティアグループや個人などたくさんの人々が清掃活動に取組み、その甲斐あって、河川における散乱ゴミの現状が一定以上は悪くならず、済んでいることも明らかである。だが、一向にゴミは無くならず、モラルやマナーの問題にいたっては悪化の傾向すらみられる。『拾ってきれいにする』方法の限界とも言えるのではないか。

また、地域住民には清掃活動への参加を呼び掛けることにより、意識の向上を促すことができるが、他地域からの河川利用者に対する啓蒙啓発としては、別途の工夫が求められる。

さらにボランティア活動などでは力の及ばない粗大ゴミや不法投棄ゴミの問題については、これまでのように見苦しい状況になってから業者に委託して回収させるやり方だけでは『捨て得』の現状を打破できない。

散乱ゴミに限っても、捨てる側（あるいは捨てるやすい状況）と捨てる側とする側の大きな隔たりをどう埋めていくかがポイントとなる。

3割の人が川のゴミになんらかの関心がありながら、結局は人ごとになってしまっているのならば、『清掃』『ボランティア』といった従来型の活動形式にとらわれない新たな視点が必要なのではないか。

すなわち『汚いのはいやだが、自分が片付ける気にはならない』大多数の人々に対して、予め情報を提供する仕組みを作り、ゴミを生まない状況を築いていく方法が有効ではないかと思われる。

いろいろな立場の関係者が十分に論議するのが前提となろうが、河川利用のルール化や、バーベキューやキャンプのようにブームが急速に加熱している新型のレジャーについてはマナー講習を行って利用者を教育するという事も考えられる。場合によっては監視制度や罰則規定が効を奏することもあるだろう。

いずれにせよ、単に美観やモラルの問題のみにこだわらずに、総合的な観点にたって、十分に論議できる場作りが急務であると考えられる。

そして言うまでもないことだが、大きな『環境』というくくりの中で考えていかななくては、部分的な解決にしかならず、次世代に課題を積み残すことになってしまう。大雨が降れば上流のゴミは下に流されて見えなくなるが、無くなるわけではない。清掃が万全の策ではなくなった現在、ゴミの由来から行く末までを見渡した上での対応が求められている。

---

「<sup>た</sup>まがわ <sup>か</sup>せんせいそう <sup>れ</sup>まし <sup>い</sup>っせいせいそう <sup>じ</sup>っし <sup>さん</sup>かし。  
多摩川の河川清掃についての歴史と一斉清掃の実施による参加者  
<sup>い</sup>しき <sup>さん</sup>らん <sup>じ</sup>ったい <sup>ち</sup>ょうき  
の意識と散乱ゴミの実態についての調査」(研究助成・B類 NO.99)

著者 小島 あずさ  
発行日 1997年3月31日  
発行 財団法人 とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141

---